

# 5. 昆虫類

## 《概要》

この仲間は莫大な種数をかかえ、県内では既知種数さえ把握できていない群が多い。同好者が多く、県内の生息状況が比較的良好にわかっているのはチョウとトンボの2群くらいであるが、その後、他のいくつかの分類群でも網羅的なリストが出て、知見は徐々に増大しつつある。過去10年間では水生昆虫の同定に役立つ地域単位（林 2013a, 2015a,b, 2016, 2017 など）、あるいは全国的な図鑑（中島ら 2020）が出版されたお蔭か、以前とくらべると水生半翅目や水生甲虫では知見がかなり充実してきた。また、短報のみでなく、地域単位で記録をまとめた報告（林 2013a,b; 林・門脇 2013a-g; 田中ら 2014; 吉富・林 2016; 江澤・鶴崎 2015; 尹・鶴崎 2016; 鶴崎ら 2016b など）や、これまで不足していたガ類のまとめた記録の公表（矢野 2014; 松井 2012–2016; 田村 2015 など）、また、大きなコレクションの採集データの資料がいくつか（淀江 2014; 淀江ら 2017; 日暮・岡 2017）出版されたことは喜ばしいことである。

今回の選定種は全体では222種（前回は137種、前々回は109種）、このうち絶滅が12種（前回は7種、前々回は5種）、絶滅危惧Ⅰ類14種（前回は16種）、絶滅危惧Ⅱ類41種（前回は29種）、準絶滅危惧92種（前回は44種）、情報不足56種（前回は34種）、その他の重要種6種（前回は7種）で、85種が今回初めて掲載される種である。前回の掲載種のうち次の7種は、今回は選定種からはずされた：ムカシヤンマ、ダイセンササキリモドキ、ハマベツチカメムシ、アカマダラハナムグリ、シナミズメイガ、モンホソバズメ、トビイロアカガネトウ。これらは、現在は安定して生息すると判断されたか、「その他の保護上重要な種」のランクの定義の厳密化等にもなうものである。

チョウは県内に120種（迷チョウを入れると127種）が記録されている。チョウは人目につく昆虫で愛好家も多く、他の動物群にくらべると生息情報が充実している。また移動力があるため環境変化に即応して短期間での分布域の拡大、縮小、シフトがあらわれやすいという特徴をもち、動物相の時間的変化をモニタリングするのに適した動物である。

生息域や個体数が減少傾向でレッドリスト掲載に該当する種は山地草原性種を中心に多数みられ、今回は鳥取県産種の35%にあたる42種（前回は39種）がそのような種として挙げられた。内訳は「絶滅」および「野生絶滅」が4種（ヒョウモンモドキ、オオウラギンヒョウモン、シータテハ、ウスイロヒョウモンモドキ）（前回は4種）、「絶滅危惧Ⅰ類」11種（ホシチャバネセセリ、スジボソヤマキチョウ、ウラナミアカシジミ、クロシジミ、シルビアシジミ、ゴマシジミ、ウラギンスジヒョウモン、メスグロヒョ

ウモン、ウラナミジャノメ、ヒメヒカゲ、キマダラモドキ：前回は9種）、「絶滅危惧Ⅱ類」7種（前回は7種）、「準絶滅危惧」19種（前回は18種）、「その他の保護上重要な種」1（オナガシジミ、前回は1種）である。

ウスイロヒョウモンモドキは鳥取市佐治町三原台が最後の生息地で当地では地元の団体やチョウ類保全協会の専門家が積極的な保全活動を推進してくださっていたが、残念ながらシカ害の進行で個体群の回復にはいたらず「野生絶滅」となった。ニホンジカによる林床植物の食害は県東部の若桜町・智頭町を中心に広がっており、これらの地域ではウスバシロチョウも食草の消滅により激減している（このため今回、新規に「準絶滅危惧」で掲載）。他の群の昆虫ではまだきちんと把握されていないが、どのようにシカ害に直接・間接の影響を受けて個体数が激減している昆虫は多数あると推測される。

トンボは県内に88種が記録されている。本類では今回は24種（前回は24種）がレッドリスト掲載種として選定された。内訳は絶滅種3（コバネアオイトトンボ、ナニワトンボ、マイコアカネ。前回は2種）、絶滅危惧Ⅰ類1種（ムスジイトトンボ、前回は3種）、絶滅危惧Ⅱ類7種（前回は8種）、準絶滅危惧10種（前回は8種）、その他の保護上重要な種2種（アサヒナカワトンボ、ニホンカワトンボ、前回は2種）、情報不足1種（オツネイトトンボ、前回は2種）である。

トンボ保全における過去10年間の重大問題としては2012年3月から県と鳥取市が実施した湖山池汽水化に触れないわけにはゆかない。湖山池はトンボ23種のほかタガメなども記録されていた水生昆虫の重要生息地であったが（轟・鶴崎 2015）、汽水化に対して他の方策を検討するよう求める県内の動植物の専門家の意見もあった中で事業が強行され、湖山池に生息していたトンボを含む水生昆虫全種を絶滅させた（尹ら 2015; 鶴崎 2020b）（湖山池に接するピオトープ池などではまだ6種は見つかるが、これらはもともと湖山池本体から羽化する種ではない）。湖山池本体に生息し春から夏に岸辺に多くの羽化殻を残していたウチワヤンマは2012年8月まではまだ羽化が見られたが、2013年には消滅した（尹ら 2015; 鶴崎ら 2016）。レッドリスト掲載種で湖山池またはその周辺のヨシ原が発生地であったと考えられる種としてはネアカヨシヤンマがあったが、本種の生息が復活する望みは湖山池については完全に消滅した（永幡・日暮 2017; 鶴崎 2020b）。なお、最近、ネオニコチノイド系農薬が節足動物相を破壊し、魚類の減少を招いているという報告が出ている（山室 2021）。ネオニコチノイド系農薬は鳥取県でも使用されているようであ

り、これがトンボ類をはじめとする水生昆虫を中心に、山野の昆虫類の個体数減少を招いている可能性がある。もしそうであれば早急の規制が必要であろう。

甲虫(鞘翅目)は64種(今回は32種)が選定された。内訳は絶滅が4種(ハラビロハンミョウ, ダイコクコガネ, フサヒゲルリカミキリ, アサカミキリ, 前回は1種), 絶滅危惧Ⅰ類が2種(ゲンゴロウ, ミヤマダイコクコガネ, 前回6種), 絶滅危惧Ⅱ類17種(前回9種), 準絶滅危惧25種(前回4種), 情報不足15種(前回10種), その他の重要種1種(前回2種)である。新規掲載種で多いのは水生甲虫である。前回絶滅危惧Ⅰ類で鳥取県希少野生動物にも選定されているコガタノゲンゴロウは近年、全国的に増加傾向で、鳥取県でも同様であることから今回はランクを下げての掲載となった(絶滅危惧Ⅱ類)。いっぽうハラビロハンミョウは最後の確認地であった2カ所で消失しており、「絶滅」と判定された(鶴崎ら2015)。鳥取砂丘でハラビロハンミョウの営巣地であったと考えられるオアシス周辺にはエリザハンミョウの営巣もみられるが、観光客の立ち入りの増加で本種も心配されたため2015年から当地では標識再捕による個体数調査が継続されている(鶴崎ら2016a)。われわれが保全のための調査を行っている一方で、2016年夏に打ち出された観光振興策により砂丘内に立ち入る観光客が急増した。2017年は成虫発生時期の少雨に加え観光客の急増が影響し、個体数推定値は危機的レベルにまで減少した。そこで2018年春には鳥取砂丘事務所と環境省により営巣地への立ち入り規制のロープ囲いが施されたが減少は止まらなかった(鶴崎ら2016a-2018; 鶴崎2020a)。しかし、コロナ対策で春から立ち入りが規制されていた2020年には踏圧が減少したおかげか個体数はわずかに回復し(鶴崎2021)、同様にコロナ問題で観光客の入り込みが少なかった2021年の調査ではさらに増加した(唐沢重考氏私信)。

国立公園特別保護地区である鳥取砂丘は、カワラハンミョウやニッポンハナダカバチ, コウベキヌゲハキリバチ, ホクダイコハナバチ, キマダラルリツバメなど22種ものレッドリスト選定種が生息する絶滅危惧種のホットスポットであるが(鶴崎ら2020), 現在, 鳥取市などが企画している砂丘西側への観光客誘導はこれらの絶滅危惧種へ強い負の影響を与える可能性がきわめて高い。鳥取県や鳥取市, 観光事業者は, 大規模集客イベントが希少野生動物の生息・生育に負の影響を与える可能性を考慮し, 今後はいっそう鳥取砂丘の希少動物の保全についてきちんとした対策を施すべきである。

(鶴崎展巨)

## ■引用文献

江澤あゆみ・鶴崎展巨(2015)鳥取県における海浜性ウスバカゲロウ類の分布. 山陰自然史研究, 11: 45-53.  
 林 成多(2013a)鳥根県と鳥取県西部のアリジゴク. ホシザキグリーン財団研究報告, 16: 189-205.  
 林 成多(2013b)鳥根県東部と鳥取県西部の湿岩に生息する水生昆虫調査. ホシザキグリーン財団研究報告, 16: 301-308.

林 成多・門脇久志(2013a)鳥取県大山のシデムシ科. ホシザキグリーン財団研究報告特別号, 10: 1-6.  
 林 成多・門脇久志(2013b)鳥取県大山のホタル科とホタルモドキ科. ホシザキグリーン財団研究報告特別号, 10: 7-13.  
 林 成多・門脇久志(2013c)鳥取県大山のナガハナノミダマシ科. ホシザキグリーン財団研究報告特別号, 10: 15-17.  
 林 成多・門脇久志(2013d)鳥取県大山のウスバカゲロウ科. ホシザキグリーン財団研究報告特別号, 10: 19-25.  
 林 成多・門脇久志(2013e)鳥取県大山のベニボタル科. ホシザキグリーン財団研究報告特別号, 10: 27-35.  
 林 成多・門脇久志(2013f)鳥取県大山のジョウカイボン属. ホシザキグリーン財団研究報告特別号, 10: 37-44.  
 林 成多・門脇久志(2013g)鳥取県大山の水生昆虫. ホシザキグリーン財団研究報告特別号, 10: 45-89.  
 林 成多(2015a)山陰地方産水生甲虫 図鑑Ⅰ 甲虫類(1). ホシザキグリーン財団研究報告特別号, 15: 98 pp.  
 林 成多(2015b)山陰地方産水生甲虫 図鑑Ⅱ 甲虫類(2). ホシザキグリーン財団研究報告特別号 16, 103 pp.  
 林 成多(2016)山陰地方産水生昆虫図鑑Ⅲ 甲虫類(3). ホシザキグリーン財団研究報告特別号, 18: 1-113.  
 林 成多(2017)山陰地方産水生昆虫図鑑Ⅳ 半翅目・甲虫類(補遺). ホシザキグリーン財団研究報告特別号, 19: 1-86.  
 日暮卓志・岡 義人(2017)岡義人コレクションのコガネムシ. すかしば, 64: 1-4.  
 北山 拓(2015)2014年の鳥根県・鳥取県における飛来アカトンボの記録. すかしば, 62: 51-54.  
 松井悠樹(2012)鳥取県東部で採集した蛾類Ⅰ. ゆらぎあ, 30: 1-12.  
 松井悠樹(2013)鳥取県東部で採集した蛾類Ⅱ. ゆらぎあ, 31: 22-33.  
 松井悠樹(2014)鳥取県東部で採集した蛾類Ⅲ. ゆらぎあ, 32: 30-46.  
 松井悠樹(2015)鳥取県東部で採集した蛾類Ⅳ. ゆらぎあ, 33: 16-28.  
 松井悠樹(2016)鳥取県東部のフユシャク類. ゆらぎあ, 34: 13.  
 永幡嘉之・日暮卓志(2017)鳥取県におけるネアカヨシヤンマの採集記録. すかしば, 64: 5.  
 中島 淳・林成多・石田和男・北野忠・吉富博之(2020)ネイチャーガイド. 日本の水生昆虫. 文一総合出版(東京), 351 pp.  
 野津幸夫・阪本優介(2017)伯耆大山で主に昼間採集した蛾類Ⅰ. ゆらぎあ, 35: 1-6.  
 田村昭夫(2015)鳥取県大山東部山麓のガ類. ゆらぎあ, 33: 1-15.  
 田中宏卓・山根大河・山口勇人(2014)久松山(鳥取市)とその周辺地域における2012年のチョウ類の記録. 山陰自然史研究, 10: 1-5.

- 轟 裕明・鶴崎展巨 (2015) 汽水化以前 (2003 年) の鳥取市湖山池とその周辺のトンボ相. 山陰自然史研究, 11: 1-14.
- 鶴崎展巨 (2020a) エリザハンミョウ鳥取砂丘集団の個体数の危機的な減少. —2018 年の標識再捕調査結果—. 山陰自然史研究, 16: 1-7.
- 鶴崎展巨 (2020b) 杜撰・非科学的・悪質な行政が招いた最悪の自然破壊—湖山池汽水化—. pp. 203-207. In: 鳥取県・鳥取市 (汽水化に伴う湖山池の環境等の変化に関する調査報告書, 213 pp.
- 鶴崎展巨 (2021) 鳥取砂丘の希少昆虫 (ハンミョウとアリジゴク) の生態学と保全. 海洋と生物, 43(1): 50-57.
- 鶴崎展巨・川上大地・太田嵩士・藤崎謙人・坂本千紘 (2015) 鳥取砂丘におけるハンミョウ類の分布・生活史と1種の絶滅. 山陰自然史研究, 11: 33-44.
- 鶴崎展巨・岡田 叡・杳野高也・深澤豊武・湯本祥平 (2016a) 鳥取砂丘におけるエリザハンミョウの個体数推定 (2015 年). 山陰自然史研究, 13: 1-10.
- 鶴崎展巨・中山 桂・板井竜二郎・井上健人・柏木峻秀 (2016b) 山陰海岸ジオパークエリア内における海浜性ウスバカゲロウ類の分布. 山陰自然史研究, 13: 11-24.
- 鶴崎展巨・尹 振国・岩本真菜 (2016c) 湖山池におけるウチワヤンマ生息最終年の羽化. 山陰自然史研究, 13: 37-44.
- 鶴崎展巨・唐沢重考・柴田祥明・飯田礼康・越田佳苗・塚本鍊平・長谷川和樹・福井順也・村瀬真史・和田将典 (2017) 鳥取砂丘におけるハンミョウ2種の成虫の季節消長とエリザハンミョウの個体数推定 (2016 年). 山陰自然史研究, 14: 9-16.
- 鶴崎展巨・唐沢重考・石川智也・猪野真也・岸田由幹・白岩颯一郎・千葉悠輔・服部理貴・福井二葉・武藤 諒 (2018) エリザハンミョウ鳥取砂丘集団の急激な個体数減少—2017 年の標識再捕調査結果—. 山陰自然史研究, 15: 7-14.
- 鶴崎展巨・唐沢重考・石川智也・猪野真也・岸田由幹・白岩颯一郎・千葉悠輔・服部理貴・福井二葉・武藤 諒 (2020) 鳥取砂丘の希少ハチ類数種の記録とニッポンハナダカバチの営巣地. 山陰自然史研究, 16: 9-22.
- 山室真澄 (2021) 魚はなぜ減った? 見えない真犯人を追う. つり人社 (東京), 127 pp.
- 矢野重明 (2014) 鳥取県西部産蛾類資料 [6]. ゆらぎあ, 32: 19-30.
- 尹 振国・鶴崎展巨 (2016) 多鯰ヶ池と鳥取市大塚のため池のトンボ相. 山陰自然史研究, 13: 25-35.
- 尹 振国・岩本真菜・鶴崎展巨 (2015) 塩分導入による湖山池のトンボ群集の崩壊. 山陰自然史研究, 11: 15-32.
- 淀江賢一郎 (編) (2014) 中村泰士博士蝶類コレクション目録. 中村裕子 (益田市匹見町), 118 pp.
- 淀江賢一郎・田中宏卓・川上 靖 (2017) 三島寿雄先生の蝶類研究と日本産蝶類コレクション—その特徴と意義—. 鳥取県立博物館研究報告, 54: 1-75.
- 吉富博之・林 成多 (2016) 島根県と鳥取県のメダカハネカクシ. ホシザキグリーン財団研究報告, 19: 209-216.

## アオハダトンボ トンボ目カワトンボ科

*Calopteryx japonica* Selys, 1869

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



オス 南部町城山 2017.6.19 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：県内の分布は広いが生息地が局所的であり、個体数が少ない。河川環境の変化によって激減する恐れがある。

■**特徴**：全長 60 mm 内外。体全体が緑色で金属光沢があり、翅が黒い。オスは翅全体に青藍色の光沢があり、腹端の下部が白くなる。メスの翅は褐色味がかっていて白い偽縁紋があり、よく似たハグロトンボとの識別点となる。成虫は初夏に出現する。岸辺に植生があり、水のきれいな砂底の河川の中流域に局所的に生息する。

■**分布** 県内：県内全域の河川の中流域。県外：本州と九州に広く分布するが、産地は限られる。海外ではロシア、中国、朝鮮半島に分布。

■**保護上の留意点**：類似種であるハグロトンボと比べると分布域が局所的であり、より自然度が高い流水環境を好む傾向がある。水質の悪化を防止することと、河川改修で川底や岸辺の構造を改変する際には砂底と植生の保全が重要。

■**文献**：25, 50, 109, 118, 297.

執筆：桐原佳介

## アサヒナカワトンボ トンボ目カワトンボ科

*Mnais pruinosa* Selys, 1853

鳥取県：その他の重要種 (OT)

環境省：—



透明翅雄 岩美町唐川湿原 1993.6.10 / 撮影：鶴崎展巨

■**選定理由**：翅色型が異なる 2 つの地理型の分布境界が存在し、両型は種分化や生態、分布形成過程を解明するうえで重要な地域個体群である。

■**特徴**：本種はかつて鈴木がニシカワトンボ、ヒウラカワトンボとよんだものに相当する。体長 50 mm 前後。成虫は 5-6 月に溪流で見られ、下流部のニホンカワトンボとすみ分ける。県内には橙色翅型雄 + 透明翅型雄 + 透明翅型雌の「南海群」と透明翅型雄 + 透明翅型雌の「ヒウラ群」の 2 型がみられ、県東部で分布域を交替させ、両者の移行帯では溪流別あるいは上下流のすみ分けや中間的な個体が観察され、今後の推移が注目される。

■**分布** 県内：県内全域。鳥取市鹿野町付近から東に「ヒウラ群」、西に「南海群」が生息。県外：本州（関東平原地部、新潟以西）、四国、九州。

■**保護上の留意点**：移行帯である鳥取市（鹿野町・佐治町栃原）、三朝町中津付近の集団が重要である。

■**文献**：21, 70, 270, 299, 301.

執筆：鶴崎展巨

## ニホンカワトンボ トンボ目カワトンボ科

*Mnais costalis* Selys, 1869

鳥取県：その他の重要種 (OT)

環境省：—



橙色翅雄 鳥根県雲南市殿河内 2016.5.12 / 撮影：大浜祥治

■**選定理由**：翅色型が異なる 2 つの地理型の移行帯が存在し、両型は生態や分布形成の過程を解明するうえで重要な地域個体群である。

■**特徴**：DNA による系統解析でオオカワトンボ（前回はこの名称で掲載）はニホンカワトンボと名称変更された。体長 55-60 mm。成虫は 5-6 月に中流域に見られ、上流部のアサヒナカワトンボとすみ分ける。県内には橙色翅型雄 + 淡橙色翅型雄 + 透明翅型雄 + 淡橙色翅型雌 + 透明翅型雌の「中国群」と橙色翅型雄 + 淡橙色翅型雌 + 透明翅型雌の「中部群」の 2 型が見られる。両群の移行帯では西から東へ透明翅型雄が次第に減り、淡橙色翅型雌が増える。また、中国群にはアサヒナカワトンボの「南海群」、中部群には「ヒウラ群」が同所的に（アサヒナのほうが上流側に分布）対応する。

■**分布** 県内：県内全域。千代川以東に「中部群」、天神川以西に「中国群」が分布し、それらの中間が移行帯となる。県外：北海道、本州、四国、九州、隠岐。

■**保護上の留意点**：移行帯の鳥取市（鹿野町・青谷町）の集団が重要。

■**文献**：21, 71, 73, 299, 300.

執筆：鶴崎展巨

**コバネアオイトトンボ** トンボ目アオイトトンボ科  
*Lestes japonicus* Selys, 1883

鳥取県：絶滅 (EX)  
環境省：絶滅危惧ⅠB類 (EN)



半成熟雄 鳥取県大田市五十猛町 2015.8.15 / 撮影：北山 拓

■**選定理由**：県内の過去の記録が2例しかなく、1991年倉吉市での1雄確認以来30年以上記録が途絶えているうえ、近隣地域の激減状況からも本県では絶滅したものとみられる。

■**特徴**：全長40mm内外。金緑色が鮮やかな中型のイトトンボ。県内に生息するアオイトトンボ属3種中、最小である。平地から丘陵地にかけて、ヨシなどの抽水植物が生育する自然度の高い池沼に生息する。初夏の頃に羽化し、秋遅く11月頃までみられる。

■**分布** 県内：鳥取市岩倉と倉吉市勝負谷の2カ所で記録されているのみ。県外：国内では青森から鹿児島までほぼ全県に分布するが、いずれの地域でも減少傾向が著しく、絶滅した地域も少なくない。国外では、朝鮮半島、中国、ロシア沿海州地域に分布。

■**保護上の留意点**：里山に囲まれた植生豊かで比較的大きなため池でみられるが、わずかな環境変化が本種の生息に大きな影響を与えるらしく、同所的に生息する他種に先駆けて姿を消す。新たな産地が発見された場合は、ため池周辺の環境も含めた保全が必要である。

■**文献**：99, 129.

執筆：大浜祥治

**オツネイトンボ** トンボ目アオイトトンボ科  
*Sympecma paedisca* (Brauer, 1877)

鳥取県：情報不足 (DD)  
環境省：—



交尾 鳥取県大田市五十猛町 2016.4.9 / 撮影：北山 拓

■**選定理由**：1950年代の日野郡における記録が唯一であるが、近隣地域の状況から分布は確実と思われ、情報不足とした。

■**特徴**：体長35-40mm内外。雄雌とも全身淡褐色をした地味な色調である。体色は成熟してもほとんど変わらないが、成熟雄では複眼背面が青みをおびる。未成熟のホソミオツネイトンボとよく似るが、本種では閉じた翅の縁紋が重ならないことなどで区別できる。平地から丘陵地にかけての抽水植物が生育する開放的な池沼に生息する。初夏に羽化した個体は成虫で越冬し、翌春、交尾・産卵などの生殖活動を行う。

■**分布** 県内：日野郡の記録が唯一。近隣府県の状況から、生息の可能性は十分あると思われる。県外：北海道から本州、四国、九州北部まで分布するが、西日本では分布が限られ、絶滅した県もある。国外では、朝鮮半島、中国、ロシアなどユーラシア大陸の北部に広く分布。

■**保護上の留意点**：生息に適する開放的で植生豊かな池沼の保全。新たな生息地の発見が期待される。

■**文献**：56.

執筆：大浜祥治

**モートンイトトンボ** トンボ目イトトンボ科  
*Mortonagrion selenion* (Ris, 1916)

鳥取県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)  
環境省：準絶滅危惧 (NT)



成熟雄 西伯郡南部町御内谷 2014.6.11 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：県内の分布がきわめて限られ、また全国的にも減少傾向が著しく絶滅した地域も少なくない。

■**特徴**：体長25-30mm内外。県内に生息するイトトンボ科の中では最小。雄では腹端部の鮮やかなオレンジ色が目立ち、頭部には三日月状の眼後紋がある。未成熟な雌は全身が橙黄色であるが、成熟につれ明るい黄緑色へと大きく変化する。初夏のころが最盛期。交尾は早朝に行われ、産卵は雌単独で水辺の植物組織内に行う。

■**分布** 県内：かつて1950年代の鳥取市付近の記録が唯一であったが、近年になって西伯郡南部町で生息地が発見された(桐原, 2012)。県外：北海道南部から九州まで広く分布するが、全国各地で激減している。国外では、朝鮮半島、中国、ロシア極東地域などに分布。

■**保護上の留意点**：平地から低山地の湿地的環境に生息するが、乾燥化・草原化が進み姿を消す例が多い。生息に適した湿地や水田環境の維持に留意する必要がある。

■**文献**：92, 99.

執筆：大浜祥治

## ムスジイトンボ トンボ目イトトンボ科

*Paracercion melanotum* (Selys, 1876)

鳥取県：絶滅危惧I類 (CR+EN)

環境省：—



オス 米子水鳥公園 2021.8.21 /  
撮影：公益財団法人中海水鳥国際交流基金財団（桐原佳介）

■**選定理由**：県内の生息地がきわめて局所的であり、個体数が少ない。多産地である米子水鳥公園で減少が著しい。

■**特徴**：全長 35 mm 内外。成熟したオスは全身鮮やかな青色で、腹部背面が腹節前縁と腹端の3節を除いて黒い。メスは全身が淡緑色。肩の黒条内に細い淡色線が入るが、オスには入らないものもいる。翅は透明。セスジイトンボと酷似するが、眼後紋やオスの上付属器の形状等で識別できる。沈水植物が繁茂する開放的な平地の池沼などに生息する。塩分が薄ければ汽水環境でも生息可能。

■**分布** 県内：東伯郡湯梨浜町天神川、米子市、境港市で記録がある。県外：宮城県以南の本州、四国、九州、琉球列島。日本海側では北陸地方以西の一部に限られる；朝鮮半島、中国、台湾、ベトナム。

■**保護上の留意点**：米子水鳥公園における減少傾向は、地盤沈下に伴う池の塩分の上昇が影響している可能性がある。産卵基質となる沈水植物が豊かな止水環境の保全が重要で、汽水環境においては塩分の変化に伴う植生の変化に注意を払う必要がある。

■**文献**：50, 109, 164, 233, 265.

執筆：桐原佳介

## アオヤンマ トンボ目ヤンマ科

*Aeschnophlebia longistigma* Selys, 1883

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



成熟雄 鳥根県出雲市多伎町久村 2018.6.2 /  
撮影：大浜祥治

■**選定理由**：生息地がきわめて限定され、東部の平野部からのみ記録されている。1980年に鳥取市多鯰ヶ池で複数個体が採集されて以来、長期間記録が途絶えている。

■**特徴**：体長 70–75 mm 内外。雄雌とも全身が鮮やかな緑色の中型のヤンマ。初夏の頃を中心に8月頃までみられる。平地から丘陵地にかけて、ヨシやガマなど抽水植物の多い池沼に生息。成熟した雄は、日中、池沼のヨシ原を縫うように飛翔するのが観察される。黄昏時は、他のヤンマに交じって高所を飛翔する。本種とネアカヨシヤンマは、網を張るクモを器用に捕らえることが知られている。

■**分布** 県内：東部の鳥取市周辺からのみ記録されている。県外：北海道から九州まで広く分布するが、産地は限定され各地で減少傾向が著しい。国外では朝鮮半島、中国、ロシア極東地域などに分布。

■**保護上の留意点**：生息する池沼のヨシ原消失や埋め立てにより、産地が急速に減少している。良好な生息地が発見された場合はその保全が急務。

■**文献**：52, 99, 174.

執筆：大浜祥治

## ネアカヨシヤンマ トンボ目ヤンマ科

*Aeschnophlebia anisoptera* Selys, 1883

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



鳥根県平田市美野町 1991.6.25 / 撮影：祖田 周

■**選定理由**：生息地が丘陵地のヨシやガマなどのよく茂った湿地や休耕地に限定される。県内では1991年を最後に採集記録がない。

■**特徴**：体長 80 mm、後翅長 50 mm 程度。腹部第3節はくびれず、ずんどう。幼虫は第8、9に背棘があるのは本種だけ。成虫は平地や丘陵地のヨシなどの挺水植物の茂った湿地や近くに樹林があるところに多く、6月上旬頃から羽化しはじめ9月いっぱいまで見られる。成熟すると黄昏飛翔が見られる。繁殖行動は朝から日中に、産卵は正午前後に観察され、単独で水田や湿地の土や朽木に潜って産卵する。県内での確実な採集記録は北村（1959）と松原・三島（1959）、鳥取大学構内での1991年の記録（永幡・日暮，2017）の3例のみ。現状不明だが、ネット上には、「2016年08月25日 さっき川でトンボ採りをしてたら、ネアカヨシヤンマを捕まえました」との記述が見つかる。場所は鳥取市内とされている。

■**分布** 県内：過去の確実な記録は鳥取市2地点と米子市河崎のみ。県外：新潟県以南の本州、四国、九州；中国の南京付近。

■**保護上の留意点**：湿地および周辺の樹林の一体的保全が重要。

■**文献**：99, 140, 218.

執筆：祖田 周

**ルリボシヤンマ** トンボ目ヤンマ科  
*Aeshna juncea* (Linnaeus, 1758)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：—



産卵中の雌 日野郡日南町呼子 2004.10.7 / 撮影：祖田 周

■**選定理由**：寒冷地の湿地や挺水植物のよく茂った池沼に生息するが、個体数は少ない。

■**特徴**：成虫は体長 85 mm，後翅長 55 mm 程度。胸部の前方の黄緑条の上端は後方に流れるように張り出す。雌はすべて黄緑色であるが青みの強い個体もある。幼虫はオオルリボシヤンマに似るが下唇は短く中肢基部の中央までしか届かず，下唇中片の先端部がへこまない。成虫は寒冷地の湿地や池沼を好み，羽化は7月上旬頃から始まる。10月中旬まで見られる。9月頃に入ると雄はオオルリボシヤンマより低く飛び植物の間を縫うように水面から1m前後で縄張り飛行をするようになる。雌は単独で植物の茎や湿った土などに産卵する。

■**分布** 県内：東部と西部の山間地。1990年以降の記録は，鳥取市菅野，安蔵，大山町香取，大野池，日南町数カ所など。中部での記録はない。県外：北海道，本州，四国。北方系で，最終氷期後の温暖化で高地に取り残されたと考えられ西南日本では局所的；北半球冷温帯に広域分布。

■**保護上の留意点**：山間部の池沼や湿地の保全が重要。

■**文献**：90, 140, 297.

執筆：祖田 周

**ホンサナエ** トンボ目サナエトンボ科  
*Shagomphus postocularis* (Selys, 1869)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：—



卵塊を形成する雌 島根県安来市清瀬町伯太川 2021.5.14 / 撮影：北山 拓

■**選定理由**：県内の分布が限定され，近年，記録が途絶えている。

■**特徴**：体長 50 mm 内外。中型のサナエトンボ。他種に比べ体形が著しく太短い。成虫は春から初夏に出現する。平野部から丘陵地を流れる河川中流～下流域のほか，多鯨ヶ池などの湖沼でもみられる。成熟雄は岸边に止まって縄張り占有する。雌は水辺に静止して腹端に卵塊を形成し(写真)，飛び立って打水放卵する。

■**分布** 県内：県内を流れる天神川，日野川などの大川や多鯨ヶ池で，記録が散見される。県外：北海道から九州まで分布するが，四国西部，九州南部からは記録されていない。全国的に減少傾向が指摘されている。国外では，朝鮮半島，中国，ロシア極東地域に分布。

■**保護上の留意点**：河川改修等については，本来の自然環境の保全に十分留意することが重要である。

■**文献**：25, 50, 115, 129, 297.

執筆：大浜祥治

**ヒロシマサナエ** トンボ目サナエトンボ科  
*Davidius moiwanus sawanoi* Asahina & Inoue, 1973

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：—



産卵 日南町 2003.6.7 / 撮影：大浜祥治

■**選定理由**：2001年に県内で初めて本亜種の生息地が3カ所発見されたが，それ以後，新たな産地の報告はない。三朝町の産地は分布の東限に当たる。

■**特徴**：全長 40-45 mm 内外。細身で小型のサナエトンボ。日本固有種のモイワサナエの中国地方個体群で，亜種記載されている。日南町の産地では，5月中旬頃に羽化がはじまり，6月になると交尾・産卵など生殖活動が見られる。県内産地は，いずれも中国山地の分水嶺付近に形成された寒冷な湿原を流れる緩流であるが，隣接する島根県では平地でも確認されている。

■**分布** 県内：守安(2002)により，県内で初めて本亜種の生息地3カ所(三朝町2カ所と日南町1カ所)が報告された。県外：山口県を除く中国地方の4県のみで記録されている。なお，岡山県の鳥取県境付近には，ヒロシマサナエの別亜種であるヒラサナエが分布しており，ヒラサナエの本県生息可能性についても留意する必要がある。

■**保護上の留意点**：生息地では，周辺の集水域の山林区域も含めて開発を避け，流域の乾燥化が進まないようにする必要がある。日南町の生息地など湿原内への樹木の侵入が見られ，今後とも経過を注視する必要がある。

■**文献**：177, 178, 269, 236, 266.

執筆：大浜祥治

## キイロサナエ トンボ目サナエトンボ科

*Asiagomphus pryeri* (Selys, 1883)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



卵塊を形成する雌 島根県雲南市三刀屋町殿河内三刀屋川  
2016.6.8 / 撮影：北山 拓

■**選定理由**：生息地が開発等経済活動の影響を受けやすく、環境悪化のためか近年の確認記録がほとんどない。

■**特徴**：体長 65 mm 内外。細身でやや大型のサナエトンボ。同属のヤマサナエに似るが、本種雄では上付属器の先端が斜めに断ち切れ下付属器より短いこと、雌では産卵弁が下に突出することで区別できる。平地から丘陵地にかけての緩やかな流れの砂泥底河川に生息する。羽化は5月中旬ごろから始まり、生息地周辺の丘陵地で成熟後、水域に戻ってくる。雌は単独で岸辺を訪れ、付近に静止、またはホバリングしながら腹端に卵塊を形成し（写真）、打水あるいは打泥して放卵する。

■**分布** 県内：県内の平野部に記録が点在するが、近年記録が途絶えている。最近になって倉吉市天神川本川で幼虫が確認されている。県外：北海道を除く全国に分布するが、産地は限られる。日本固有種。

■**保護上の留意点**：開発や河川改修等による河川環境の悪化に留意し、生息地の環境を良好に保全することが重要である。

■**文献**：129, 140, 174, 297, 353.

執筆者：大浜祥治

## タベサナエ トンボ目サナエトンボ科

*Trigomphus citimus* (Needham, 1931)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



成熟雌 島根県出雲市斐川町荒神谷史跡公園 2017.5.2 /  
撮影：大浜祥治

■**選定理由**：県内の生息地が限定され個体数も少ない。1992 年を最後に記録が途絶えている。

■**特徴**：体長 45 mm 内外。小型のサナエトンボ。平地から丘陵地の、樹林に囲まれた池沼や緩やかな流れが生息環境。県内に生息するコサナエ属 3 種（本種、コサナエ、オグマサナエ）は形態が酷似し混生も見られるため同定には注意が必要である。本種雄の副性器が大きく目立つこと、雌の産卵弁切れ込みが浅いことなどが区別点である。春に出現するトンボで、羽化は4月上旬から始まり、成虫は6月頃まで見られる。

■**分布** 県内：県内の分布は広いが、記録はきわめてわずかであり、近年は途絶えている。県外：福井県、静岡県以西の本州、四国、九州に分布する。国外では、朝鮮半島、中国、ロシア極東地域に分布。

■**保護上の留意点**：開発等による生息池沼の埋め立てや、休息場所となる周辺雑木林の伐採などに留意する必要がある。

■**文献**：5, 99, 129, 140.

執筆者：大浜祥治

## オグマサナエ トンボ目サナエトンボ科

*Trigomphus ogumai* Asahina, 1949

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



産卵 島根県松江市鹿島町佐陀宮内 2015.5.11 /  
撮影：北山 拓

■**選定理由**：県内で広く記録されているが、生息地は限られる。とくに県西部の記録がほとんどない。

■**特徴**：体長 50 mm 内外。やや小型のサナエトンボ。県内に生息するコサナエ属 3 種の中では最も大きく、また幼虫は腹部先端の第 10 節がきわめて長く、特徴的である。おもに平地～丘陵地の開放的でやや水深の深い池沼に生息するが、内陸部ではまれとなる。羽化は4月中旬ごろから始まり、羽化後は周辺の雑木林などへ分散する。成熟した雄は水辺に静止して縄張りを張る。産卵は雌単独で、水際の草地の上をホバリングし、腹端を振りながら卵をばらまく（写真）。

■**分布** 県内：県内に広く分布するが、生息地は限られる。とくに西部ではきわめてまれである。県外：本州西部、四国、九州。四国からは、近年記録がない。日本固有種。

■**保護上の留意点**：開発等による生息池沼の埋め立てや、休息場所となる周辺雑木林の伐採などに留意する必要がある。

■**文献**：24, 48, 49, 129, 297.

執筆者：大浜祥治



**キイロヤマトンボ** トンボ目ヤマトンボ科  
*Macromia daimoji* Okumura, 1949

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)  
環境省：準絶滅危惧 (NT)



未熟雌の採食飛翔 安来市山辺町 2006.5.25 / 撮影：祖田 周

■**選定理由**：生息地がきわめて限定され、河川改修等による環境の改変により絶滅する可能性がある。

■**特徴**：体長 75 mm 後翅長 45 mm 内外。第2腹節および第3節の黄斑は側面で上下に切れ、第7節背面の黄斑は大きくやじり状。幼虫はクモのような形。成虫は5月中旬頃から羽化し始め8月上旬まで見られる。羽化後の未熟な個体は河川の近くにある林縁部で採食飛翔する。成熟した雄は再び川に戻り水面近くをすばやく飛翔する。雌は単独で河川の中央部で間歇打水産卵することが多い。全国的に分布が局所的で河川中流域の川床が砂地のところを好むが、県内でそのような環境がみられるのは法勝寺川のみであるように思われる。河川改修により川床の砂地がなくなるとすめなくなるおそれがある。

■**分布** 県内：法勝寺川水系の中流域から下流域。 県外：福島県以南の本州、四国、九州；朝鮮半島南部。

■**保護上の留意点**：幼虫は川床が砂地の河川を好むが、少しでも砂地があると生息できるので、そのようなところを残すことが重要。

■**文献**：49, 140, 297. 執筆者：祖田 周

**エゾトンボ** トンボ目エゾトンボ科  
*Somatochlora viridiaenea* (Uhler, 1858)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：—



縄張り飛翔する雄 西伯郡南部町寺内 2019.9.18 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：県内には生息に適する湿地的な水辺が少なく、生息地が限られる。耕作放棄した水田で一時的に個体数を増すこともあるが、植生遷移により乾燥化が進むと姿を消す。

■**特徴**：体長 65 mm 内外。体全体が金属光沢のある暗緑色をした中型のトンボ。成熟した雄は、夏から秋にかけて、湿地上で縄張り飛翔を行い、飛来する雌を待つ。黄昏時には他のヤンマなどととも、高所を広範囲に飛び回る。同属のハネビロエゾトンボとは酷似し、雄では尾部上付属器の形態の違い、雌では産卵弁の大きさなどで区別できる。

■**分布** 県内：県内から広く記録されているが、生息地は限られる。 県外：北海道から九州まで全国に分布するが、産地は限定され各地で減少傾向が指摘されている。国外では、朝鮮半島、中国、ロシアに分布。

■**保護上の留意点**：平地から山地にかけての湿地的環境に生息するが、そのような産地は乾燥化・草原化しやすく、姿を消す例が多い。生息に適した水辺環境の維持に留意する必要がある。

■**文献**：49, 99, 115, 162. 執筆者：大浜祥治

**ハネビロエゾトンボ** トンボ目エゾトンボ科  
*Somatochlora clavata* Oguma, 1913

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)  
環境省：絶滅危惧II類 (VU)



未成熟雌 大山山麓 2012.7.26 / 撮影：坂田国嗣

■**選定理由**：県内における生息地がきわめて限定され、生息地の個体数も少ない。また、産地が平地～丘陵地の人里周辺に多く、開発等の影響を非常に受けやすい。

■**特徴**：体長 65 mm 内外。体色は暗緑色で金属光沢があり、がっしりした印象を受ける中型のトンボ。雄では同属のエゾトンボに酷似するが、雌では本種の産卵弁が長大で区別は容易。平地～丘陵地の緩やかで小規模な流れが典型的な生息環境である。初夏のころ羽化し、未熟な個体は水域近くのやや開けた空間をゆったりと飛翔し摂食等行う。成熟した雄は水域に戻り、比較的狭い範囲を、ホバリングを交えながら往復飛翔する。産卵は雌単独で、細流の水際に腹端を繰り返し打ちつける。

■**分布** 県内：東部の鳥取市国府町と西部の大山山麓にわずかな記録がある。 県外：北海道から九州まで全国に分布するが、各地とも産地は局地的である。国外では、朝鮮半島に分布。

■**保護上の留意点**：緩やかな細流のある湿地や里山の保全が必要である。

■**文献**：5, 49, 100, 174. 執筆者：大浜祥治

## ハッチョウトンボ トンボ目トンボ科

*Nannophya koreana* Bae, 2020

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：—



成熟したオス 南部町 2021.6.21 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：生息地がきわめて局所的であり、個体数が少ない。

■**特徴**：全長 20 mm 内外の世界最小のトンボの一種。成熟したオスは全身鮮やかな赤色で翅の基部が橙色。メスは黄色と褐色の縞模様がある。丘陵地の草丈が低く、水深がごく浅い湿地帯に生息し、生息地の植生の遷移が進むなど環境が変わるとすぐに姿を消してしまう。

■**分布** 県内：岩美町，三朝町，大山町，伯耆町，日野町，南部町で記録があるが、生息地はごく限られる。県外：本州，四国，九州に分布するが産地は限られる。海外では朝鮮半島，台湾，中国，南アジアから東南アジア，オーストラリアにかけて広く分布する。

■**保護上の留意点**：生息環境が大変不安定なため、遷移が進むと姿を消してしまう。生息地の遷移が進まないように、草刈りや水位調整等の適切な管理が重要。また、アメリカザリガニやウシガエル等、捕食者となりうる外来生物を侵入させてはならない。

■**文献**：25, 48, 49, 75, 93, 297.

執筆：桐原佳介

## マイコアカネ トンボ目トンボ科

*Sympetrum kunckeri* (Selys, 1884)

鳥取県：絶滅 (EX)

環境省：—



成熟雌 鳥根県松江市鹿島町 2007.9.27 / 撮影：坂田国嗣

■**選定理由**：県内では 1950 年代の記録を最後に 60 年以上記録されておらず、絶滅したものとみられる。

■**特徴**：体長 35 mm 内外。小型でやや細身のアカトンボ。とくに成熟♂では顔面の青白色が目立つ。この青白い顔と赤い腹部を京都の舞妓に見立てて名づけられた。マユタテアカネ、ヒメアカネに似るが、本種では翅胸部側面の黒条が 3 条あることで区別できる。

■**分布** 県内：鳥取市と米子市で記録されている。県外：北海道から九州まで広く分布するが、産地は限定され各地で減少が指摘されている。国外では、朝鮮半島，中国，ロシア極東地域に分布。

■**保護上の留意点**：里山に囲まれた植生豊かで比較的大きなため池でみられるが、環境変化に敏感で、同所的に生息する他種に先駆けて姿を消す。新たな産地が発見された場合は、ため池周辺の雑木林等も含めた保全が必要である。

■**文献**：99, 162, 174.

執筆：大浜祥治

## ヒメアカネ トンボ目トンボ科

*Sympetrum parvulum* (Bartenef, 1912)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



成熟雄 八頭郡八頭町花原 2021.10.18 / 撮影：長瀬 翔

■**選定理由**：分布が局所的で生息地が限定されるうえ産地の減少が顕著。

■**特徴**：体長 30–35 mm 内外。県内で見られるアカトンボ属の中では最小。マユタテアカネに似るが、本種の場合、顔面の眉斑がないかあっても薄く小さいことなどで区別できる。おもに平地から低山地の背丈の低い水生植物が繁茂する湿地・休耕田などに生息する。初夏の頃に羽化し、秋遅くまで見られる。雌は交尾後、雄と連結あるいは単独で、腹端を泥の中に差し込むように産卵する。

■**分布** 県内：平地から低山地まで広範囲で記録されているが、生息地は限定される。県外：北海道から九州まで広く分布するが、産地は限られる。国外では朝鮮半島，中国，ロシア極東地域に分布。

■**保護上の留意点**：湿地的環境に生息するが、乾燥化・草原化のため姿を消す例が多い。生息に適した湿地や水田環境の維持に留意する必要がある。

■**文献**：24, 90, 125, 129, 140.

執筆：大浜祥治

**コノシメトンボ** トンボ目トンボ科  
*Sympetrum baccha* Selys, 1884

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：—



成熟雄 鳥取市多鯉ヶ池 2021.10.16 / 撮影：長瀬 翔

■**選定理由**：分布が局所的であり個体数も少ない。とくに西部地域では非常にまれである。

■**特徴**：体長 40–45 mm 内外。翅端に黒褐色斑をもつ中型のアカトンボ。成熟雄では全身鮮やかな赤色となる。雌は顔面に眉班をもつが、雄には無い。翅胸部側面の2本の黒条が上部で1本に融合することで他種と区別できる。平地から低山地にかけての開放的な池沼・水田などでよく見られる。

■**分布** 県内：県内各地から記録されているが、産地は限定される。西部地域では、大山町大山寺の記録が唯一である。県外：北海道から九州まで広く分布するが、産地はやや限られる。国外では朝鮮半島、台湾、中国、ロシア極東地域に分布。

■**保護上の留意点**：開発等による生息池沼の埋め立てや、休息場所となる周辺雑木林の伐採などに留意する必要がある。

■**文献**：25, 48, 117, 140, 174.

執筆者：大浜祥治

**ナニワトンボ** トンボ目トンボ科  
*Sympetrum gracile* Oguma, 1915

鳥取県：絶滅 (EX)  
環境省：絶滅危惧II類 (VU)



成熟雄 岡山県岡山市 2012.9.15 / 撮影：北山 拓

■**選定理由**：日本海側での分布が非常に限られ、県内唯一の生息地であった鳥取市ため池では、1995年の1雄を最後に記録が途絶えている。近隣地域の激減状況からも、本県では絶滅したものとみられる。

■**特徴**：体長 35 mm 内外。アカトンボの仲間であるが、雄は成熟しても赤化せず、全身青灰色となる。秋に水抜きをして岸辺に地面が露出するような遠浅のため池が典型的な生息環境。産卵は雄雌連結または雌単独で、池の水際部分に腹端を軽く振りながら卵をばらまく。

■**分布** 県内：1993年に日暮卓志氏が発見した鳥取市大塚のため池が唯一の産地であった。県外：近畿・東海地方、瀬戸内沿岸地域など。日本海側では、鳥取市と兵庫県豊岡市、福井県小浜市などごくわずか。日本固有種。

■**保護上の留意点**：新たな生息地が発見された場合は、ため池周辺の環境とともに、秋の水落とし等ため池管理も含めた保全が必要である。

■**特記事項**：三島 (1980) 記載の青木浩氏採集1雌 (青谷町露谷, 3-viii-1946) は、大阪市立自然史博物館で再同定の結果ナツアカネの未成熟雌であった。

■**文献**：24, 48, 49, 50, 346.

執筆者：大浜祥治

**アキアカネ** トンボ目トンボ科  
*Sympetrum frequens* (Selys, 1883)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：—



成熟したオス 南部町 2015.9.30 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：かつては最も普通に見られるアカトンボ類だったが、近年急激に減少している。

■**特徴**：全長 45 mm 内外のアカトンボの一種。オスは成熟すると腹部が橙赤色になるが、胸と頭部は赤くならない。メスは腹部が赤色になる個体と褐色になる個体がいる。平地から山地の田んぼや湿地に生息し、春に羽化した未成熟個体が夏は高地に移動して過ごし、成熟すると秋に平地や山地で産卵する。

■**分布** 県内：鳥取市、江府町、南部町、米子市など県内全域に生息している。県外：北海道、本州、四国、九州に分布するが、近年は全国的に激減している。海外ではロシア、中国、朝鮮半島に分布する。

■**保護上の留意点**：本種のおもな繁殖環境である水田で使用される農薬の影響で、1990年代ごろから全国的に急激に個体数を減らしたと言われていた。さらに、水田の管理手法の変化や稲の栽培スケジュールの変化、稲作の衰退で水田の減少や荒廃も減少要因と思われる。影響の少ない農薬を用いた稲作の推進が重要。

■**文献**：25, 242, 278, 297, 374.

執筆者：桐原佳介

## ミヤマノギカワゲラ カワゲラ目ヒロムネカワゲラ科

*Yoraperla uenoi* (Kohno, 1946)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



八頭郡智頭町芦津沖ノ山 2010.4.17 / 撮影：稲田和久

■**選定理由**：県東部の限られた山塊の山地溪流にのみ生息地が限定され、個体数も少ない。生息場所の砂防工事等の河川改修により、自然状態が変更された場合、壊滅的な危機的状況になる。好冷水性の種であるため、分布の中心は東日本でも高冷地であり、兵庫県では氷ノ山と三室山のみ分布し、現在のところ本県東部が分布の西限である。

■**特徴**：幼虫の体長 8 mm 内外、頭部は横長で、前胸背板幅より狭い。黒褐色で斑紋もなくズングリとしたゴキブリ様。前～後胸および腿節に明瞭な剛毛がある。

■**分布** 県内：県東部。扇ノ山、氷ノ山、沖ノ山山塊の標高 600 m 以上の山地溪流数地点。県外：長野・山形・山梨・石川・神奈川・東京・静岡・福島・奈良・兵庫。

■**保護上の留意点**：分布地の微生息環境は落ち込み型溪流の細流であり、岩盤や巨岩の表面にはりついている。砂防工事には十分な配慮を要する。

■**文献**：294, 345.

執筆：稲田和久

## クサカワゲラ属 SB 種 カワゲラ目アミメカワゲラ科

*Isoperla* sp. SB

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



初公開となる本種の終令幼虫 日野郡江府町御机 2009.6.13 / 撮影：稲田和久

■**選定理由**：全国的には本県と島根県の分布が確認されているのみ。本県では大山の南麓にのみ生息。生息範囲が非常に狭く、幼虫・成虫ともに個体数が少ない。未記載種のため記録の公表は初めてだが、下記のようにある程度標高のある平地を流れる川幅の細い河川にしか生息しないため、生息地は小さな変更や開発でも失われる恐れがある。

■**特徴**：幼虫の体長 6 mm 内外、同属の幼虫では小型で、頭部が目立って大きく、側縁には複眼の前方から後方に暗色直線紋が見られる。前胸背板の側縁には直線紋がある。腹部には 3 本の直線模様がある。成虫も判明しており、頭部には斑紋もなく黒色で体は黄白色である。外形的特徴は判明済みだが、解剖学的知見が未取得のため、早急の解明が必要。

■**分布** 県内：大山の南麓にある少数の細流。県外：島根県。

■**保護上の留意点**：分布地の微生息環境は砂防ダムの上にある湿地を流れる緩やかな流れの細流のようである。ただ、湿地で水が流れていればどこにでもいるわけではない。逆に山地溪流などでは見られない。生息地は比較的平坦な場所が多いため、建造物などが作りやすい環境にある。

■**文献**：66, 294.

執筆：稲田和久

## コグサヒメカワゲラ属 TD 種 カワゲラ目アミメカワゲラ科

*Ostrovus* sp. TD

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



初公開、本種の終令幼虫 日野郡江府町御机 1999.4.29 / 撮影：稲田和久

■**選定理由**：全国的には本県と長野県・栃木県のみ少数記録がある。西日本での分布は本県の大山を源流とする細流のみで、底質が軟弱で崩れやすい生息環境を好む性質があるため、生息地が砂防工事の対象になりやすい。このグループは現在のところ分類学上の再編がなされようとしているグループであるが研究者不足で研究がおくれ、発見から 20 年以上が経過しているが未だに種の記載がされていない。したがって、種名は仮記号とし、研究解明が急がれる。

■**特徴**：幼虫の体長 10 mm 内外、同属の幼虫は黄色地に黒紋がある場合が多いが、本種は全体に暗色部が多く、頭部斑紋もヒメカワゲラ属に近い。成虫も判明しており、オスのペニスの形状は同属の他種とは構造的に異なっており、同属の中でも別グループのようである。

■**分布** 県内：大山の南流する少数の山地溪流。長野県・栃木県。

■**保護上の留意点**：分布地の微生息環境は軟弱な落ち込み型溪流であり砂防ダムなどが設置されやすい環境にある。川幅の狭い場所なので陸生昆虫のように避難する場所が少ないこともあり、水線が断ち切られると、絶滅は避けられない。

■**文献**：294.

執筆：稲田和久

**ウスバカマキリ** カマキリ目カマキリ科  
*Mantis religiosa* Linnaeus, 1758

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：情報不足 (DD)



緑色型のメス 米子水鳥公園 2016.9.9 / 撮影：公益財団法人中海水鳥国際交流基金財団（桐原佳介）

- 選定理由**：県内の生息地がごく限られる。草地環境の変化で減少傾向。
- 特徴**：全長 55 mm 内外のカマキリ類。前脚腿節内側の基部寄りに、楕円形の黒い斑紋または黒いリング状の模様がある。緑色型と褐色型がある。低山から平地の草地や河原、海岸の草地に生息し、昆虫類を捕食する。石や枯れ木などの下に卵嚢を生み付ける。年 1 化で卵で越冬する。
- 分布** 県内：鳥取市、倉吉市、米子市に局所的に生息している。西部の安定した多産地だった米子水鳥公園では、近年個体数が激減している。県外：本州、四国、九州、沖縄に分布するが、生息地や個体数は少ない。海外ではヨーロッパ、北アフリカ、インド、ロシア、中国東北部、朝鮮半島に分布するほか、移入種として北アメリカにも分布する。
- 保護上の留意点**：適切に管理されている草地では安定して生息するが、植生の変化により急激に減少する傾向がある。多産地だった米子水鳥公園で激減したのは、公園外周の堤防法面にセイタカアワダチソウとクズが生い茂り、チガヤ等のイネ科植物が減少したことが影響している可能性がある。既存の生息地の植生が変化しないように適切な管理の継続が重要。
- 文献**：94, 109, 224, 231, 288. 執筆者：桐原佳介

**ハマスズ** 直翅目(バッタ目)ヒバリモドキ科  
*Dianemobius csikii* (Bolívar, 1901)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：—



雄(左)と雌(右) 鳥取市鳥取砂丘 ♀は 2011.10.8, ♂は 2011.11.29 / 撮影：鶴崎展巨

- 選定理由**：生息地である海浜植物の生育する砂浜海岸が減少傾向にある。
- 特徴**：体長 7 mm 前後の小型のコオロギ類。灰白色の体に暗褐色斑が点在し、砂地に隠ぺい(カムフラージュ)している。おもに夜行性で、昼間はハマゴウなどの海浜植物の根際にいる。砂地のみ場所には生息しない。雄は「ビー・ビー・ビー」という声で鳴く。鳥取県では年 2 化で、6 月頃と 9-10 月頃に成虫がみられる。
- 分布** 県内：県内全域の海浜の砂地。県外：本州、四国、九州、南西諸島(徳之島以北)；韓国、中国北部。
- 保護上の留意点**：海浜植物の生育する砂浜の保全が重要。
- 文献**：103, 105, 107, 286, 288.

執筆者：川上 靖

**カヤコオロギ** 直翅目(バッタ目)マツムシ科  
*Euscirtus japonicus* Shiraki, 1930

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)  
環境省：—



雄 北栄町お台場公園 2010.10.7 / 撮影：川上 靖

- 選定理由**：生息地である丈の低いイネ科草原が減少。現在、生息地は少なく局地的。
- 特徴**：体長 9 mm 前後。体は細長く、明るい黄褐色で、頭部から前翅にかけての上面と側面に黒褐色の縦帯がある。翅は短く、鳴かない。チガヤが多く、ところどころにススキが生えるような、明るいイネ科草原に群生する。年 1 化で、成虫は 8-10 月頃にみられる。
- 分布** 県内：北栄町お台場公園、伯耆町水無原などの草原に局地的に分布。県外：本州、四国、九州；韓国。
- 保護上の留意点**：イネ科への依存が強く、チガヤなどのイネ科草原の保全が必要。
- 文献**：288.

執筆者：川上 靖

## ダイリフキバッタ 直翅目(バッタ目) バッタ科

*Callopodisma dairisama* (Scudder, 1897)

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：—



雌 大山(鏡ヶ成) 2005.7.26 / 撮影：川上 靖

■**選定理由**：生息地がキャンプ場、スキー場などの広く開けた人工的な大規模攪乱環境の草原に限られ、このような環境が減少している。鳥取県は種の分布西限で、産地は少なく局地的。

■**特徴**：体長20–30 mm のフキバッタ類。翅は短く側生し、飛翔できない。幼虫の色彩は黒く、光沢背中に緑白色の筋が走り、特異である。生息地は明るく開けた草原環境に限られる。成虫は7–10月頃にみられる。

■**分布** 県内：大山の一向平キャンプ場や鏡ヶ成キャンプ場など。県外：鳥取県・岡山県から長野県西部までの本州のみに局地的。隣県では岡山県蒜山の火入れ地や兵庫県神鍋山噴火口など。

■**保護上の留意点**：現在知られる産地はすべて人工的環境であり、草刈りなどの維持管理が重要である。

■**文献**：42, 85, 288.

執筆：川上 靖

## ヤマト(セトウチ)フキバッタ 直翅目(バッタ目) バッタ科

*Parapodisma setouchiensis* Inoue, 1979

鳥取県：その他の重要種 (OT)

環境省：—



雄 鳥取市鹿野町茂宇気神社 2021.8.11 / 撮影：鶴崎展巨

■**選定理由**：県内に本種の地理型である基本型と氷ノ山型の移行帯が存在する。

■**特徴**：体長20–40 mm のフキバッタ類。短翅のため飛翔できない。外部形態の地理的変異が著しく、4つの地理型に分けられる。鳥取県には中・西部に基本型(ヤマト型)、東部に氷ノ山型(ヒョウノセン型)が分布し、境界では幅約5–10 kmの移行帯がみられる。年1化卵越冬で、成虫は7月～10月頃に、森林の林縁でよくみられる。2016年に分類学的改訂が行われた際に、和名がセトウチフキバッタからヤマトフキバッタに変更された。

■**分布** 県内：全域。県外：日本(青森県～屋久島)；朝鮮半島，中国。

■**保護上の留意点**：移行帯のみられる地域では、大規模な森林伐採などの開発は控えてほしい。

■**文献**：81, 82, 86, 132.

執筆：川上 靖

## セグロイナゴ 直翅目(バッタ目) バッタ科

*Shirakiacris shirakii* (Bolivar, 1914)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



交尾中の雌雄 鳥取砂丘 2011.11.1 / 撮影：鶴崎展巨

■**選定理由**：県下では砂丘地後背の乾性草原と低山山頂部の二次草原に生息するが産地は局所的。前者では草丈が腰より低く地表がしっかりと見える環境に生息する。少数が継続的に確認されているものの、近年太陽光発電の用地として開発が進んでいる。後者は遷移の進行によってササ類が繁茂しており、2021年10月の調査では生息が確認できなかった。

■**特徴**：35 mm 内外。体色は薄い茶褐色で、前胸背面は濃褐色。

■**分布** 県内：鳥取市(とくに千代川河口兩岸の乾性草原、霊石山)。県外：本州，四国，九州，対馬，南西諸島；ロシア沿海州南部，中国東部～東北部，朝鮮半島，台湾，カシミア。

■**保護上の留意点**：砂丘地後背の乾性草原を開発しないことが重要である。また、潜在的な産地が失われつつあるため、早急な生息状況の把握が必要である。近年、太陽光発電の用地として開発が進んでおり、主要な個体群の生息地と重なった場合、容易に地域絶滅する可能性が高い。外来植物の侵入による急速な遷移進行も脅威である。

■**文献**：288, 290, 339.

執筆：大生唯統

**ショウリョウバッタモドキ** 直翅目(バッタ目) バッタ科  
*Gonista bicolor* (de Haan, 1842)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
 環境省：—



雌 北栄町お台場公園 2007.9.12 / 撮影：川上 靖

- 選定理由：生息地であるイネ科草原が減少傾向で、生息地は局地的。
- 特徴：体長3–6 cm程度の細長い体型のバッタ類。背面は淡紅色。後脚は短く、跳躍力は弱い。チガヤなどのイネ科草原に群生し、イネ科植物の茎や葉にぴたりと体を寄せて止まっており、近づくときすばやく反対側に回り込む。年1化で、成体は8–11月にみられる。
- 分布 県内：県内全域だが局地的（イネ科草原）。県外：本州、四国、九州、南西諸島；中国、台湾、東南アジア。
- 保護上の留意点：イネ科草原の保全が必要である。
- 文献：42, 119, 121, 288.

執筆者：川上 靖

**ヤマトマダラバッタ** 直翅目(バッタ目) バッタ科  
*Epacromius japonicus* (Shiraki, 1910)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
 環境省：—



雄 鳥取砂丘 2011.10.11 / 撮影：鶴崎展巨

- 選定理由：生息地である海岸の砂地が減少傾向。
- 特徴：体長30–35 mm。砂地の色彩によく似た「隠ぺい色」になっているが、まれに緑色型もいる。海浜植物が散在する砂浜に生息し、短いイネ科草本を食べる。成虫は8–10月頃にみられ、日中に砂地の上を活発に飛翔しながら活動するため、確認しやすい。
- 分布 県内：県内全域の海浜の砂地。県外：北海道、本州、四国、九州。
- 保護上の留意点：海浜植物の散在する比較的大きな砂浜の保全が重要である。
- 文献：107, 248, 286, 288.

執筆者：川上 靖

**クルマバッタ** 直翅目(バッタ目) バッタ科  
*Gastrimargus marmoratus* (Thunberg, 1815)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
 環境省：—



鳥取市桂見 とっとり出会いの森 2011.8.6 /  
 提供：森林公園とっとり出会いの森

- 選定理由：生息地である草原、個体数ともに減少傾向。
- 特徴：体長35–65 mmの大型のバッタ類。前胸背はアーチ状にもり上がり、前翅の黒褐色の斑紋はトノサマバッタより大きい。後翅には黒帯があり、和名のクルマ（車）の由来。林と草原が隣接する場所や草丈に高低差のある広い草原を好み、生息は局地的。年1化で、成虫は7–11月にみられる。
- 分布 県内：県内の草原。県外：本州、四国、九州、南西諸島；台湾、朝鮮半島、中国、ジャワ島など。
- 保護上の留意点：林と隣接している草原の保全が重要である。
- 文献：42, 288.

執筆者：川上 靖

## カワラバッタ 直翅目(バッタ目) バッタ科 *Eusphingonotus japonicus* (Saussure, 1888)

鳥取県：絶滅 (EX)

環境省：—



雄 伯耆町大山山麓 1948.7.15 青木 浩 採集  
大阪市立自然史博物館所蔵標本／撮影：金沢 至

■選定理由：鳥取県内では50年以上記録がなく、絶滅とみられる。

■特徴：体長25–40 mm。河川の石ころの目立つ河原に生息地が限られ、体色は灰色で石ころと紛らわしい。後翅の内側は鮮やかな青色で、よく飛び、石ころの上に着地する。年1化で、7–9月頃に成虫がみられる。鳥取県では、1948年7月15日、伯耆町(旧溝口町)大山山麓の1雄(大阪市自然史博物館収蔵)以後、確実な標本がない。近年の調査でもまったく確認されず、県内では絶滅したと考えられる。

■分布 県内：かつて千代川、日野川、大山などの河川の大きな河原にいたとみられるが現在は絶滅。県外：北海道、本州、四国、九州。

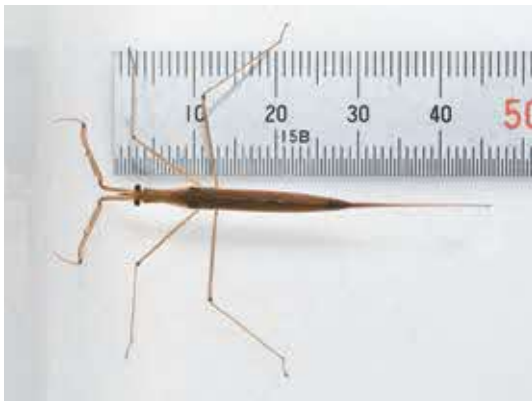
■文献：174, 288.

執筆：川上 靖

## ヒメミズカマキリ 半翅目(カメムシ目) タイコウチ科 *Ranatra unicolor* Scott, 1874

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



南部町 2018.11.15 / 撮影：桐原佳介

■選定理由：生息地がきわめて局所的であり、個体数が少ない。

■特徴：呼吸管を除いた体長30 mm内外。体は黄褐色で細長く、ミズカマキリと似ているがずっと小さく、前脚腿節に二つの棘があり、呼吸管の長さが体長の2/3程度である。浮葉植物や抽水植物が豊かな止水に生息する。

■分布 県内：鳥取市、日野町、南部町で記録がある。県外：北海道、本州、四国、九州、南西諸島に分布するが、産地はやや限られる。海外では朝鮮半島、中国、ロシア極東部に分布。

■保護上の留意点：植生が豊かな止水環境の保全が重要。また、産地が局所的なので、既知の生息地の周辺に新たな生息環境を整備して生息地を拡大、分散させることが望ましい。アメリカザリガニやウシガエル等、捕食者となりうる外来生物を侵入させてはならない。

■文献：96, 247, 259.

執筆：桐原佳介

## タイコウチ 半翅目(カメムシ目) タイコウチ科 *Laccotrephes japonensis* Scott, 1874

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



溜池の水面付近を泳ぐ成虫 南部町 2020.4.30 / 撮影：桐原佳介

■選定理由：かつては普通種だったが、近年個体数が急激に減少している。

■特徴：呼吸管を除いた体長35 mm内外。体は暗褐色で扁平でやや幅広い。体長とほぼ同長の長い呼吸管がある。鎌状の前脚で水生昆虫や小魚、オタマジャクシなどを捕らえ、針状の口器を刺して吸汁する。池沼や田んぼ、水路などに生息し、水底で泥をかぶってじっとしていることが多い。

■分布 県内：鳥取市、倉吉市、伯耆町、日野町、南部町、米子市で記録がある。県外：本州、四国、九州、沖縄以北の南西諸島。海外では朝鮮半島、中国、台湾、東南アジアに分布。

■保護上の留意点：既知の生息環境に変化がないように見えても個体数が激減しており、農業が影響している可能性がある。米子水鳥公園では、地盤沈下に伴い池の塩分濃度が上昇し、それに伴いほとんど見られなくなった。かつては各地で普通に見られていたため、あまり注目されない傾向にあるが、本種の今後の動向を注視して記録していくことも重要。

■文献：96, 98, 109, 231.

執筆：桐原佳介



**タガメ** 半翅目(カメムシ目) コオイムシ科  
*Kirkaldyia deyrolli* (Vuillefroy, 1864)

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)  
環境省：絶滅危惧II類 (VU)



鳥取県東部 2019.9.25 / 撮影：藤井星渚

■**選定理由**：1990年代でも県内全域に生息地が存在していたが、2015年以降の生息確認地は東部3地域、西部1地域のみ。現在の繁殖確認地は山間部の自然堤で、ヨシやヒシが密生するため池に限られる。

■**特徴**：体長48 mmから65 mm。体色は茶褐色。体型はやや縦長く、前脚は鎌状。かつては水田にも生息し身近な存在だったが、現在、生息が確認されているのは水生植物が豊かな止水域に限られる。県内では7月から8月にかけて灯火に飛来することが多く、市街地で発見されることもある。

■**分布** 県内：岩美町、鳥取市、八頭町、湯梨浜町、三朝町、倉吉市、琴浦町、大山町、伯耆町、南部町、米子市、日南町。 県外：北海道、本州、四国、九州、対馬、南西諸島；朝鮮半島、中国、台湾、ロシア極東、東南アジア。

■**保護上の留意点**：近年の分布調査は不十分で追加調査が必要。保全計画を立てるうえでも県内の繁殖地の早急な把握が必要である。ため池の廃止は個体群の絶滅に直結する。水田では代替生息地の創出が必要。

■**特記事項**：特定第二種国内希少野生動植物種で販売や頒布目的の捕獲、譲渡は規制されている。

■**文献**：91, 168, 174, 181.

執筆者：大生唯統

**コオイムシ** 半翅目(カメムシ目) コオイムシ科  
*Appasus japonicus* Vuillefroy, 1864

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：準絶滅危惧 (NT)



八頭町門尾 2017.10.13 / 撮影：大生唯統

■**選定理由**：2000年以前の文献記録がほとんどなく生息状況が不明である。一方で、県東部低地を中心に確認地点が増えており今後の動向を注視する必要がある。

■**特徴**：体長17 mmから25.5 mm。背面は茶褐色で、体はほぼ卵形で偏平。前脚は鎌状。近似種オオコオイムシとは大きさや体型である程度区別できるが、正確な種同定には雄の外部生殖器側片先端の形状(日本産のみ)や前脚腿節の太さなどを調べる必要がある。県内ではコオイムシは県東部平野の水域、オオコオイムシは県西部の山間部の水域を中心に確認されている。

■**分布** 県内：岩美町、鳥取市、八頭町、若桜町、智頭町、米子市。 県外：北海道、本州、四国、九州、対馬；朝鮮半島、中国。

■**保護上の留意点**：近年、急速に分布を拡大している可能性があるため今後の動向を注視する必要がある。

■**文献**：95, 174.

執筆者：大生唯統

**オオコオイムシ** 半翅目(カメムシ目) コオイムシ科  
*Appasus major* (Esaki, 1934)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：—



南部町 2020.12.29 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：かつては普通種だったが、近年個体数が減少している。

■**特徴**：呼吸管を除く体長25 mm内外。体は黒褐色または黄褐色だが、黒褐色の個体が多い。体は扁平、頭部側がやや細まる小判型で、前脚が鎌状になり小型水生生物を捕食。腹端には出し入れ可能な短い呼吸管がある。オスは卵塊を背負い、孵化まで世話をする。コオイムシよりも大型で暗色傾向が強いが酷似し、外見での識別が困難なことがある。おもに丘陵地や山地の溜池や田んぼ、水路など、水深が浅く植生が豊かな湿地に生息する。

■**分布** 県内：鳥取市、日野町、南部町。丘陵地を中心に広く分布すると思われるが、詳細は不明。 県外：北海道、本州、四国、九州；朝鮮半島、中国、ロシア極東。

■**保護上の留意点**：植生が豊かな浅い湿地環境の保全が重要。普通種との印象から記録が残りにくいので、動向に注視し記録の蓄積が重要。また、類似種コオイムシの分布拡大に対して、本種が衰退傾向を示すのは、コオイムシよりもやや冷水を好み温暖化影響を受けやすいためかもしれない。

■**文献**：88, 96, 101, 109.

執筆者：桐原佳介

## オオミズムシ 半翅目(カメムシ目) ミズムシ科

*Hesperocorixa kolthoffi* (Lundblad, 1933)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



南部町 2013.7.30 / 撮影：桐原佳介

- 選定理由：県内の記録が大変乏しく、生息地がごく限られている。
- 特徴：大型のミズムシ類で、体長 12 mm 内外。体型は長楕円形で頭部は覆面状になっており、腹部は扁平。前脚が短いのに対して中脚と後脚が著しく長い。後脚には毛が密生しており、これを用いて水中を活発に遊泳する。類似種が多く、同定にはオスの前脚のペグ列の形状などの観察が必要。おもに丘陵地や山地の溜池や田んぼ、水路など、水深が浅く植生が豊かな湿地に生息する。
- 分布 県内：鳥取市と南部町で記録があるのみ。2010年に南部町で初めて確認されて以降、2021年に鳥取市でも確認された。県外：近畿地方以西の本州、四国、九州に分布し、海外では中国と極東ロシアに分布する。
- 保護上の留意点：植生が豊かな止水環境の保全が重要。生息地が限定されているため、既知の生息環境の保全が大変重要。
- 文献：246。

執筆：桐原佳介

## ホッケミズムシ 半翅目(カメムシ目) ミズムシ科

*Hesperocorixa distanti hokkensis* (Matsumura, 1905)

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



鳥根県出雲市大津町 1997.6.15 / 撮影：尾原和夫

- 選定理由：県下では 1937 年に鳥取市で採集されて以来記録がないが、鳥根県では現在でも複数地点で確認されていることから、本県にも生息地が残っている可能性が高い。
- 特徴：体長 10 mm 内外。背面は黄褐色で、上翅には細かい黒色斑点をもつ。前胸背の黒色横帯は 8-9 本。雄の前脚ふ節は前端で強く内側に曲がる。ミズムシ科は似た種が多く、近年、日本初記録種も複数報告されているため、同定には後胸腹板剣状突起、雄の前脚ふ節の形態とペグ、雄交尾器などを検討する必要がある。
- 分布 県内：鳥取市青谷町露谷。県外：本州、四国、九州。
- 保護上の留意点：県内のミズムシ科大型種は情報が少ないため情報収集が急務である。山間部の池底が砂質のため池に生息していることが多い。
- 文献：174。

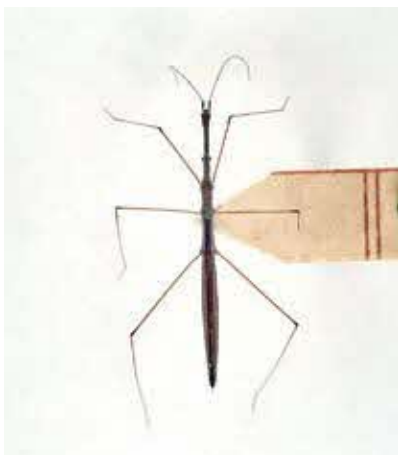
執筆：大生唯統

## イトアメンボ 半翅目(カメムシ目) イトアメンボ科

*Hydrometra albolineata* (Scott, 1874)

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：絶滅危惧II類 (VU)

鳥取市青谷町露谷 1942.6.8 採集 大阪市立自然史博物館  
収蔵(青木浩コレクション) / 撮影：松本史樹郎

- 選定理由：県下では 1958 年以降記録がない。鳥取県東部において継続的な調査が行われているが再発見には至っていない。
- 特徴：体長 11.2 mm から 14 mm。日本産本属で最大種。背面は黒灰色。触角第 4 節は第 2 節と同長、雄の腹部第 7 腹板には毛が密生することで、県下に分布する同属のヒメイトアメンボやオキナワイトアメンボと区別できる。
- 分布 県内：鳥取市青谷町露谷。県外：本州、四国、九州、対馬、南西諸島(奄美大島以北)；朝鮮半島、中国、台湾。
- 保護上の留意点：県西部には本種の生息に適した環境が点在するため調査が必要である。
- 文献：174。

執筆：大生唯統

**エサキアメンボ** 半翅目(カメムシ目) アメンボ科  
*Limnopus esakii* (Miyamoto, 1958)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：準絶滅危惧 (NT)



湯梨浜町はわい長瀬 2021.8.24 / 撮影：大生唯統

- 選定理由**：全国的に絶滅が危惧されている種で、県下では平野部のヨシが繁茂する広い水域でのみ確認されている。
- 特徴**：背面は褐色で、生時は体側部の白銀色が目立つ。触角は長く体長の半分程度で、第4節が最も長い。生息する水域の中でも抽水植物繁茂する場所で確認されることが多い。
- 分布** 県内：湯梨浜町、鳥取市福部町。県外：北海道、本州、四国、九州、対馬；朝鮮半島、中国。
- 保護上の留意点**：平野部のヨシが繁茂する広い水域は年々減少しているため開発は厳禁である。鳥取市細川ではアメリカザリガニの侵入や護岸工事によって生息環境が悪化している。

執筆者：大生唯統

**ゴミアシナガサシガメ** 半翅目(カメムシ目) サシガメ科  
*Myiophanes tipulina* Reuter, 1881

鳥取県：情報不足 (DD)  
環境省：絶滅危惧II類 (VU)



鳥取市青谷町露谷 1956.8.3 採集 大阪市立自然史博物館  
収蔵(青木浩コレクション) / 撮影：松本吏樹郎

- 選定理由**：全国的に減少している種で、県下では1934年から1982年にかけて継続的に確認されていたが、近年はまったく見つかっていない。2020年夏の既知産地における調査では確認できなかったものの、現在も生息に適した環境が残っており再発見される可能性がある。
- 特徴**：体長16mm内外。体と脚は長毛で密に覆われる。前脚は鎌状で捕食に使われる。里地の乾燥空間(例えば木造家屋や納屋)で見つかることが多いようである。
- 分布** 県内：鳥取市青谷町露谷。県外：本州、四国、九州、伊豆諸島；朝鮮半島、中国、オーストラリア。
- 保護上の留意点**：生息状況の把握が必要である。里地の木造家屋内で見つかることが多いため古い町並みが残る地域での調査が有効と思われる。
- 文献**：174。

執筆者：大生唯統

**ウデワユミアシサシガメ** 半翅目(カメムシ目) サシガメ科  
*Polytoxus armillatus* Ishikawa, 1998

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：—



鳥取市松原 2021.10.8 / 撮影：大生唯統

- 選定理由**：イネ科やカヤツリグサ科が繁茂する湿性草原に生息する種で、圃場整備や遷移進行によって本種の生息に適した環境が減少している。
- 特徴**：体長7mm内外。体色は黄色で、黒い縦紋が体の背面と側面にある。各脚の腿節末端部付近は黒色になる。草地の根際に生息し、灯火に飛来することもある。
- 分布** 県内：鳥取市。県外：北海道、本州、九州、琉球。
- 保護上の留意点**：本種が生息する鳥取市小沢見には県東部ではきわめて少なくなった沿岸部の良好な環境の低湿地と湿性草原が残っている。ソーラーパネルの建設や埋め立ては個体群に大きな影響を与える。
- 文献**：261。

執筆者：大生唯統

### ズイムシハナカメムシ 半翅目(カメムシ目) ハナカメムシ科 *Lyctocoris beneficus* (Hiura, 1957)

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



鳥取市青谷町露谷産 1941.3.21 青木 浩 採集  
大阪市立自然史博物館蔵／撮影：松本史樹郎

■**選定理由**：里山環境に生息するハナカメムシでニカメイガの天敵としてよく知られていたが、全国的に減少している種である。県内では1942年以降記録がない。2020年夏の既知産地における調査では確認できなかったものの、近県の生息状況から県内の里地や河川敷でも再発見される可能性がある。

■**特徴**：体長4 mm内外。頭部と前胸背は暗褐色。半翅鞘は淡黄色で光沢をもつ。本科の中では大型でがっちりした体型をしている。

■**分布** 県内：鳥取市青谷町露谷。県外：本州、四国、九州、奄美大島；ロシア沿岸州、朝鮮半島、中国。

■**保護上の留意点**：早急な生息状況の現状把握が必要である。2019年に埼玉県で里山景観の残った地域の耕作地に隣接した空地の積み枯葉から多数確認されており、本県でも同様の環境から得られる可能性が高い。

■**文献**：174, 245.

執筆者：大生唯統

### クロアシブトハナカメムシ 半翅目(カメムシ目) ハナカメムシ科 *Xylocoris hiurai* Kerzhner & Elov, 1976

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



鳥取市国府町(千代川水系袋川) 2007.8.8 採集  
鳥取県立博物館蔵／撮影：大生唯統

■**選定理由**：河川敷や畑地の積み草の下に生息するが、県下の記録はほとんどなく生息状況がよく分かっていない。

■**特徴**：体長2.5 mm内外。背面に光沢をもち、頭部、前胸背、小盾板は黒褐色。積み草下から発見されるほか、灯火に飛来する。

■**分布** 県内：鳥取市。県外：本州・四国・九州・南西諸島。

■**保護上の留意点**：河川敷の草刈りの際は刈り取った草を除去せず一部そのまましておく。

■**文献**：109.

執筆者：大生唯統

### ヒウラヒサゴナガカメムシ 半翅目(カメムシ目) ヒョウタンナガカメムシ科 *Neomizaldus hiurai* (Hidaka, 1961)

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：—



鳥取市青谷町露谷 1968.4.30 大阪市立自然史博物館蔵  
(青木浩コレクション)／撮影：松本史樹郎

■**選定理由**：記載以降8個体が得られているのみであり、パラタイプ含む4個体が鳥取市で得られているが生息環境は不明である。2020年に既知産地である鳥取市西部の低地周辺を複数回調査したが発見できなかった。

■**特徴**：体長6 mm内外。前翅は黄白色で透明部を欠き、2, 3の黒色紋をもつ。晩秋と春に成虫が採集されていることから成虫越冬と考えられている。

■**分布** 県内：鳥取市(青谷町露谷, 気高町宝木)。県外：本州(石川県, 群馬県)。

■**保護上の留意点**：追加調査が必要である。過去の採集記録から湿地周辺の落葉広葉樹林縁のビーティングが有効かもしれない。

■**文献**：10, 47, 362.

執筆者：大生唯統

**シロヘリツチカメムシ** 半翅目(カメムシ目) ツチカメムシ科  
*Canthophorus niveimarginatus* Scott, 1874

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：準絶滅危惧 (NT)



伯耆町岩立(樹水高原) 2020.5.23 採集/撮影：大生唯統

- 選定理由**：背丈の低い河川敷や草原に自生するカナビキソウを寄主としているため、遷移進行や開発によって生息環境が失われやすい。
- 特徴**：体長7 mm 内外。光沢のある藍色で、体の側縁は黄白色に縁どられる。寄主としてカナビキソウが知られている。県下では2020年に伯耆大山山麓の二次草原で確認された。他県の生息状況から河川敷にも生息している可能性が高い。
- 分布** 県内：伯耆町岩立(樹水高原)。県外：本州、四国、九州；朝鮮半島、中国大陸、モンゴル、ロシア、ベトナム、インド、カザフスタン。
- 保護上の留意点**：カナビキソウが継続的に生育できる明るい草原環境を維持することが必要である。

執筆者：大生唯統

**アカエゾゼミ** 半翅目(カメムシ目) セミ科  
*Lyristes flammatus* (Distant, 1892)

鳥取県：情報不足 (DD)  
環境省：—



山形県 2018.8.20 /撮影：永幡嘉之

- 選定理由**：生息地が局地的で、個体群サイズが小さいと推定される。ただし生息環境や個体数の把握が十分でないため情報不足とした。
- 特徴**：大型で橙色の部分が多い美麗種。普通種エゾゼミとは翅の斑紋が異なることで区別でき、鳴き声もわずかに異なるが熟練者でなければ区別できない。成虫は盛夏に現れ、標高500–800 m程度の落葉広葉樹林に生息。東北地方では溪谷に生息し、ヤマハンノキおよびサワグルミとの結びつきが強いが、本県では生息環境の重点的な調査は行われていない。
- 分布** 県内：記録があるのは鳥取市、智頭町、三朝町、大山町、日野町だが、全域で山地の溪谷部に生息していることが予想される。県外：北海道、本州、四国、九州；朝鮮半島、中国。
- 保護上の留意点**：溪谷の落葉広葉樹林(二次林を含む)を大面積かつ連続性のある状態で保全すること。
- 文献**：184, 227, 293, 321。

執筆者：永幡嘉之

**ハルゼミ** 半翅目(カメムシ目) セミ科  
*Terpnosia vacua* (Oliver, 1790)

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)  
環境省：—



広島県 2016.5.27 /撮影：永幡嘉之

- 選定理由**：マツ枯れに伴う植生の変化および遷移の進行により、近年生息地・個体数ともに減少が続いているため。
- 特徴**：中型のセミで4月下旬から6月中旬にかけて出現。雄は晴天時に合唱する。アカマツ・クロマツ林との結びつきが強く、生息域は海岸から標高800 m付近に及ぶ。人々の生活様式が変化し、マツ枯れが広がった現在では、アカマツ林の多くがスダジイやコナラの林へと変化した。本種の減少は今後も続いていくと考えられる。
- 分布** 県内：全域の平地～丘陵地で、海岸のクロマツ林や中国山地のアカマツのある稜線部にも生息している。県外：本州、四国、九州；中国。
- 保護上の留意点**：里山のアカマツ・クロマツ林の大規模な復元は困難であるが、里山の動植物の一定の種数が生息地を失うことにつながるため、鳴き声で生息を確認できる本種はよい指標となる。公園や社寺周辺、海岸などのマツ林を連続性を持たせる形で重点的に保全する必要がある。
- 文献**：185, 215。

執筆者：永幡嘉之

## ヒメハルゼミ 半翅目(カメムシ目) セミ科 *Euterpnosia chibensis* Matsumura, 1917

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



兵庫県香美町 2016.7.6 / 撮影：永幡嘉之

- 選定理由**：生息地の孤立が著しく、局所個体群間の交流がないため。
- 特徴**：小型のセミで盛夏に出現。主として神社周辺のシイ・カシ類の極相状態で維持されてきた常緑広葉樹林に生息し、時に周辺の二次林にも進出する。成虫は合唱性が著しい。分布状態から、かつて極相林が広がっていた有史以前には広く連続的に分布していたものが、人間の生産活動による二次林化にともなって、社叢林に島状に孤立したと判断される。すなわち、本種が生息する社叢林は有史以来いちども皆伐を受けたことがないことを示していると考えられる。
- 分布** 県内：常緑広葉樹林（カシ類の社叢林が多い）で、垂直分布の上限は約 450 m。 県外：本州（新潟・茨城県以西）、四国、九州、南西諸島。
- 保護上の留意点**：すでに局所個体群間の交流がないため、社叢林の生息地は現状の面積で極相のまま維持すること。
- 文献**：186, 215.

執筆：永幡嘉之

## エノキカイガラキジラミ 半翅目(カメムシ目) キジラミ科 *Celtisaspis japonica* (Miyatake, 1968)

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



スケールは 1.0 mm. 島根県三瓶山 2010.6.22 / 撮影：林 成多

- 選定理由**：寄主植物のエノキは広範に分布するが、本種が発生する産地は局地的であり、かつ毎年発生するとも限らない。とりわけ低地ではエノキノミゾウムシによる葉の食害によりゴール（虫こぶ）形成が阻害されている可能性がある。県東部や中部での生息状況には不明な点が多い。
- 特徴**：頭部から前翅端までの長さが約 3.5 mm。初夏に出現する成虫の前翅は全体に暗色で、秋に出現する成虫の前翅は透明な斑紋がある。幼虫は葉裏に貝殻状の覆いを形成することが種名の由来である。初夏に育つ幼虫は、葉の表側に角状のゴールを形成する。本種のゴールによく似たタマバエの虫こぶがあるため、確認調査に当たっては、貝殻状の覆いに注目する必要がある。また、秋に出現する幼虫はゴールを形成しない。
- 分布** 県内：鳥取市、米子市、大山町、江府町、日南町船通山。 県外：本州、九州。
- 保護上の留意点**：生息地におけるエノキ類の保全が重要である。
- 文献**：40, 43.

執筆：林 成多

## ハマベウスバカゲロウ 脈翅目(アミメカゲロウ目) ウスバカゲロウ科 *Myrmeleon solers* Walker, 1853

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



3 齢幼虫 鳥取市岩戸海岸 2015.5.13 / 撮影：鶴崎展巨

- 選定理由**：幼虫は海浜性のアリジゴクで、県内では鳥取砂丘と鳥取市気高町宝木（矢口）の砂浜のみに生息。鳥取砂丘内では生息基盤は比較的安定している。
- 特徴**：海浜性で、幼虫は巣穴形成型のアリジゴク。巣穴直径は最大 5 cm 程度。類似の生活様式をもつクロコウスバカゲロウとは、明るい黄白色の体と頭部の斑紋で区別できる。巣穴はクロコのそれより常に海側の開けた砂地上に形成される。2 または 3 齢幼虫で越冬し、成体は 6-8 月頃出現。産卵から羽化までに多くは 2 年かかるとみられる。規模の大きい砂浜海岸にしか出現しない。鳥取砂丘では 1990 年代半ばからの除草範囲の拡大とともに生息域が拡大した。
- 分布** 県内：鳥取市鳥取砂丘（十六本松付近から東は岩戸海岸まで）と気高宝木の砂浜海岸のみ。 県外：福岡県、島根県、新潟県、山形県の海岸砂丘；アフガニスタンから中国南部まで。
- 保護上の留意点**：鳥取砂丘には広く生息しており、現在はとくに心配ないが、林縁に近い海浜植生群落付近での過度の踏みつけに注意が必要。
- 文献**：13, 34, 327, 334, 342.

執筆：鶴崎展巨

**クロコウスバカゲロウ** 脈翅目(アミメカゲロウ目) ウスバカゲロウ科  
*Myrmeleon bore* (Tjeder, 1941)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
 環境省：—



3 齢幼虫 鳥取市岩戸海岸 2015.5.13 / 撮影：鶴崎展巨

- 選定理由**：鳥取砂丘では近年、分布範囲、個体数とも激減した。
- 特徴**：幼虫(アリジゴク)は海浜や河川の砂地岸辺に巣穴を作る。ハマベウスバカゲロウ(以下ハマベ)が出現する砂浜では本種の巣穴は常に内陸側のクロマツ林縁に形成される。ハマベとは幼虫は体色が黒っぽいことと頭部背面の模様で区別できる。鳥取砂丘にはかなりひろく生息していたが、1990年代半ばからの除草の拡大でハマベの分布が拡大し、現在では本種は一部の林縁でしか見られず、個体数も減っている。3 齢幼虫で越冬し、成体は6-8 月頃出現。産卵から羽化までは通常1年とみられる。成虫は樹林地で採餌するので本種の生息には砂浜と樹林が接していることが重要である。
- 分布** 県内：全域の砂浜海岸。砂地環境があれば海岸からやや離れたところ(鳥取大学農場)でも見つかるが、県内ではそれ以上内陸側での記録はない。県外：北海道、本州、九州；朝鮮半島、シベリア、ヨーロッパ。
- 保護上の留意点**：鳥取砂丘ではいま以上に除草面積を拡大しないことと周囲の砂防林の確保が重要。他の砂浜でも砂浜に接する樹林を伐採しないこと、砂浜と樹林の間を舗装道設置などで断ち切らないことが重要である。
- 文献**：13, 234, 327, 338, 342. 執筆者：鶴崎展巨

**ケカゲロウ** 脈翅目(アミメカゲロウ目) ケカゲロウ科  
*Acroberotha okamotois* (Nakahara, 1914)

鳥取県：情報不足 (DD)  
 環境省：—



鳥取市久松山 2019.6.18 / 撮影：大生唯統

- 選定理由**：県下では久松山から本陣山にかけての自然度の高い照葉樹林に安定して産するものの、ここ数年シカの侵入が確認されており、食害による林内の乾燥化が懸念される。丘陵地の二次林やブナ帯でも散発的に得られているが確認地点は少ない。
- 特徴**：日本産唯一のケカゲロウ科で幼虫はヤマトシロアリを捕食することが知られている。成虫は日没後に林内の朽木周辺を飛翔するほか、灯火に飛来する。
- 分布** 県内：鳥取市、若桜町(氷ノ山)。県外：本州・四国・九州、琉球
- 保護上の留意点**：県東部低地の照葉樹林のシカ害が顕著になる前に生息状況把握が必要である。シロアリに依存した生活史を送るため、安定して産する自然度の高い照葉樹林の皆伐は厳禁である。登山道整備の際には枯木は林外へ持ち出さず、危険のない林内の林床に寝かせておくような配慮をお願いしたい。
- 文献**：6. 執筆者：大生唯統

**キバネツトトンボ** 脈翅目(アミメカゲロウ目) ツトトンボ科  
*Ascalaphus ramburi* MacLachlan, 1875

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
 環境省：—



雌 西伯郡伯耆町栃原 2019.5.17 / 撮影：大浜祥治

- 選定理由**：分布が局所的であり、土地造成等による生息する草地の消滅・環境悪化により、生息が脅かされている。
- 特徴**：体長20-25 mm 内外。雌の方がやや大きい。体は黒く頭部や胸部の一部に黄斑があり、長い毛におおわれる。後翅の黄色と黒のコントラストが鮮やかで、生息地では非常に目立つ。丘陵地～山地にかけての草原に生息し、春から初夏にかけて活発に飛び回って小昆虫を捕食する。雌は草木の小枝等に卵を産みつける。幼虫はアリジゴクによく似ているが、地面に漏斗状の巣を作ることはなく、地表を動き回りながら小昆虫を捉えて体液を吸う。
- 分布** 県内：近年、西部の大山周辺地域で記録されるようになった。東部では鳥取市青谷町における1940年代の記録が唯一である。県外：本州・九州に分布するが、どこでも産地は局所的で生息環境が衰退している。日本固有種。
- 保護上の留意点**：生息する草原環境の保全。
- 文献**：51, 161, 174, 275, 382. 執筆者：大浜祥治

## アイヌハンミョウ 鞘翅目(コウチュウ目) ハンミョウ科

*Cicindela gemmata aino* Lewis, 1891

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



日野町寝覚峽 2021.5.14 / 撮影：田村昭夫

- 選定理由：河川改修工事などによる生息環境の減少。
- 特徴：体長 16–17 mm の大型のハンミョウ。上翅に青い点の列があり、前胸腹板に白い剛毛が密生する。ニワハンミョウに似るが、本種は翅中部の紋が一様な太さで波状になることや、翅端部の紋が発達するため区別可能である。河川の上流域から中流域の礫地で見られ、春から初夏にかけて出現する。雨天時や夜間などの低温時には石下に潜む。ニワハンミョウやコニワハンミョウと混生することが多い。
- 分布 県内：千代川、日野川、加勢蛇川など県内河川の上流から中流域。県外：北海道、本州、四国、九州、対馬；朝鮮半島、中国、シベリア南東部。
- 保護上の留意点：生息地周辺の河川改修工事の際は、本種の生息に影響が出ないように留意する。
- 文献：87, 318.

執筆者：福田侑記

## ナミハンミョウ 鞘翅目(コウチュウ目) ハンミョウ科

*Sophiodela japonica* (Thunberg, 1781)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



雄 南部町福成 2010.8.17 / 撮影：桐原佳介

- 選定理由：かつては広く見られたが、生息環境である裸地の舗装化等により個体数が減少傾向である。改めて産地確認が必要。
- 特徴：体長約 20 mm の大型のハンミョウ。赤、青、緑色に輝く美しい種である。日当たりの良い農道や山道、神社や墓地などの広い裸地に生息し、春から秋にかけて出現する。冬は集団で土中越冬する。幼虫は粘土質の土壌に穴を掘り生息する。
- 分布 県内：東部から西部にかけ広く分布。県外：本州、四国、九州、対馬、種子島、屋久島
- 保護上の留意点：生息環境である日当たりのよい舗装化されていない裸地環境の確保。
- 文献：18, 19.

執筆者：福田侑記

## ハラビロハンミョウ 鞘翅目(コウチュウ目) ハンミョウ科

*Calomera angulata* (Fabricius, 1798)

鳥取県：絶滅 (EX)

環境省：絶滅危惧II類 (VU)



雄 石川県羽咋市 2014.9.14 / 撮影：永幡嘉之

- 選定理由：鳥取砂丘が県内で最後の生息地だったが、絶滅した。
- 特徴：体長 13 mm 内外、上翅はやや幅広い。中型種だが大顎は大きい。樹林で成虫越冬し、新成虫は 7–10 月頃に出現。砂浜に淡水流入部分があることが生息条件。幼虫は湿り気のある砂地に深さ 20 cm 程度の坑道を作って潜む。かつて生息が確認されていた県内東部の河川河口は、現在は見つからない。鳥取砂丘では 1990 年代半ばまではオアシス周辺と多鯰ヶ池にいたが、両地とも 2000 年代初めまでには消失。オアシスでの消失原因は重機使用の除草活動による営巣地の攪乱と思われる。
- 分布 県内：過去の記録地は多鯰ヶ池、千代川河口を含む鳥取砂丘、鳥取市小沢見、青谷。県外：本州（新潟県以西）、九州、種子島；台湾・中国・ネパール・東南アジア。
- 保護上の留意点：本県での絶滅要因は、上流からの汚排水、河口域の護岸による砂浜の消失、砂丘での重機使用の除草活動である。
- 文献：11, 220, 287, 336, 340.

執筆者：永幡嘉之・鶴崎展巨



**カワラハンミョウ** 鞘翅目(コウチュウ目) ハンミョウ科  
*Chaetodera laetescripa* (Motschulsky, 1860)

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)  
 環境省：絶滅危惧IB類 (EN)



交尾中の成虫(上が雄)。鳥取砂丘 2017.8.18 / 撮影：鶴崎展巨

■**選定理由**：生息地がきわめて限定され、孤立と分断が進行している。  
 ■**特徴**：体長 15 mm 内外。上翅の地色は黄色がかった白。海岸砂丘に生息。幼体で越冬し、成虫は 7-10 月に出現。幼虫は最終齢(3 齢)で直径 4-5 mm、深さ約 50 cm のほぼ垂直な坑道を海浜植生の周囲の裸地につくる。鳥取砂丘では幼虫の巣穴は広範囲にみられる。成虫は生息地内では広範囲に移動するようでマーク個体はほとんど再捕されない。上翅の斑紋には個体変異が大きい。鳥取砂丘の集団は日本の他の集団と比較すると上翅が白っぽいようである。

■**分布** 県内：現在は鳥取砂丘と天神川河口の 2 カ所のみ。県外：北海道、本州、四国、九州；大陸極東部。全国的に激滅し、すでに生息地が 20 カ所程度になっているが、鳥取砂丘はそのなかでも最大の生息地である。

■**保護上の留意点**：砂浜環境は人工化によって連続性が失われており復元の可能性はないため、少なくとも現状の面積と連続性を残すこと。幼虫が営巣する海浜植生の周囲の裸地で除草作業車を含む車両の乗り入れを規制し、観光客の踏圧も増やさないこと。天神川河口は広い砂地面積の確保が重要。

■**文献**：54, 287, 340, 343, 359.

執筆者：鶴崎展巨・永幡嘉之

**ホソハンミョウ** 鞘翅目(コウチュウ目) ハンミョウ科  
*Cicindela gracilis* Pallas, 1777

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)  
 環境省：絶滅危惧II類 (VU)



山形県 2018.8.19 / 撮影：永幡嘉之

■**選定理由**：生息環境が特殊で減少が進んでいるため。

■**特徴**：細身で小型のハンミョウで、飛翔力をもたない。夏季に出現、地面を敏捷に歩行し、他の昆虫類を捕食する。強度の攪乱により裸地が維持される遷移初期相に生息し、本県では山地の火山性草原の周辺でのみ確認されているが、他県では平地の河川敷にも生息している。生息環境にはセアカオサムシとの共通点が多い。

■**分布** 県内：江府町大山山系の数カ所で生息が確認されている。東部・中部では確認されていない。県外：本州、四国、九州；大陸極東部。

■**保護上の留意点**：火山性草原は登山道整備の際に表土の流出を避けるために、木片や砂利を敷く工法が増加しているが、裸地を渡り歩いて生活している種の主要な活動空間が消失するため、多様な環境を維持する工法が検討されるべき。他の保全対策は、セアカオサムシの項を参照。

■**文献**：187, 240.

執筆者：永幡嘉之

**エリザハンミョウ** 鞘翅目(コウチュウ目) ハンミョウ科  
*Cylindera (Cicindina) elisae* (Motschulsky, 1859)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
 環境省：—



雌 鳥取市鳥取砂丘 2010.6.17 / 撮影：鶴崎展巨

■**選定理由**：生息地が減少している。鳥取砂丘オアシスでは、一時(2017-2019 年)危機的レベルにまで個体数が減少した。

■**特徴**：体長 10 mm 内外。小型のハンミョウで、河川・湖沼の岸辺や河口付近の砂浜に生息する。成虫は 6-9 月に出現。幼虫はシルト混じりのやや湿った砂地に営巣。巣穴直径は最終齢(3 齢)で 2.5 mm 内外。幼虫で越冬する。成虫は飛翔力があるようでミトコンドリア COI 遺伝子の地理的分化は低い。

■**分布** 県内：鳥取県中部・東部の河川敷や河川河口で記録があるが、現在は確認できない地点が多い。現在確認できているのは鳥取砂丘、多鯨ヶ池、千代川下流、など。県外：北海道、本州、四国、九州；ロシア極東、韓国、中国、モンゴル。

■**保護上の留意点**：河川管理において砂地・泥地の岸辺を確保することが重要と思われる。鳥取砂丘ではオアシス周辺の営巣地で踏圧が増加しないように管理が必要。

■**特記事項**：鳥取砂丘では 2020 年以降、新型コロナ流行で砂丘への立ち入り制限や観光客減少で踏圧が減ったせいかな個体数はやや回復した。

■**文献**：17, 298, 337, 340, 341.

執筆者：鶴崎展巨・福田侑記

## オオヒョウタンゴミムシ 鞘翅目(コウチュウ目) オサムシ科

*Scarites sulcatus* Olivier, 1795

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



島根県出雲市 2013.7.9 / 撮影：林 成多

■**選定理由**：規模の大きな海岸砂丘に生息するが、生息地が道路開発や海岸侵食によって縮小分断している。

■**特徴**：体長 30–40 mm 前後。外見での雌雄差がほとんど無い。体型は瓢箪型で黒色。発達した大顎や深い条溝などの特徴により同定は容易である。国内に近似した種はいない。夜行性で、日中に姿を見ることは稀である。コガネムシ類などを好んで捕食する。幼虫は昼夜問わず、地表に現れることはない。内陸の砂地環境にも生息する種であるが、国内では海岸以外の生息地はほとんど残っていない。

■**分布** 県内：鳥取砂丘など。県外：本州、四国、九州、東南アジア、南アジア。

■**保護上の留意点**：クロマツを主体とする海岸林の保全が重要。道路側溝の形状は浅くするか砂丘林側へ脱出可能なスロープを設けるなどの対策が必要である。

■**文献**：57, 339.

執筆：林 成多

## ダイセンツヤゴモクムシ 鞘翅目(コウチュウ目) オサムシ科

*Trichotichnus daisenus* Habu, 1973

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：—



大山町大山小鳥の道産 2006.8.12 採集 / 撮影：伊藤 昇

■**選定理由**：大山がタイプ産地。近年の大山での記録が途絶えている。

■**特徴**：体長 12 mm 前後。前胸背板は基部が狭まった心臓形で上翅の光沢が強い。ブナ林の林床に生息するが、地表にはあまり出ず、石下や石と石の間隙などが生息地と考えられる。2000 年代後半に実施した大山での調査では、一般的な落とし穴式のトラップでは本種は捕獲されていない。火山である大山は火山性の碎屑物が厚く堆積しており、地表下に間隙が多いため、採集や観察が難しい可能性もある。

■**分布** 県内：大山。県外：本州 (中国山地)。

■**保護上の留意点**：本種の生息状況の解明を目的とした調査が必要である。

■**文献**：23.

執筆：林 成多

## セアカオサムシ 鞘翅目(コウチュウ目) オサムシ科

*Carabus tuberculatus* (Dejean & Boisduval, 1829)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



若桜町広留野 2016.6.19 / 撮影：松井悠樹

■**選定理由**：主要な生息環境である山地の草原が激減しているため。

■**特徴**：小型のオサムシで上翅には顆粒が規則的に並ぶ。裸地を伴った草原に生息し春に産卵、幼虫は他の昆虫類を食べる。成虫越冬。生息地は低地では河川氾濫原や堤防、山地では採草地の草原で、いずれも攪乱環境で遷移初期相が継続している共通点がある。環境適応力はやや高く、草原が森林化した場所に一時的に残存している例もあるが、暗い森林中にはまったく見られないため、将来的には地域的な絶滅が進行する可能性が高い。

■**分布** 県内：県内全域の山地の草原 (扇ノ山、氷ノ山、大山山系) および河川敷など低地の草原。分布はホソハンミョウとの共通性が高い。県外：北海道、本州、四国、九州；朝鮮半島、中国、ロシア極東部。

■**保護上の留意点**：環境適応力は比較的高いものの、草原の指標種である。本種を対象にした独自の保全対策では攪乱環境の維持までではできず、多くの草索性チョウ類とあわせた草索性の動植物保全の総合計画を立て、重点地域を絞り込んだうえで、草原の再生および維持を計る必要がある。

■**文献**：183.

執筆：永幡嘉之

**イグチケブカゴミムシ** 鞘翅目(コウチュウ目) オサムシ科  
*Peronomerus auripilis* Bates, 1883

鳥取県：情報不足 (DD)  
 環境省：準絶滅危惧 (NT)



鳥取県立博物館収蔵標本 米子市(日野川)  
 1997.7.24 採集/撮影：大生唯統

- 選定理由**：河川敷を中心に生息する湿地性のゴミムシで、県下では1997年に日野川下流河川敷で採集されて以来記録がない。
- 特徴**：体長9 mm内外。前胸背盤側縁の最広部が尖り、上翅背面の金色の立毛が目立つ。おもに河川敷に生息し、成虫で越冬する。灯火にも飛来することがある。
- 分布** 県内：米子市(日野川)。県外：北海道・本州、四国、九州。
- 保護上の留意点**：河川周辺の湿地環境を維持する必要がある。とくにコンクリート護岸化は本種の個体群に負の影響を及ぼす。
- 文献**：109。

執筆者：大生唯統

**クビナガヨツボシゴミムシ** 鞘翅目(コウチュウ目) オサムシ科  
*Tinoderus singularis* (Bates, 1873)

鳥取県：情報不足 (DD)  
 環境省：情報不足 (DD)



鳥取市浜坂(千代川) 2017.9.18 採集/撮影：大生唯統

- 選定理由**：河川下流の河川敷を中心とした良好な湿地環境に生息する種で全国的に絶滅が危惧されている種である。県下では2017年の洪水後、海浜に打ちあがった個体が得られているのみであり生息状況は不明。
- 特徴**：体長10 mm内外。上翅背面に橙色の4つの斑紋をもち、頭部が著しく細長い。大きな河川の河川敷で確認されることが多い。
- 分布** 県内：鳥取市(千代川)。県外：本州・四国・九州。
- 保護上の留意点**：早急な分布調査が必要。河川下流の湿地帯をそのままにしておく。
- 文献**：262。

執筆者：大生唯統

**オオトックリゴミムシ** 鞘翅目(コウチュウ目) オサムシ科  
*Oodes vicarius* Bates, 1873

鳥取県：情報不足 (DD)  
 環境省：準絶滅危惧 (NT)



香川県まんのう町 2019.8.23 採集/撮影：大生唯統

- 選定理由**：日南町のダム湖でのみ生息が確認されている。他県の生息状況から自然護岸で水位変動のある止水域において新たに見つかる可能性がある。
- 特徴**：体長12 mm内外。体色は黒色で、近似種エチゴトックリゴミムシとは、下唇中央歯の先が切れ込むことや雄の前跗節の幅が広いことなどで区別できる。夜行性で、水際を素早く走りまわり、危険を感じると水中へ潜ることもある。
- 分布** 県内：日南町。県外：本州、四国、九州。
- 保護上の留意点**：自然護岸で水位変動のある止水域は他の希少昆虫の生息地にもなるため開発や遷移進行に留意する必要がある。
- 文献**：109。

執筆者：大生唯統

## エチゴトックリゴミムシ 鞘翅目(コウチュウ目) オサムシ科

*Oodes echigonus* Habu & Baba, 1960

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



雌個体 米子水鳥公園 2016.10.31 採集/撮影：金田直人

■**選定理由**：西日本における産地は少なく、県下では汽水湖である中海沿岸のヨシ原でのみ得られている。県東部のヨシ原をとまなう広い止水域でも見つかる可能性がある。

■**特徴**：体長 15 mm 内外。体色は黒色で、近似種オオトックリゴミムシとは、下唇中央歯の先がまるいことや雄の前跗節の幅が狭いことで区別できる。

■**分布** 県内：米子市。県外：本州，九州。

■**保護上の留意点**：生息地の中海はラムサール条約登録湿地であるため開発による絶滅の可能は低い。

執筆者：大生唯統

## ニセトックリゴミムシ 鞘翅目(コウチュウ目) オサムシ科

*Oodes tokyoensis* Habu, 1956

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：—



日南町 2021.4.25 採集/撮影：大生唯統

■**選定理由**：北方系の種であり、日南町の冷涼な小規模湿地 1 地点でのみ生息が確認されている。本種が確認された小規模湿地は田園地帯の中であり、護岸の改修や埋め立てなどの人為的な要因によって容易に消失する可能性がある。また、同様の環境が点在する県西部において新たな産地が見つかる可能性が高い。

■**特徴**：体長 10 mm 内外。体色は黒色で、別属のトックリゴミムシに似るがより太く短いこと、後・中肢の跗節下面に密毛を持たないことで区別できる。

■**分布** 県内：日南町。県外：北海道，本州，九州。

■**保護上の留意点**：早急な生息状況の把握が必要である。生息地における自然護岸の改修は個体群の消失に直結するため避ける。

執筆者：大生唯統

## オグラヒラタゴミムシ 鞘翅目(コウチュウ目) オサムシ科

*Agonum ogurae* (Bates, 1883)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



鳥取市生山 2021.7.22 採集/撮影：大生唯統

■**選定理由**：県内の生息地は低山の谷を堰き止めた植生豊かなため池の池縁であり、近年、災害対策によるため池の廃止や外来種の侵入（とくにアメリカザリガニとヌートリア）によって生息環境が失われつつある。

■**特徴**：体長 7 mm 内外。背面は暗褐色で光沢は弱い。触角基部，脚，前胸と上翅の縁は淡黄褐色。夜行性で日中は池縁の石や枯葉の下に潜む。

■**分布** 県内：鳥取市の 2 地点。県外：本州，四国，九州。

■**保護上の留意点**：早急な分布状況の把握。ため池の改修の際には本種の生息に適した流入部のなだらかな斜面をそのままにしておく。

執筆者：大生唯統

**カワラゴミムシ** 鞘翅目(コウチュウ目) カワラゴミムシ科  
*Omophron aequale* Morawitz, 1863

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)  
環境省：—



交尾中の雌雄 鳥取市多鯨ヶ池 2018.5.11 / 撮影：大生唯統

- 選定理由**：護岸工事や河川改修によって良好な砂地環境が減少している。
- 特徴**：体長6 mm内外。円形の体型に長い脚を持ち、背面には顕著な斑紋がある。河川や海沿いの止水域の粒径の小さい湿った砂地に生息する。夜行性で灯火に飛来する。
- 分布** 県内：鳥取市、倉吉市、米子市。県外：北海道・本州・四国・九州。
- 保護上の留意点**：生息地での水際の改変は個体群の絶滅に直結するため配慮が必要である。
- 文献**：109, 229, 230, 258, 339。

執筆：大生唯統・林 成多

**ヘイケボタル** 鞘翅目(コウチュウ目) ホタル科  
*Luciola lateralis* Motschulsky, 1860

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：—



南部町 2021.6.4 / 撮影：桐原佳介

- 選定理由**：本種の主要な生息環境である良好な環境の中小規模の河川が減少しているため。具体的な減少要因としては、護岸や底貼りなどの河川改修や川沿いの常夜灯の設置があげられる。
- 特徴**：ゲンジボタルに似ているが、より小型。発光生物として著名で、卵から蛹のステージにおいても発光する。成虫の発光の点滅は速い。幼虫は水生で、おもにモノアラガイ類やサカマキガイなどの淡水巻貝を捕食する。川以外にも水田の素掘り水路にも生息する。6月がおもな成虫の発生期であるが、出現期間は長い。人里近くの河川に多数の個体が生息することが本来の河川の状態である。
- 分布** 県内：鳥取市、倉吉市、伯耆町、米子市、南部町。県外：北海道、本州、四国、九州；ロシア極東。
- 保護上の留意点**：成虫は日中の休息場所として川辺の植物を利用するため、発生時期における川沿いの除草は時期をずらすことや、一部を刈り残すなどの配慮が必要である。人工的な明かりも成虫の繁殖活動に影響する。
- 文献**：109。

執筆：林 成多

**ジョウカイボン** 鞘翅目(コウチュウ目) ジョウカイボン科  
*Lycocerus suturellus* (Motschulsky, 1860)

鳥取県：その他の重要種 (OT)  
環境省：—



南部町 2012.5.8 / 撮影：桐原佳介

- 選定理由**：普通種であるが、鳥取県東部地域が東方に分布する基準亜種 *L. s. suturellus* と西方に分布する西日本亜種 *L. s. luteipennis* の境界となっており、その付近では形態的に不安定で亜種の移行帯を形成している。生物地理学上、興味深い例である。
- 特徴**：体長14–21 mm程度で雄よりも雌の方がやや大型。全国的に見ると色彩変異は多様だが、鳥取県産の個体は上翅が一樣に薄茶から茶褐色である。近縁種との区別や亜種の正確な同定には雄交尾器または雌腹板を検するのが無難である。成虫は初夏に出現し、各種植物上で見られる。
- 分布** 県内：ほぼ全域に分布。智頭町以東の地域で両亜種の間中型が見られるが、大山周辺では完全に西日本亜種となる。県外：北海道から屋久島。基準亜種と西日本亜種の間中型は兵庫県西部、岡山県東部、四国でも見られる。伊豆半島周辺には、伊豆亜種 *L. s. izuensis* が分布する。
- 保護上の留意点**：県東部の移行帯の集団のある樹林地の保全が重要。
- 文献**：255, 256, 257。

執筆：奥島雄一

## エグリマメジョウカイ 鞘翅目(コウチュウ目) ジョウカイボン科

*Podosilis omissa* (Wittmer, 1954)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



鳥取市(千代川) 2021.5.23 採集/撮影: 大生唯統

■**選定理由**：全国的に記録の少ない種で、良好な湿地や河川敷に生息しているがそれらの環境は減り続けている。県下では千代川下流河川敷の近年人工的に創出された湿地周辺で確認された。

■**特徴**：体長5 mm内外。背面は光沢のある黒色で、各脚と触角第1節から第4節まで橙色。雄の前胸背板後縁は和名の通り顕著にえぐれる。県下では千代川下流河川敷の草地でのみ確認されている。

■**分布** 県内：鳥取市(千代川下流)。県外：本州。

■**保護上の留意点**：本種の生息する良好な湿地や河川敷は減り続けているため、埋め立てやコンクリート護岸化は厳禁である。千代川下流の人工的に創出された湿地周辺で確認されたため、近隣に個体群が存在する場合、このような手法が本種の新たな生息地創出に有効である可能性がある。

執筆: 大生唯統

## ヒメシマチビゲンゴロウ 鞘翅目(コウチュウ目) ゲンゴロウ科

*Nebrioporus nipponicus* (Takizawa, 1933)

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：—



栃木県大田原市 2018.11.30 /撮影: 林 成多

■**選定理由**：西日本では分布が限られるうえに、県内では記録そのものが少なく個体群が孤立している可能性が高いため。

■**特徴**：体長4-5 mm。小型のゲンゴロウで背面には細かな縞模様がある。近似種がいくつかあり同定には注意が必要。底質が礫と砂である河川の中・上流域に生息し、泥の堆積する河川には生息しない。流水性のゲンゴロウ類は生息する微環境が限られていることが多いが、本県では不明であり、定期的に実施される河川の環境調査でも再確認されない。

■**分布** 県内：大山山麓の河川で記録があるが、他の地域にも生息している可能性がある。県外：本州、四国。東日本での記録が多い。

■**保護上の留意点**：県内全域の河川に広く生息している可能性があり、まず分布状況の確認が必要。そのうえで生息に必要な微環境を絞り込み、河川の改修などに反映させる必要がある。

■**文献**：30。

執筆: 永幡嘉之

## クロゲンゴロウ 鞘翅目(コウチュウ目) ゲンゴロウ科

*Cybister brevis* Aube, 1838

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



鳥取県八頭町門尾 2017.10.13 /撮影: 大生唯統

■**選定理由**：県内全域で生息地が激減している。大山がタイプ産地。

■**特徴**：中型種のゲンゴロウ。生態はゲンゴロウとほぼ同じだが、より浅く植物が豊富な止水域に生息する。休耕田や水路にも生息するため、ため池への依存度はゲンゴロウに比べるとやや低い。広く分布していたはずの鳥取平野の大部分では1990年代にすでに確認できず、その時点で多かった東部の岩美町でも2000年代には数地点以外では姿を消した。オオクチバス・ブルーギルなどの外来魚類、アメリカザリガニ、ウシガエルのいずれか1種でも侵入すると生息できず、外来種の拡散によって激減が進む。

■**分布** 県内：全域の平野から丘陵地。現在は山間部の農地周辺にごく局地的に個体群が残るのみ。県外：本州、四国、九州；朝鮮半島、中国。

■**保護上の留意点**：ゲンゴロウの項を参照。水生昆虫のなかでも止水性の昆虫群集の総合的な重点保全地域を、複数(5地点以上)の溜池を周囲の水田および水路でつなぐ形で設ける以外に実効性のある保全策はなく、外来種の重点的な駆除は少なくとも5 km以上離れた周辺で実施すべき。

■**文献**：188。

執筆: 永幡嘉之

**ゲンゴロウ** 鞘翅目(コウチュウ目) ゲンゴロウ科  
*Cybister chinensis* Motschulsky, 1854

鳥取県：絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)  
環境省：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



鳥取県 2020.8.22 / 撮影：桐原佳介

- 選定理由**：生息地の減少と孤立が進行し、近年中の絶滅が危惧される。
- 特徴**：大型のゲンゴロウ。県内ではおもに農業用ため池に生息し、春に水草に産卵、幼虫は上陸して岸辺の土中で蛹化する。幼虫時は時に水田の水路にも拡散する。成虫は夜間活発に飛翔し分散する。激滅の主要因は外来種の拡散で、オオクチバス・ブルーギルなどの外来魚類、アメリカザリガニ、ウシガエルのいずれか1種でも侵入すると生息できない。1990年代には生息地が多かった岩美郡では2000年代に激滅し、中部では絶滅した。
- 分布** 県内：全域に分布していたが、現在は山間部の農地周辺に数カ所の個体群が残るのみ。県外：北海道、本州、四国、九州；アジア東部。
- 保護上の留意点**：アメリカザリガニおよびウシガエルは駆除が非常に困難で、生息地ごとの個別の保全対策では実効性がない。県内で外来種の侵入していない生息地に水生昆虫の総合的な保全重点区域（区域内に複数の溜池を含む）を設定し、周辺に外来種の拡散防止ラインを設定して予防的な駆除を続けることが必要。それ以外に実効性のある保全策はない。
- 文献**：190. 執筆者：永幡嘉之

**コガタノゲンゴロウ** 鞘翅目(コウチュウ目) ゲンゴロウ科  
*Cybister tripunctatus lateralis* (Fabricius, 1798)

鳥取県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)  
環境省：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



倉吉市中田 2013.9.27 / 撮影：國本洗紀

- 選定理由**：普通種だったが2000年代初めには県内の確認地が3カ所になり、全国的にも絶滅とみられる地域が多かった。しかし、2008年ごろから増加に転じ県内各所および他県でも見られるようになったが、2017年ごろからより広範囲に分散するも減少に転じる傾向がみられる。
- 特徴**：平均体長が26-27mmの中型のゲンゴロウである。腹面は黒色から黒赤色まで変異がある。おもに水田で産卵し、幼虫はオタマジャクシ等を捕食する。蛹化は畦の土中で行われ、羽化成虫も水田ですぐす。田の水抜き後は越冬水域に移動し大部分は春まで止まるが、3km以上再移動した例もある。
- 分布** 県内：県内全域の平野部。県外：本州、四国、九州、沖縄。
- 保護上の留意点**：ウスバキトンボが多いなど餌の多い耕作田が重要であり、生活史に合わせた水管理、土畦の維持や減農薬が必要である。越冬は同じ水域内でも条件のよい場所に集中するため、水草があり、水質の良い池等を多く作る必要がある。
- 特記事項**：条例制定時（2001年）から鳥取県特定希少野生動植物だったが、2022年3月に指定を解除された。
- 文献**：120, 122, 123, 126. 執筆者：國本洗紀

**マルガタゲンゴロウ** 鞘翅目(コウチュウ目) ゲンゴロウ科  
*Graphoderus adamsii* (Clark, 1864)

鳥取県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)  
環境省：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



鳥取県 2019.12.4 / 撮影：桐原佳介

- 選定理由**：かつては普遍的に分布していたが、近年は激滅している。
- 特徴**：中型種のゲンゴロウで水草の豊富な溜池などの止水域に生息し、灯火に飛来することがある。幼虫は夏季に発生し、成虫越冬。水田で発生することもあるが、溜池を重点的に調査することで分布の動向の把握は可能である。情報が十分でないため絶滅危惧Ⅱ類にされているが、詳細な調査を実施すれば、実際には絶滅危惧Ⅰ類相当である可能性が高い。
- 分布** 県内：1990年代以降の時点で岩美町・大山町の各1カ所でしか記録がみられなかったが、近年の重点的な調査においても西部の1カ所でしか確認されない。県外：北海道、本州、四国、九州；アジア東部。
- 保護上の留意点**：ゲンゴロウの項を参照。止水域に生息する水生昆虫には本種に限らずシマゲンゴロウ、ルイスツブゲンゴロウ、ニセルイスツブゲンゴロウなど、近年の確認例がほとんどない種が複数あり、いずれも絶滅危惧Ⅰ類相当ではないかと考えられる。個別の対策では実効性がなく、県単位で重点地域を設定して総合的な保全対策を進める以外に方法はない。
- 文献**：189. 執筆者：永幡嘉之

## シマゲンゴロウ 鞘翅目(コウチュウ目) ゲンゴロウ科

*Hydaticus bowringii* Clark, 1864

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)  
環境省：準絶滅危惧 (NT)



鳥取県西部 2008.5.3 / 撮影：桐原佳介

- 選定理由：減少が顕著で、確実に確認できる場所が限られている。
- 特徴：丘陵地や低山地の水田や溜池に生息する中型のゲンゴロウ。体長約 13 mm。上翅の斑紋により、容易に同定できる。幼虫は水田や休耕田などの浅く水生植物の豊富な止水域に生息し、カエルの幼生を好んで捕食することが近年の研究で明らかとなった。成虫は灯火に飛来することがある。野外における周年の生活史については、未解明な点もある。
- 分布 県内：倉吉市、天神川水系、千代川水系など。県外：北海道、本州、四国、九州、対馬、南西諸島；朝鮮、中国、台湾。
- 保護上の留意点：かつては水田がおもな繁殖場所であったが、営農方法や使用農薬等の変化によって安定した繁殖が困難になっている。生息地において、休耕田などを活用したビオトープを設置することは、本種の回復に貢献する可能性が高い。本種の繁殖にはカエル類の幼生が重要であることから、カエル類の繁殖期に浅い止水環境を維持する必要がある。
- 文献：64, 174, 351.

執筆者：林 成多

## ケシゲンゴロウ 鞘翅目(コウチュウ目) ゲンゴロウ科

*Hyphydrus japonicus* Sharp, 1873

鳥取県：情報不足 (DD)  
環境省：準絶滅危惧 (NT)



島根県出雲市 2015.3.8 / 撮影：林 成多

- 選定理由：全国的に減少が顕著である。鳥取県内では記録が少なく、減少状況については不明な点が多いが、1990年代には複数の地点で確認されている。現在の生息地を見つけること自体が、すでに困難な状況である。
- 特徴：丘陵地や低山地の水田や溜池に生息する小型のゲンゴロウ。体長 4 mm 前後。よく似た種にヒメケシゲンゴロウがいる。おもに水田で繁殖し、幼虫の特殊な口器形態はカイミジンコ類の捕獲に適した形状であることが、近年の研究で明らかになった。
- 分布 県内：鳥取市、岩美町、琴浦町、倉吉市。県外：北海道、本州、四国、九州、対馬、南西諸島；朝鮮、ロシア極東。
- 保護上の留意点：本種が再発見された場合には、繁殖場所を含めて生息状況を確認し、適切な対応をとる必要がある。
- 文献：41, 302.

執筆者：林 成多

## ツブゲンゴロウ 鞘翅目(コウチュウ目) ゲンゴロウ科

*Laccophilus difficilis* Sharp, 1873

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：—



島根県出雲市 2021.4.6 / 撮影：林 成多

- 選定理由：全国的に減少が顕著で、鳥取県内でも野外での確認が困難になっている。
- 特徴：丘陵地や低山地の水田や溜池に生息する小型のゲンゴロウ。体長約 4 mm。背面に模様はあるが、やや不明瞭。おもな繁殖場所は水田であったが、現状として、水田で見つかることがほとんどない。
- 分布 県内：岩美町、鳥取市。県外：北海道、本州、四国、九州、対馬、南西諸島；朝鮮、中国、ロシア極東。
- 保護上の留意点：本種が再発見された場合には、繁殖場所を含めて生息状況を確認し、適切な対応をとる必要がある。
- 文献：41, 296, 302.

執筆者：林 成多



**キボシツブゲンゴロウ** 鞘翅目(コウチュウ目) ゲンゴロウ科  
*Japanolaccophilus nipponensis* (Kamiya, 1939)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
 環境省：準絶滅危惧 (NT)



大山町 2020.9.1 / 撮影：林 成多

■**選定理由**：生息環境が特殊な流水性ゲンゴロウで、県内での生息地は局地的である。

■**特徴**：小型のゲンゴロウで顕著な斑紋がある。体長約 3 mm。現生種は日本固有の 1 属 1 種であり、近似種はいない。清澄な溪流で、河岸に樹木の細根が密に生えている淀みに生息する。生息環境が特殊なため、安定した生息地が形成しにくく、環境変化の影響を受けやすい。2020 年に鳥取県から初めて確認された。

■**分布** 県内：大山町。県外：北海道, 本州, 四国, 九州。

■**保護上の留意点**：生息河川の護岸や堰堤の改修は、本種の生息環境を消滅させる原因となる。

■**文献**：65, 348.

執筆：林 成多

**オオミズスマシ** 鞘翅目(コウチュウ目) ミズスマシ科  
*Dineutis orientalis* Modeer, 1776

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
 環境省：準絶滅危惧 (NT)



鳥根県大田市 2020.10.7 / 撮影：林 成多

■**選定理由**：全国的に減少が顕著であるが、鳥取県内でも野外での確認が困難になっている。

■**特徴**：体長 10 mm 前後。丘陵地や低山地の溜池に生息する大型のミズスマシ。成虫は水面を旋回しながら遊泳し、潜水することもできる。ヒシやヒルムシロ属が生えている水域を好む。これらの水草の浮葉は、産卵や幼虫の生息場所として利用される。本種の急激な減少には、水質の変化や浮葉植物の減少が関連している可能性がある。

■**分布** 県内：鳥取市。県外：北海道, 本州, 四国, 九州, 南西諸島；朝鮮, 中国, ロシア極東, 東南アジア。

■**保護上の留意点**：本種の急激な減少には不明な点が多い。本種が再発見された場合には生息状況を確認し、改変を避ける必要がある。

■**文献**：174.

執筆：林 成多

**ミズスマシ** 鞘翅目(コウチュウ目) ミズスマシ科  
*Gyrinus japonicus* Sharp, 1873

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)  
 環境省：絶滅危惧II類 (VU)



南部町 2020.8.21 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：生息地がきわめて局所的であり、個体数が少ない。

■**特徴**：体長 7 mm 内外。体は楕円形で黒く、背面には藍色っぽい金属光沢がある。水質が良く植生が豊かな止水に生息し、水面を不規則に素早く泳ぎ回る。水面に落ちた小昆虫を捕食する。

■**分布** 県内：琴浦町, 伯耆町, 南部町。県外：本州, 四国, 九州；朝鮮半島, 中国北部, 極東ロシア。

■**保護上の留意点**：全国的に急激に数を減らしており、水面を泳ぎ回る性質から界面活性剤による水質汚染の影響が疑われている。水質のよい止水環境の保全が必要。県内で確認されている生息地がごく限られており、これらの生息環境の保全が欠かせない。

■**文献**：228, 378.

執筆：桐原佳介・大生唯統

## キイロコガシラミズムシ 鞘翅目(コウチュウ目) コガシラミズムシ科

*Haliplus eximius* Clark, 1863

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：絶滅危惧II類 (VU)



鳥取市 2018.12.22 / 撮影：大生唯統

■**選定理由**：全国的に減少しているが、鳥取県内では2018年に初めて確認された。生息地はごく限られている。

■**特徴**：丘陵地や低山地の溜池に生息するヒメコガシラミズムシ属の一種。体長約3.4 mm前後。背面は黄色で、上翅に模様はあるが不明瞭。幼虫はシャジクモ類を摂食するが、野外で確認することは難しい。

■**分布** 県内：鳥取市。県外：本州，四国，九州，対馬，南西諸島；朝鮮，中国～インドネシア。

■**保護上の留意点**：水質の変化に敏感な種であるため、生息地の池への濁水や各種薬剤の流入は避けなくてはならない。

■**文献**：263.

執筆者：林 成多

## ガムシ 鞘翅目(コウチュウ目) ガムシ科

*Hydrophilus acuminatus* Motschulsky, 1853

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



南部町 2020.8.4 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：成虫は各地で見られるが、幼虫が繁殖可能な場所が減少している。

■**特徴**：丘陵地や低山地の水田や溜池に生息する大型のガムシ。成虫は灯火によく飛来し、とくに8月に多い。幼虫の重要な餌資源はモノアラガイ類などの淡水巻貝で、大顎は左右不对称形で右巻きの貝を捕食するのに適している。かつては水田が主要な繁殖場所であったが、水田に入れる水が浅くなり、中干しを行うなど、営農方法の変化によって、幼虫の生育がしにくい状況となっている。水田に隣接した素掘りの掘上水路など水位・水量の安定した水域が重要である。

■**分布** 県内：鳥取市，倉吉市，米子市，南部町，大山町，伯耆町。県外：北海道，本州，四国，九州，対馬，南西諸島；朝鮮，中国，ロシア極東，東南アジア。

■**保護上の留意点**：成虫は移動性が高いため、幼虫の繁殖環境があるかどうか重要である。

■**文献**：44, 62, 64, 174.

執筆者：林 成多

## ヒメガムシ 鞘翅目(コウチュウ目) ガムシ科

*Sternolophus rufipes* (Faricius, 1792)

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：—



南部町 2020.4.30 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：平野部においては普通に見られる種であるが、中山間地では繁殖可能な一時水域の減少によって個体数の減少がみられる。普通種の水生甲虫類が急激に減少する例があり、本種についても注視する必要がある。

■**特徴**：体長約10 mm。背面は黒色で、中・後脚に遊泳毛があり、活発に遊泳する。成虫は夏から秋に灯火によく飛来する。成虫は水辺や水中に植物が密生している場所を好み、幼虫は浅い水域に生息する。

■**分布** 県内：沿岸部を主体とする全域。県外：本州，四国，九州，南西諸島；朝鮮，中国，台湾，東南アジア，南アジア。

■**保護上の留意点**：成虫は移動性が高いため、休耕田を利用したビオトープを設置することは本種の保全に寄与する。

■**文献**：109.

執筆者：林 成多

**ヤマトゴマフガムシ** 鞘翅目(コウチュウ目) ガムシ科  
*Berosus japonicus* Sharp, 1873

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
 環境省：—



大山町羽田井 2020.9.10 / 撮影：大生唯統

- 選定理由**：2000年代までは山間部から平野部の水域で普通に確認されていたが、近年の記録は一級河川と県西部の山間部の谷戸に限られる。
- 特徴**：体長4 mm内外。背面は灰黄褐色で頭部は黒褐色。上翅間室の点刻列は1列。幼虫は5月から7月に開放的な浅い止水域で確認される。
- 分布** 県内：鳥取市、三朝町、倉吉市、米子市、大山町、伯耆町。 県外：本州・四国・九州・南西諸島(種子島)；中国・朝鮮半島・台湾。
- 保護上の留意点**：水田の廃止や圃場整備による利用形態の変化によって減少していると考えられることから、早急な現状把握と休耕田を用いた生息適地の創出が必用である。現在、優占するトゲバゴマフガムシとの関係も留意する必要がある。
- 文献**：109, 239.

執筆：大生唯統・林 成多

**ゴマフガムシ** 鞘翅目(コウチュウ目) ガムシ科  
*Berosus punctipennis* Harold, 1878

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)  
 環境省：—



島根県出雲市 2015.9.15 / 撮影：大生唯統

- 選定理由**：2000年代初頭までは普通種であったが、急速に減少している。県内でも近年の記録がない。
- 特徴**：丘陵地や低山地の水田や溜池に生息する小型のガムシ。体長6 mm前後。よく似たヤマトゴマフガムシよりも大型である。中・後脚に遊泳毛が発達する。成虫は灯火によく飛来し、とくに8月に多い。コナギやオモダカが繁茂する休耕田は本種が好む環境であるが、良好な状態は数年で遷移してしまう。幼虫は水底に生息し、水に浮くことがなく、動きも緩慢なため、野外で発見することが難しい。
- 分布** 県内：千代川水系、天神川水系、日野川水系。 県外：北海道、本州、四国、九州、南西諸島；朝鮮、中国、台湾、ロシア極東、モンゴル。
- 保護上の留意点**：成虫は移動性が高いため、休耕田を利用したビオトープを設置するなど積極的な保護策が必要である。
- 文献**：109.

執筆：林 成多・大生唯統

**オニヒラタシテムシ** 鞘翅目(コウチュウ目) シテムシ科  
*Thanatophilus rugosus* (Linnaeus, 1761)

鳥取県：情報不足 (DD)  
 環境省：—



獣糞に集まった成虫 若桜町春米(氷ノ山) 2021.7.1 / 撮影：大生唯統

- 選定理由**：オープンランドを好む種で本種の生息に適した河川敷や二次草原が減少している。県内では1941年4月以降記録がなかったが、2021年7月に80年ぶりに若桜町で再発見された。
- 特徴**：体長10 mm内外。全体が黒色で、上翅間室は網目状。
- 分布** 県内：鳥取市、若桜町(氷ノ山)。 県外：北海道、本州、四国、九州；シベリア、朝鮮半島、中国大陸、中央アジア、ヒマラヤ、ヨーロッパ。
- 保護上の留意点**：県下では管理された二次草原で得られており、オープンランドを維持するために継続的な草刈りが必要である。
- 文献**：237.

執筆：大生唯統

## オオクワガタ 鞘翅目(コウチュウ目) クワガタムシ科 *Dorcus hopei* (Saunders, 1854)

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：絶滅危惧II類 (VU)



山形県 2021.6.25 / 撮影：永幡嘉之

■**選定理由**：生息環境の分断と縮小が進んでいることと、飼育個体が逃げ出すことによる分布および遺伝子の攪乱が懸念されること。

■**特徴**：大型で黒色のクワガタムシで、成虫は6-9月に出現、夜間に樹液に集まるが、樹洞に潜むため灯火で採集されることが多い。自然度の高い二次林から山間部の渓谷林にかけて生息しているが、分布の主体は平野から低山地にあり、東北地方のようにブナ林で確認された例はない。本県で知られる食樹はソメイヨシノだが、クヌギなど各種の広葉樹を食べている可能性が高い。

■**分布** 県内：県内全域の平野から低山地。標本を伴った確実な確認例は鳥取市・三朝町・南部町・米子市から知られる。県外：北海道、本州、四国、九州；朝鮮半島，中国。

■**保護上の留意点**：生息地の林を孤立させずに連続性を保つこと。分布や遺伝子の攪乱を防ぐため、広く販売されている本種や外国産の昆虫を野外に放さないという啓発を進めること。新たな生息情報が得られた際には状況を検証し、自然分布か否かを確かめることも不可欠である。

■**文献**：97, 219, 289, 361.

執筆：永幡嘉之

## マグソクワガタ 鞘翅目(コウチュウ目) クワガタムシ科 *Nicagus japonicus* Nagel, 1928

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：—



琴浦町三本杉 2019.5.12 / 撮影：田村昭夫

■**選定理由**：生息環境が特殊で、個体群の縮小が起こりやすいため。

■**特徴**：小型で褐色、一見コガネムシ類に似る。晩春に河川の源流～上流域の砂が堆積した場所に現れ、オスは日中に活発に飛翔する。幼虫は砂に埋もれた朽木を食べる。砂地はどの河川にもみられるが、本種の生息地は規模の大きな砂地と河畔の森林とが組み合わさった場所に限られ、とくに西日本では分布は局限される。中国山地での既知の生息地は3地点のみ。

■**分布** 県内：大山山系の河川敷。県内の他の水系にも生息している可能性がある。県外：北海道、本州。日本固有種。

■**保護上の留意点**：河川上流部の砂の堆積地は、護岸や河床確保のための砂の撤去、砂の採取などの影響を受けやすい。さらに、治山対策が進み洪水の頻度が低下すれば、植物が密生して生息環境ではなくなる。他県で開発時に砂の移植が行われた例でも、1年で植物が密生したため実効性に乏しい。したがって、同様の環境に生息するアイヌハンミョウなどとあわせて、攪乱環境を将来的にどのように維持するのかを事前に河川管理者と協議しておく必要がある。

■**文献**：243.

執筆：永幡嘉之

## ダイコクコガネ 鞘翅目(コウチュウ目) コガネムシ科 *Copris ochus* Motschulsky, 1860

鳥取県：絶滅 (EX)

環境省：絶滅危惧II類 (VU)



長野県 2020.9.17 / 撮影：谷島 昂

■**選定理由**：県内では1990年代以降、確実な生息地が知られていない。

■**特徴**：食糞性のコガネムシで、雄の大型個体は長い角をもつ。開けた放牧地のウシの糞に集まり、灯火にも来る。森林内には生息しない。現在知られる近県の生息地はいずれも在来のススキ草原に限られ、人工の牧草地では確認されていない。長期的に野生動物で発生している個体群は知られず、短期の放牧の休止が絶滅に直結する。現在の分布からは農耕とともに移入された外来種と見なされることが多いが、縄文時代の遺跡から出土しており在来種である可能性がある。

■**分布** 県内：過去には大山山系、鳥取市佐治町(灯火に飛来)。現在は絶滅。県外：北海道、本州、四国、九州、アジア北東部。

■**保護上の留意点**：在来植生の放牧地がない以上、本種の保全は困難だが、将来的に草原性の各種昆虫の保全が総合的に検討され、草原の管理にウシを用いることがあれば、本種は指標種として再導入の候補になり得る。

■**文献**：191.

執筆：永幡嘉之

**ミヤマダイコクコガネ** 鞘翅目(コウチュウ目) コガネムシ科  
*Copris pecuarius* Lewis, 1884

鳥取県：絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)  
環境省：—



岩手県 2021.8.17 / 撮影：谷島 昂

- 選定理由**：県内ではすでに確実な生息地が知られていない。
- 特徴**：食糞性のコガネムシで、ダイコクコガネよりもやや小型で光沢がある。広葉樹の林内や樹林を伴った放牧地でシカやウシの糞に集まる。日南町多里では若松牧場で採集されていたが、同地での1990年代の追跡調査では発見されていない。分布はシカおよびカモシカの自然分布とよく一致し、ダイコクコガネと異なり森林内に低密度で生息するため、絶滅かどうかの判断は難しい。同様にシカの糞に依存するオオセンチコガネおよびゴホンダイコクコガネはシカの増加に伴って分布が拡大傾向にあるため、本種も在来個体群が残っていた場合には個体数が増加する可能性がある。
- 分布** 県内：大山山系・日南町多里。県外：本州，四国，ロシア極東部。
- 保護上の留意点**：シカの低密度管理を政策として進めるうえでは、その影響として食糞性コガネムシ類の増減の傾向を把握しておくことが望ましい。
- 文献**：192.

執筆者：永幡嘉之

**オオチャイロハナムグリ** 鞘翅目(コウチュウ目) コガネムシ科  
*Osmoderma opicum* Lewis, 1887

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：準絶滅危惧 (NT)



鳥取市河合谷高原 2004.7.17 / 撮影：鶴崎展巨

- 選定理由**：県内の生息域に限られ、近年の確認例が少ない。
- 特徴**：体長30 mm内外の大型の甲虫。体はややつやのある黒褐色。ブナ帯以上の山地の広葉樹・針葉樹の古木の樹洞で発生する。成虫は7-9月に出現し雌雄ともに芳香がある。成虫は日中に樹洞の周辺を飛翔・徘徊するが、樹液や花には集まることがなく発見しづらい。成虫羽化までに2年かかると考えられている。
- 分布** 県内：大山山系，鳥取市（辰巳峠，河合谷高原），扇ノ山，氷ノ山。県外：本州，四国，九州，屋久島など。日本固有種。
- 保護上の留意点**：古木や立ち枯れなどを伐採・除去しないで維持することが重要。
- 文献**：4, 58, 63, 271, 335.

執筆者：鶴崎展巨

**ヨコミゾドロムシ** 鞘翅目(コウチュウ目) ヒメドロムシ科  
*Leptelmis gracilis* Sharp, 1888

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



出雲市 2014.6.15 / 撮影：林 成多

- 選定理由**：流路沿いのツルヨシやヤナギ類の樹木の根などの生息環境は人為的な改変だけでなく、近年増加している豪雨による消失の影響も受けやすい。
- 特徴**：体長2.7 mm前後。黒色で長い脚があり、水辺の水中に生える植物の根や流木の表面などに生息する。幼虫と成虫は根の中に潜り込むなどして越冬し、成長した幼虫は6月頃に上陸し、7月以降に新成虫が出現する。成虫のほとんどは痕跡的な後翅がある無翅型であるが、長翅型も出現し灯火に飛来する。
- 分布** 県内：千代川水系，天神川水系，日野川水系。生息環境を押さえ調べて調査を行えば、生息条件の揃った場所での確認はそれほど難しいことはない。県外：本州，四国，九州；朝鮮。
- 保護上の留意点**：河川中下流域の水辺植生の保全が重要。
- 文献**：39, 175.

執筆者：林 成多

### セマルヒメドロムシ 鞘翅目(コウチュウ目) ヒメドロムシ科

*Orientelmis parvula* (Nomura & Baba, 1961)

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：絶滅危惧II類 (VU)



日南町 2015.8.10 / 撮影：林 成多

■**選定理由**：生息地が局地的で、生息が確認できなくなった場所もある。流路沿いのツルヨシやヤナギ類の樹木の根などの生息環境は人為的な改変だけでなく、近年増加している豪雨による消失の影響も受けやすい。

■**特徴**：体長 1.5 mm 前後。水滴型で、上翅に 4 斑紋がある。水辺の水中に生える植物の細かな根の中に潜り込んでいる。川岸が頻繁に干上がるような場所には生息しない。生活史は不明な点が多いが、幼虫は成虫と同じ環境で確認されている。幼虫は小型で見つけにくい、前胸前半に橙色斑紋があるなど体色に特徴があり、同定は容易である。

■**分布** 県内：阿弥陀川水系、日野川水系。阿弥陀川の生息地は流路の環境が変化したことにより、再確認ができなくなった。県外：本州、九州。

■**保護上の留意点**：河川中下流域の水辺植生の保全が重要。本種が生息する流路は自然現象によって縮小や消滅することがある。多様な環境の流路を伴った河川の価値を再認識することも必要である。

■文献：38, 39, 45.

執筆者：林 成多

### ハガマルヒメドロムシ 鞘翅目(コウチュウ目) ヒメドロムシ科

*Heterlimnius hagai* (Nomura, 1958)

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：絶滅危惧IB類 (EN)



大山町 2014.11.15 / 撮影：林 成多

■**選定理由**：生息地が局地的で、個体数が少なくなった場所もある。流れが緩い流路で、かつ泥分の少ない砂礫質川床を好む。生息環境は人為的な改変だけでなく、近年増加している豪雨による消失の影響も受けやすい。

■**特徴**：体長 2.3 mm 前後。体は太短い楕円形で厚みがある。川底の砂礫の中に潜り込んでいる。生活史は不明な点が多いが、幼虫は成虫と同じ環境で確認されている。

■**分布** 県内：阿弥陀川水系、日野川水系。阿弥陀川の生息地は改変の影響を大きく受けている。県外：本州、九州。

■**保護上の留意点**：河川中の緩流の保全が重要。本種が生息する流路は自然現象によって縮小や消滅することがある。

■文献：38, 39.

執筆者：林 成多

### ケスジドロムシ 鞘翅目(コウチュウ目) ヒメドロムシ科

*Pseudamophilus japonicus* Nomura, 1957

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：絶滅危惧II類 (VU)



島根県出雲市 2014.6.15 / 撮影：林 成多

■**選定理由**：河畔植生が豊かで、かつ流木の供給のある河川に生息するため。とくに下流域での生息環境が消失しやすい。

■**特徴**：体長 5 mm 前後。日本産ヒメドロムシ最大の種。成虫は夏季に出現する。若齢幼虫はツルヨシやカサスゲなどの根に潜り込んでいる。中齢・老熟幼虫や成虫は流木の表面にある窪みで見つかることが多い。幼虫で越冬するが、冬季に野外で確認することは困難で、底質や河岸などに潜り込んでいると考えられる。

■**分布** 県内：天神川水系、日野川水系。県外：本州、九州。

■**保護上の留意点**：本種にとってとくに下流域の河畔林は重要である。管理のために伐採を行う場合は、流路沿いの樹木を部分的に残すことや、短期間に広範囲を伐採するような急激な改変を避ける必要がある。

■文献：36, 39.

執筆者：林 成多

**ツブスジドロムシ** 鞘翅目(コウチュウ目) ヒメドロムシ科  
*Paramacronychus granulatus* Nomura, 1958

鳥取県：情報不足 (DD)  
 環境省：—



若桜町三倉 2021.10.26 / 撮影：大生唯統

■**選定理由**：県内の生息状況があまり分かっていない。源流部の細流で確認されることが多いことから砂防ダム建設や林道整備によって生息地が失われている可能性がある。

■**特徴**：体長 2.5 mm 内外。体型はやや幅広い楕円型。体色は赤褐色～暗褐色。薄暗い細流の落ち葉溜まりで採集されることが多い。県西部では伯耆大山山麓の上流部，東部ではおもに中国山地の源流部から確認されている。

■**分布** 県内：鳥取市，若桜町，智頭町，琴浦町。県外：本州，四国，九州（南部），南西諸島（屋久島）。

■**保護上の留意点**：現在，生息環境は比較的安定しているが，砂防ダム建設や林道整備によって生息地が失われる可能性がある。

■**文献**：37。

執筆：大生唯統

**ダイセンマルヒメドロムシ** 鞘翅目(コウチュウ目) ヒメドロムシ科  
*Heterlimnius masakazui* (Kamite, 2015)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
 環境省：—



江府町 2015.8.18 / 撮影：林 成多

■**選定理由**：県内では大山の概ね標高 700 m 以上の源流部に生息する。大山の高標高地の河川は伏流することが多く，水量の安定した河川は限られている。

■**特徴**：体長 2.8 mm 前後。体型は楕円形。上翅が全体に黒色の個体が多いが，色彩変異があり，全体に橙色の個体も出現する。山地溪流に生息し，礫または砂礫の河床を好む。稀に水量の少ない沢で見つかることがある。夏から秋に新成虫が出現する。

■**分布** 県内：大山（タイプ産地）。県外：本州（蒜山）。

■**保護上の留意点**：砂防堰堤等の改修工事は影響が大きいいため，流路を確保しつつ，必要最低限の範囲で工事を行うなどの対策が必要。

■**文献**：38, 74。

執筆：林 成多

**トオヤマシラホシナガタムシ** 鞘翅目(コウチュウ目) タムシ科  
*Agrilus ventricosus* Fairmaire, 1888

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
 環境省：—



鳥取市佐治町高鉢山 1975.8.10 採集 / 撮影：山地 治

■**選定理由**：日本産ナガタムシ中最美しい種で同時に最希種の一つでもあった。国内では群馬県と鳥取県からの標本で記載されたがその後，中華人民共和国から記載された種と同種とされた。国内では，近畿，中部，関東，東北地方から記録され，日本産タムシ大図鑑ではやや少ないとされているが，多くの県でレッドリストに記載されている。鳥取県では八頭郡高鉢山のエゾエノキ衰弱木から複数の個体が確認されたが，伐採が終わってからの報告はないようである。鳥取県内にはエゾエノキは広く分布している所以他地域にも分布している可能性は高い。他県の見分を参考にすればエゾエノキ大木の衰弱部に飛来するようである。

■**特徴**：体長 12 mm 内外。近似種のシラホシナガタムシと比べ幅広い体型と金緑色の光沢で区別は歴然としている。エゾエノキ衰弱木から採集され，幼虫はエゾエノキの枯死部を食べるものと思われる。

■**分布** 県内：鳥取市佐治町高鉢山。県外：兵庫県・富山県・新潟県・福島県・群馬県・栃木県；中国。

■**保護上の留意点**：本種が依存するエゾエノキを含む天然林の保護が重要。  
 ■**文献**：3, 131, 267。

執筆：山地 治

### クロコモンタマムシ東日本亜種 鞘翅目(コウチュウ目) タマムシ科

*Poecilota variolosa chinensis* Théry, 1926

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



鳥取市 2019.6.25 / 撮影：大生唯統

■**選定理由**：西日本では少ない種で、現在、県下では住宅街外縁のヤマナラシ群落に依存しているため、開発や遷移進行で生息地が失われやすい。

■**特徴**：体長 15 mm 内外。背面は茶褐色～黒色のまだら模様で、腹面・各脚は紫銅色。県下では 6 月から 8 月の日中に、日光が当たる樹幹を徘徊したり、雌が部分枯れに産卵したりする様子が見られる。クロコモンタマムシ西日本亜種(ヤノコモンタマムシ)は、秋田(2019)で本亜種のジュニアシノニムとなった。

■**分布** 県内：鳥取市。県外：北海道・本州；朝鮮半島，中国北部，極東ロシア。

■**保護上の留意点**：産地での本種の個体数は少ないながらも安定している。ヤマナラシ群落の維持についてはフライシャーナガタマムシの項を参照。

■**文献**：2.

執筆：大生唯統

### フライシャーナガタマムシ 鞘翅目(コウチュウ目) タマムシ科

*Agrilus fleischer* Obenberger, 1925

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



鳥取市 2019.6.5 採集 / 撮影：大生唯統

■**選定理由**：全国的に少ない種で、現在、県下では住宅街外縁のヤマナラシ群落に依存しているため、開発や遷移進行で生息地が失われやすい。

■**特徴**：体長 11 mm 内外。体色は黒色で、上翅には 3 対 6 個の白斑がある。前胸腹板突起は舌状。6 月から 8 月の日中に日光が当たるヤマナラシ樹幹を徘徊する様子が見られる。同所的に確認されることが多いクロコモンタマムシより細い幹を好むため、樹冠部にいることが多い。

■**分布** 県内：鳥取市，伯耆大山。県外：北海道，本州；韓国，中国，モンゴル，ロシア(サハリン，シベリア東部)。

■**保護上の留意点**：産地での本種の個体数は少ないながらも安定している。先駆植物であるヤマナラシ群落の存在するコナラ・アカマツ林は照葉樹林化しつつあり、更新しづらい環境になっている。ここ数年、松枯れが進行しているため、一時的に更新がおこなわれる可能性があるものの、全体的にみると大径木が目立ち、群落は衰退しつつある。ヤマナラシ群落の維持に限ってはヤマナラシを選択的に残して、皆伐することが有効であるが、景観や他の動植物に配慮して対策を進める必要がある。

■**文献**：130.

執筆：大生唯統

### ジュウクホシテントウ 鞘翅目(コウチュウ目) テントウムシ科

*Anisosticta kobensis* Lewis, 1896

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



米子水鳥公園 2020.3.29 採集(左) / 撮影：金田直人(左)・星川和夫(右)

■**選定理由**：全国のヨシ原に広く分布するが、どこでもきわめて局地的。汽水隣接域で発見されることが多く、生息地が人間活動域と近接している。

■**特徴**：成虫体長約 4 mm 程度の中型テントウムシ。体は扁平で長く、一見ハムシのような体型。汽水等周辺のヨシ草原に生育し、とくに水際に多い。ヨシ葉身の基部～葉鞘部に潜む微小昆虫(モモコフキアブラムシ等)を捕食する。年に数回羽化し、成長は速い。他のテントウムシと比べ、成虫はよく飛ぶ。幼虫はヒメカメノコテントウ等と同じ体型だが、粘性が強い尾脚を用いて後退する行動がよく見られる。

■**分布** 県内：現在のところ米子市彦名から知られるのみ。ここでは 2016 年、2020 年にも確認されている(金田直人氏私信)。日本海側に点在する他の汽水湖周辺のヨシ原から発見される可能性は高い。県外：北海道，本州，四国，九州；朝鮮半島，中国大陸。

■**保護上の留意点**：さまざまな動物がヨシ原で生活するが、大規模なヨシ原は減少しており、生息環境の保全が重要。水質改善等の目的でヨシ原を造成する場合、数年後にヨシ原依存動物のモニタリングの実施が望ましい。

■**文献**：114, 232, 291.

執筆：星川和夫



**ルイヨウマダラテントウ** 鞘翅目(コウチュウ目) テントウムシ科  
*Henosepilachna yasutomii* Katakura, 1981

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
 環境省：—



ルイヨウボタン上の成虫。氷ノ山 2019.6.5 / 撮影：鶴崎展巨

- 選定理由**：種分化との関連で、諸種の視点から研究されてきた近縁種群であるオオニジュウヤホシテントウ群の一種。本種は北海道（東部・渡島半島）と本州東北～中部地方で知られていたが、2015年、氷ノ山で隔離分布の個体群が見つかった。この個体群は本種群の進化過程を理解するうえで学術的に貴重。本個体群は氷ノ山でも局所的で、さらに近年はニホンジカの食害により生息地周辺の林床植生荒廃が進み、存続が危ぶまれる。
- 特徴**：本種は形態的な変異に乏しく、エゾアザミテントウの一部・ヤマトアザミテントウの一部とは形態的な識別が困難だが、本種はアザミ類を食べない。基本的にルイヨウボタンを寄主植物とするが、多くの個体群は副次的寄主植物も利用しており、食性は変異に富む。氷ノ山の個体群は小林(2015)によりルイヨウボタン上で発見され、その後、食物選好性が調べられたが、本州の他個体群と異なりトチバニンジンもヤマブキソウも摂食せず、北海道渡島半島の個体群に類似した選好性を示した。
- 分布** 県内：氷ノ山。 県外：北海道、天竜川水系以東の本州。
- 保護上の留意点**：ニホンジカ食害から林床植生を保護することが重要。
- 文献**：55, 77, 108, 154. 執筆者：星川和夫

**シラユキヒメハナカミキリ** 鞘翅目(コウチュウ目) カミキリムシ科  
*Pidonia dealbata* Kuboki, 1981

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
 環境省：—



雌 / 撮影：山地 治

- 選定理由**：近畿北部から中国山地東部にかけて分布する種であり、産地は限られている。鳥取市高鉢山がタイプ産地で、大山が分布の西限にあたる。ヒメハナカミキリ類は多くの種を含むが、数種を除けば里山の二次林には生息せず、極相に近い森林が大面積かつ連続性をもって残っていることを指標とする。高鉢山では個体数が激減しており、県内他産地でも少ない。
- 特徴**：体長7-8 mm、中部地方に分布するムネアカヨコモンヒメハナカミキリの置換種と考えられていて、より斑紋の退行が見られる。梅雨期出現しブナ帯のツルアジサイ等日陰の花に集まる。近似種のカグヤヒメハナカミキリとは同所的に分布するが斑紋の退行、薄い体色により区別出来る。
- 分布** 県内：大山・鳥取市佐治町高鉢山・智頭町八河谷 県外：岡山県・兵庫県・京都府・滋賀県（日本固有種）。
- 保護上の留意点**：高鉢山では極相林の伐採終了後に個体数が激減した。極相に近い森林はすでに分断と孤立が進んでおり、これ以上の拡大は見込めないため、大面積で連続性をもって残す長期計画が必要である。
- 文献**：14, 113, 235. 執筆者：永幡嘉之・山地 治

**クロサワヘリグロハナカミキリ** 鞘翅目(コウチュウ目) カミキリムシ科  
*Eustrangalis anticereductus* Hayashi, 1958

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
 環境省：—



鳥取市佐治町高鉢山 1979.6.2 採集 / 撮影：山地 治

- 選定理由**：ハナカミキリ類の多くは里山の二次林には生息せず、極相に近い森林が大面積かつ連続性をもって残っていることを指標とする。高鉢山は本州唯一の日本海側の生息地で、成虫は6月に現れハクウンボクの花で確認されていたが、伐採終了後の1980年以降は確認されていない。
- 特徴**：体長約15 mm、オレンジ色の細長い体形を持つ。他のハナカミキリに比べかなり速く飛翔し、暗い林内の花に飛来する。食樹としてキハダが知られている。東京都や山梨県では個体数が増加しているが、ニセアカシアに食性を広げたためではないかと考えられている。
- 分布** 県内：鳥取市佐治町高鉢山。 県外：北海道・本州・四国・九州（日本固有種）。
- 保護上の留意点**：鳥取県においては他県のような食樹の転換や個体数の増加は認められていない。極相に近い森林はすでに分断と孤立が進んでおり、これ以上の拡大は見込めないため、今後は大面積で連続性をもって残す長期計画が必要である。
- 文献**：14, 235. 執筆者：永幡嘉之・山地 治

## アカネクスジトラカミキリ 鞘翅目(コウチュウ目) カミキリムシ科 *Cyrtoclytus monticallius* Komiya, 1980

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



エゾエノキ枯れ枝から羽化脱出した個体  
鳥取市佐治町高鉢山 1980.5 / 撮影：山地 治

■**選定理由**：鳥取市佐治町高鉢山がタイプ産地で、生息環境である自然林の減少や分断が進んでいるため。

■**特徴**：体長 13 mm。エゾエノキの生えている山地の広葉樹の自然林および自然度の高い二次林に生息しており、成虫は春に出現。兵庫県での分布状況からみて、県内では東部から西部まで、中国山地沿いの渓谷部には広く生息していると推定されるが、枯死して間もない枝にのみ産卵する習性をもつため、人工林化や開発によって林が分断されると好適な産卵場所が途絶え、局所絶滅が生じやすいと推測される。自然林の分断は進む一方で、今後大きく増加する可能性はないため、改変には配慮が必要。

■**分布** 県内：鳥取市佐治町高鉢山および江府町大山山系。県外：北海道、新潟県、福井県～広島県；朝鮮半島，中国。

■**保護上の留意点**：広葉樹の自然林を大面積かつ連続性のある状態で保全すること。

■**文献**：226, 358.

執筆：永幡嘉之・山地 治

## フサヒゲルリカミキリ 鞘翅目(コウチュウ目) カミキリムシ科 *Agapanthia japonica* Kano, 1933

鳥取県：絶滅 (EX)

環境省：絶滅危惧ⅠA類 (CR)



岡山県 2017.7.10 / 撮影：永幡嘉之

■**選定理由**：生息地が消失または改変され、絶滅したと判断される。

■**特徴**：藍色で触角には黒い毛束がある。6月中旬から8月に出現、成虫はユウスゲの葉や茎を、幼虫はユウスゲの茎や根を食べる。ユウスゲが数千株という規模で自生している半自然草原でなければ生息できないため、国内では岡山県蒜山にのみ生息地が残り、保全対策が進められている。

■**分布** 県内：大山山系。福永原に1990年代まで残っていたが、牧場の造成時に絶滅した。県内に残る他のユウスゲ群落は調査されたが生息していない。県外：本州（現在は岡山県蒜山のみ）。日本固有種。

■**保護上の留意点**：伯耆町福永原にはユウスゲが千株単位で自生するが、本種は絶滅している。土地所有者との合意形成のうえで、一定の植生管理が実施されれば、本種の再導入は可能である。最後に残る国内での生息地は、大山山系のものとかつては同一個体群であったと考えられるもので、国内からの絶滅を回避するためにも再導入の必要性は高い。

■**特記事項**：種の保存法指定種。

■**文献**：194, 216.

執筆：永幡嘉之

## ヒメビロウドカミキリ 鞘翅目(コウチュウ目) カミキリムシ科 *Acalolepta degener* (Bates, 1873)

鳥取県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



岡山県 2017.6.22 / 撮影：永幡嘉之

■**選定理由**：生息地が1カ所のみで、生息環境が著しく悪化しているため。

■**特徴**：小型のカミキリムシで、褐色の地色に不規則なビロウド状の斑紋をもつ。成虫は6-7月に出現し、オトコヨモギおよびヨモギの葉脈や茎を不定形に食べる。幼虫もオトコヨモギの茎を食べる。

■**分布** 県内：琴浦町船上山および江府町鏡ヶ成のみ。鏡ヶ成では調査されているが生息が確認できない。これまでのレッドデータブックで産地として挙げられてきた若桜町は標本が得られておらず、誤認の可能性があるため削除。県外：本州，九州，対馬，アジア北東部。

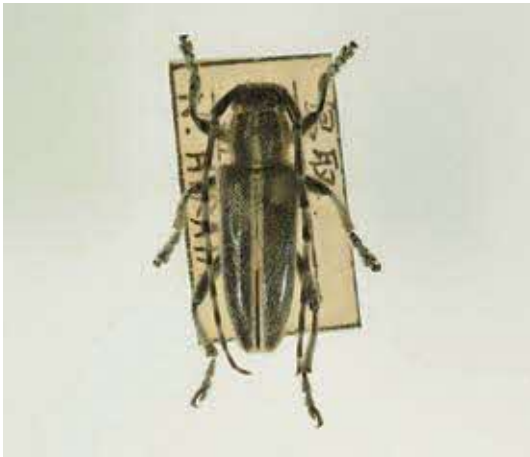
■**保護上の留意点**：船上山では、草原が遷移の進行によりササ原になっており、本種が生息しているのは車道および歩道沿いに限られる。火入れは3年周期で実施されているが、火入れのみではササや低木の優占する高茎草原になるため、本種を含めた動植物の多様性維持の上では重要地点を選定し、5月下旬～6月上旬に草刈りが行われることが望ましい。

■**文献**：193, 357.

執筆：永幡嘉之

**アサカミキリ** 鞘翅目(コウチュウ目) カミキリムシ科  
*Thyestilla gebleri* (Faldermann, 1835)

鳥取県：絶滅 (EX)  
環境省：絶滅危惧II類 (VU)



智頭町那岐 2021.11.9 / 撮影：山地 治

- 選定理由**：食草の栽培中止とともに生息が確認されなくなったため。
- 特徴**：中型のカミキリムシで、県内では栽培されていたアサで採集されていた。国内にはヨモギやノゲシに食性転換した個体群（在来の可能性もある）が乾性草原や道路沿いの草地に局地的に生息しており、兵庫県でも確認されていたため、再び分布を拡大する可能性が皆無ではなかったが、近年のシカによる植生の消失により、現在その可能性もほぼなくなった。
- 分布** 県内：大麻を栽培していた時代に若桜町・智頭町で記録された。県外：本州，四国，九州；朝鮮半島，サハリン，ロシア極東部。
- 保護上の留意点**：本種の県内における生息は、アサの栽培に伴った移入（史前帰化）であった可能性が高い。外来種であった場合には保全対象とする必要性について今後検討する必要があるが、ダイコクコガネ同様、情報が少ないためにその検証は今後進まないことが予想される。
- 文献**：195.

執筆者：永幡嘉之

**ヨツボシカミキリ** 鞘翅目(コウチュウ目) カミキリムシ科  
*Stenygrinum quadrinotatum* Bates, 1873

鳥取県：情報不足 (DD)  
環境省：絶滅危惧IB類 (EN)



八頭町西御門 2017.7.5 / 撮影：松井悠樹

- 選定理由**：過去には広く生息していたが近年の記録がきわめて少ないため。
- 特徴**：小型のカミキリムシで、赤褐色。上翅に4つの黄色の斑紋がある。成虫は灯火に飛来し、幼虫はクリやコナラなどの枯木を食べる。
- 分布** 県内：過去には広く分布していたが、近年は2017年以降に八頭町の4地点で灯火に飛来した個体が得られているのみ。県外：北海道，本州，四国，九州；台湾，朝鮮半島，インドシナ半島。
- 保護上の留意点**：国内では近年、本県東部や長野県南部など数カ所で生息が確認されているが、減少前の個体がある場所でのみ生き残っていたものか定かでなく、いちど見られなくなった後に再び発見されるようになった可能性がある。つまり、激減した要因に対して何らかの耐性を獲得した個体群である可能性があり、こうした場合には数年後に分布の再拡大がみられる例があること、そして現時点では保全にあたっての課題が明らかではないことから、絶滅危惧種として扱うよりも、情報不足種として個体群の動向についての知見を重ねるべきと判断した。
- 文献**：264.

執筆者：永幡嘉之

**スゲハムシ** 鞘翅目(コウチュウ目) ハムシ科  
*Plateumaris sericea* (Linnaeus, 1768)

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)  
環境省：—



南部町 2021.5.11 / 撮影：桐原佳介

- 選定理由**：生息環境の湿地は県内各地に点在しているが、植生の遷移・乾燥化や気候の温暖化で絶滅する危険性が高い。
- 特徴**：銅色や青色の金属光沢があり、体型は細長い。春から初夏にかけてスゲ類や湿性植物の花に成虫が集まる。幼虫はスゲ類の根や地下茎を摂食する。西日本の個体群は孤立した分布をしており、氷期の遺存的な個体群であると評価できる。
- 分布** 県内：鳥取市国府町，岩美町，南部町，日南町。近年、県西部でいくつかの生息地が確認されている。県外：北海道，本州，九州；アジアからヨーロッパ，アフリカ北部。
- 保護上の留意点**：寄主植物が生える環境であっても、幼虫が生息する地下の乾燥が進むと生息が困難になるため、地面の湿潤な状態を保つ必要がある。
- 文献**：217.

執筆者：林 成多

## クログネネクイハムシ 鞘翅目(コウチュウ目) ハムシ科

*Donacia flemola* Goecke, 1944

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：—



広島県 2006.6.10 / 撮影：林 成多

■**選定理由**：県西部の限られた湿地に生息しており、開発や遷移によって生息地が消滅する可能性がある。

■**特徴**：黒色の金属光沢があり、体型は細長い。春から初夏にかけて大型スゲ類の葉上に成虫が集まる。幼虫はスゲ類の根や地下茎を摂食する。シベリアなど大陸側にも広く分布するが、日本の個体群は孤立した分布をしている。

■**分布** 県内：県西部でいくつかの生息地が確認されている。県外：本州；朝鮮半島，中国東北部，シベリア。

■**保護上の留意点**：寄主植物が生える環境であっても、幼虫が生息する地下の乾燥が進むと生息が困難になるため、地面の湿潤な状態を保つ必要がある。本種が生息する湿地は他の希少種も多く生息していることが多く、積極的な保全を行う必要がある。

■**文献**：29, 31, 241.

執筆：林 成多

## ツヤネクイハムシ 鞘翅目(コウチュウ目) ハムシ科

*Donacia nitidior* (Nakane, 1963)

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：—



広島県 2001.6.16 / 撮影：林 成多

■**選定理由**：県西部の限られた湿地に生息しており、開発や遷移によって生息地が消滅する可能性がある。

■**特徴**：銅色の金属光沢があり、体型は細長い。春から初夏にかけてスゲ類の花や葉上にみられる。幼虫はスゲ類の根や地下茎を摂食する。中国地方の山陽側では開けた場所にある湿地に生息するが、山陰側では稀である。

■**分布** 県内：日野郡で生息が確認されている。県外：本州，佐渡。

■**保護上の留意点**：寄主植物が生える環境であっても、幼虫が生息する地下の乾燥が進むと生息が困難になるため、地面の湿潤な状態を保つ必要がある。本種が生息する湿地は他の希少種も多く生息していることが多く、積極的な保全を行う必要がある。

■**文献**：29, 33.

執筆：林 成多

## キンイロネクイハムシ 鞘翅目(コウチュウ目) ハムシ科

*Donacia japona* Chujo & Goecke, 1956)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



南部町 2012.5.1 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：生息地がミクリ属の生える池に生息場所が限られるため。

■**特徴**：金色の金属光沢があり、上翅には赤や青色の縦条斑紋がある。春から初夏にかけてミクリ属の葉の表皮を摂食するほか、スゲ類やショウブの花上にもみられる。幼虫はミクリ属の根や地下茎を摂食する。成虫の食痕は目立つため、生息を確認する上で目印となる。成虫は活発に飛翔し、分散もすることから、新規の生息地への移動は十分可能である。

■**分布** 県内：南部町，日南町。県外：北海道，本州，九州。

■**保護上の留意点**：寄主植物のミクリ属は、ため池の改修や外来種（アメリカザリガニやヌートリア）の被害などにより影響を受けやすいため、水位の安定したミクリ群落の保全が重要である。その一方で、ミクリ属の移植を行う場合、根に付着した本種の幼虫と一緒に運ぶ可能性もある。

■**文献**：32.

執筆：林 成多

**ゴヘイニクバエ** 双翅目(ハエ目) ニクバエ科  
*Sarcophila japonica* (Rohdendorf, 1962)

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)  
 環境省：絶滅危惧II類 (VU)



鳥取県浜田市 2014.8.28 / 撮影：林 成多

■**選定理由**：自然度の高い砂丘海岸に生息するニクバエで、生息地も限定されている。鳥取砂丘での近年の記録は途絶えているため、再確認が必要である。

■**特徴**：小型のニクバエで、体色は灰色。一般にニクバエ類の腹部は市松模様であるが、本種では三角形の黒色斑紋がある。翅に斑紋はない。海浜のコウボウムギなどが生える植生帯でみられ、魚の死体など動物質に誘因される。

■**分布** 県内：鳥取市（鳥取砂丘）。県内には鳥取砂丘以外にも比較的規模の大きな砂丘があることから、本種が確認される可能性がある。県外：北海道，本州，九州の日本海側；朝鮮半島，ロシア極東。

■**保護上の留意点**：自然度の高い砂丘海岸の保全が必要。

■**文献**：20, 283.

執筆者：林 成多

**ニホンアミカモドキ** 双翅目(ハエ目) アミカモドキ科  
*Deuterophlebia nipponica* Kitakami, 1938

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)  
 環境省：絶滅危惧II類 (VU)



鳥取市河原町佐貫 1995 / 撮影：阪田睦子

■**選定理由**：県内の2カ所で記録されていたが、近年の記録はなく、絶滅が危惧される。

■**特徴**：幼虫は、体長約4 mmまで成長し、体の側方に長い突起をもつきわめて特徴的な形態をしている。蛹はヒラタドロムシ類幼虫のような平坦な円盤状。成虫はアブラムシの有翅成虫のような大きな翅がある。幼虫や蛹は急流の岩に張りついている。清流かつ急流で、低水温であることが生息地の条件である。

■**分布** 県内：鳥取市河原町，三朝町。県外：本州，九州。

■**保護上の留意点**：生息状況の再確認が必要。生息地においては、流路の環境を可能な限り改変しないことが重要である。

■**文献**：238, 277, 373.

執筆者：林 成多

**イトウタムユラアブ** 双翅目(ハエ目) シギアブ科  
*Glutops itoi* (Nagatomi, 1995)

鳥取県：情報不足 (DD)  
 環境省：情報不足 (DD)



大山御机 2020.5.21 / 提供：国土交通省日野川河川事務所

■**選定理由**：全国的な希少種で、鳥取県では2020年に初めて確認された。

■**特徴**：小型種で胸部および腹部背面に斑紋があり、雌雄で異なる。生態に不明な点が多い。

■**分布** 県内：江府町。県外：千島，北海道，本州，四国，九州。

■**保護上の留意点**：森林環境の保全が重要とみられ、懸念材料としてはナラ枯れやシカの増加による食害などがあげられる。

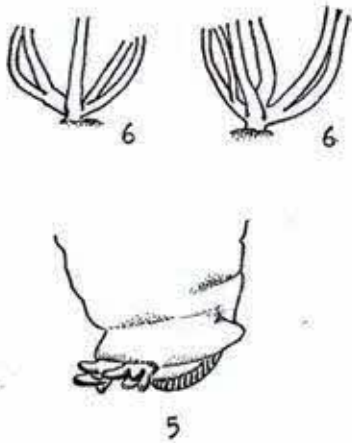
■**文献**：221.

執筆者：林 成多

### ツヤガシラブユ 双翅目(ハエ目) ブユ科 *Simulium yonagoense* Okamoto, 1958

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：—



蛹の呼吸器(上)および幼虫の腹部末端側面(下)：  
図の右が腹側。原記載の図を転載。

■**選定理由**：低地の流れの緩い水路に生息するブユで1950年代には多数生息する地点もあったが、県内で再確認されていない。生息地周辺の都市化、および灌漑設備の設置による顕著な水位変動の影響が考えられる。

■**特徴**：幼虫と蛹は水生。幼虫の背面は暗色斑紋が発達し、乳嘴突起は腹部末端の外側にある。繭はスリッパ形で、蛹の呼吸器官は5本だが、変異があり、4本や6本の個体がいる。成虫は人吸血性であるが、現状として人的被害はほとんどないと考えられる。

■**分布** 県内：鳥取市、米子市。タイプ産地である米子市夜見町産の標本に基づいて記載されたが、現在はまったく確認できない。周辺の河川においても再確認できなかった。県外：本州、九州。

■**保護上の留意点**：本種が生息する平野部の水路は、多くの低地性の水生生物にとって重要な生息環境である。

■**文献**：252, 304.

執筆：林 成多

### ダイセンヤマブユ 双翅目(ハエ目) ブユ科 *Simulium daisense* Okamoto, 1958

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：—



群馬県川場村 2016.10.14 / 撮影：林 成多

■**選定理由**：1950年代には全県的に生息が確認されていたが、現在では再確認ができない。河川環境の変化により激減したと考えられる。

■**特徴**：幼虫と蛹は水生。幼虫頭部のクレフトは細長い五角形で、先端は亜下唇基節に到達する。繭は靴形。蛹の呼吸器官は16本で、やや太く短い。成虫の人吸血性は知られていない。過去の記録から判断して、水量の多い河川の上流から下流域まで広く生息したと考えられる。阿弥陀川では1950年代に多数の生息が報告されている。

■**分布** 県内：タイプ産地は三朝。千代川水系、河内川水系、天神川水系、阿弥陀川水系、日野川水系。県外：北海道、本州、九州。

■**保護上の留意点**：現状の把握が必要である。ブユ類は河川のベントス調査で重要視されてこなかったが、幼虫と蛹(繭)の両方を採取することで格段に同定精度を上げることができる。

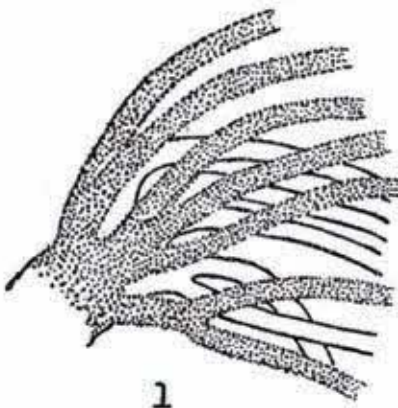
■**文献**：253, 254.

執筆：林 成多

### コバヤシツノマユブユ 双翅目(ハエ目) ブユ科 *Simulium kobayashii* Okamoto, Yoshida, Sato & Shogaki, 1958

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：—



蛹の呼吸器(基部付近)。原記載の図を転載。

■**選定理由**：大山の高標高の川で発見され、記載されたが、1960年代以降の記録はなく、県内の他の場所でも確認されていない。タイプ産地は現在、特別保護地区内となっているものの、砂防堰堤などが多数設置されている。河川環境が1950年代とは状況が大きく異なっているため、生息していない可能性が高い。

■**特徴**：幼虫形態は未確認。蛹の呼吸器は12本に分岐する。大山の標高900 m以上の場所において、秋に蛹が確認されている。

■**分布** 県内：大山(大神山神社裏の川：タイプ産地)。県外：北海道、本州。

■**保護上の留意点**：本種の生息確認に当たっては、秋季の蛹の確認が重要である。

■**文献**：252, 304.

執筆：林 成多

**アケボノクモバチ** 膜翅目(ハチ目)クモバチ科  
*Anoplius eous* Yasumatsu, 1936

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：情報不足 (DD)



埼玉県東松山市市野川 1992年以前／撮影：清水 晃

■**選定理由**：クモバチ科では中型種であるが鳥取県内では天神川の河川水辺国勢調査での過去記録(2000年)があるのみで、本県における生息状況の詳細は不明である。水辺環境に適応した種で、本種の生息は良好な水辺生態系が維持されている指標の一つになると考えられる。本種の特異的な生態から今後さらに減少していく可能性が高い。

■**特徴**：体長は15mm前後。体は黒色で翅は基部3分の1を除き暗色。河川・池・沼・水田などの水辺に生息し、ハシリグモ類やコモリグモ類を狩る。営巣場所は水辺近くの土中や朽ち木。

■**分布** 県内：天神川水系。県外：本州，四国，九州，対馬；ヨーロッパ(フランス)。

■**保護上の留意点**：①本種の餌となるクモや本種の営巣場所を含めた生息の場である水辺環境の開発や改変，②水田やその周辺での農薬散布，③放置状態の池や沼の放置による遷移，等の影響を受けやすい。それらに留意しながら、水辺生態系の多面・多面的な保全が重要と考えられる。

■**文献**：352.

執筆者：加藤 学

**アオスジクモバチ** 膜翅目(ハチ目)クモバチ科  
*Paracyphononyx alienus* (Smith, 1879)

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：情報不足 (DD)



岡山県津山市沼 2021.10.4／撮影：加藤 学

■**選定理由**：海岸砂地などに生息すると考えられる種で生息環境が減少していると思われるが、鳥取県内では、北栄町北条砂丘、倉吉市(小鴨川反土橋付近、国府川国府橋付近)で報告がある程度で分布状況が不明のため。

■**特徴**：体長は15mm前後。体は黒色で灰青色の微毛からなる明瞭な線紋があり、腹背節各節の帯紋は顕著である。イソコモリグモなどの徘徊性のクモを幼虫の餌とすることが知られているが生態で不明な点も多い。

■**分布** 県内：倉吉市，北栄町。県外：本州，四国，九州；朝鮮半島，台湾。

■**保護上の留意点**：本種の主要生息地とみられる海浜や砂地のある河原環境は減少傾向であり、これらの面積の維持が重要である。岡山県では近年砂地ではなく内陸部で複数箇所確認できているので(未発表。写真の撮影場所は、丘陵地で複数個体確認できた)、まずは県内の生息状況の実態の把握が望まれる。

■**文献**：352.

執筆者：加藤 学

**ヤマトアシナガバチ** 膜翅目(ハチ目)スズメバチ科  
*Polistes japonicus* Saussure, 1858

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：情報不足 (DD)



地上約3mの民家軒下に営巣した創設女王蜂  
 岡山県和気郡和木町日笠下 2021.6.19／撮影：水井颯麻

■**選定理由**：鳥取県では近年でも海に近い河川敷で複数記録されているが県内の分布状況や生息密度は不明で、過去と比較して減少しているか分からない。国内で最も減少の著しいアシナガバチで、関東地方の内陸部の県では絶滅寸前のため注意喚起の意味を含めて選定した。

■**特徴**：体長は20mm前後、体は黒色で褐色の斑紋が多いが、前伸腹節の2縦斑と腹部第1節の帯状紋は鮮黄色となる。沿岸よりの低地がおもな生息地。草木の茎や細枝、民家の軒下などに営巣する。巣の繭の色は、黄緑色～黄色をおびる。炭水化物源として花や甘露にも訪れる。

■**分布** 県内：倉吉市，鳥取市，米子市。県外：本州以南；朝鮮半島，台湾，中国，ベトナム。

■**保護上の留意点**：生息の期待できる沿岸地域、生息の可能性のある内陸部で詳しい生息実態調査が必要である。他県で本種が激減した理由はよく分かっていない。したがって本県のようにまだ生息している地域で基礎的な生態情報を蓄積し具体的な保護方法を模索し実行するのが望ましい。

■**文献**：7, 89, 352.

執筆者：加藤 学

### キオビホオナガスズメバチ本州亜種 膜翅目(ハチ目)スズメバチ科

*Dolichovespula media sugare* Ishikawa, 1969

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：情報不足 (DD)



林端部の樹木の小枝にかけた巣房 氷ノ山 2009.8.1 / 撮影：佐藤隆士

■**選定理由**：本州中部以北では普通種であるが、中国地方では山地の森林帯だけに生息する稀種。中国地方は本州での分布の南限にあたる。

■**特徴**：体長はクイーン 19–22 mm, ワーカー 13–16 mm, オス 19 mm 前後。巣は林端部で、枝葉に囲まれた樹木の枝に釣り下げられる。真社会性で、越冬クイーンによる単独営巣は5月中旬に始まり、誕生した娘バチはワーカーとしてコロニーの発達に参画する。成熟巣でも、育房数は250–1700個に過ぎない。生殖虫(新クイーンとオス)は8–9月に出現し、交尾する。新クイーンは受精後に朽木内に穴を掘って越冬する。なお、クイーンの体色と模様はワーカーのそれらと著しく異なる。ワーカーの腹部の斑紋は多様で、ある地方では五目蜂と呼ばれる。

■**分布** 県内：大山, 沖ノ山, 氷ノ山。 県外：本州。

■**保護上の留意点**：標高 500 m 以上の自然林の保全。

■**文献**：136, 137, 158, 159, 251.

執筆：前田泰生

### フジジガバチ 膜翅目(ハチ目)アナバチ科

*Ammophila clavus japonica* Kohl, 1906

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



岡山県真庭市蒜山上徳山 2006.7.26 / 撮影：加藤 学

■**選定理由**：国内の既存分布地は極限され、鳥取県では大山町の草原環境だけで記録されている。大型種で目立つ色彩のハチでありながら証拠標本はほとんど残されていない。かつて大山に多かったと聞いたことがある(故遠藤彰氏, 私信), 既存記録地での生息状況と県内の分布は不明である。

■**特徴**：雌の体長は 30 mm 前後, 腹部第 1, 2 節, 脚, 触角柄節の大部分が橙色となる。雄は体長 25 mm 前後, 淡い藍色金属光沢を帯びた黒色である。乾燥した広大な草丈の草原に生息し, 乾燥した裸地に巣を作りヤガ科のウスムラサキクチバの幼虫を狩ることが知られている。生態で不明な点も多い。

■**分布** 県内：大山町大山。 県外：本州, 四国, 九州; 朝鮮半島, 中国。

■**保護上の留意点**：現存する国内の産地は山地の高原の草地である。これらの生息地は国内希少野生動物植物のフサヒゲルリカミキリなど他の草原性絶滅危惧昆虫と一致する傾向がある。それらの昆虫とセットで草地環境を保全すると効果が期待できる。

■**文献**：78, 155.

執筆：加藤 学

### フクイアナバチ 膜翅目(ハチ目)アナバチ科

*Sphex inusitatus* Yasumatsu, 1935

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



ハネナシコロギスを巣穴に引きこむメス 鳥取市佐治町 2016.8.2 / 撮影：永幡嘉之

■**選定理由**：樹上性の直翅類であるハネナシコロギスを特異的に狩る習性から、広葉樹二次林の健全性を指標する種である。鳥取県内でも分布が局地的と考えられるが生息地や個体数の増減については調査が十分ではない。

■**特徴**：体長は 30 mm 前後, 体は黒色で頭部も黒い長毛で覆われ, 翅も全体が黒ずんでいる。水はけの良い土中に営巣し, 真砂土を好む傾向がある。ハネナシコロギスを狩る。

■**分布** 県内：鳥取市, 八頭町, 智頭町, 若桜町, 三朝町, 江府町。 県外：本州, 九州; 中国。

■**保護上の留意点**：狩りの対象種がハネナシコロギスのみに限定されるため, 対象種の生息地である樹林の分断・孤立の影響を受けやすいことが予想されること, 水はけのよい営巣地が数年単位で変わってゆくこと, 成虫には蜜源となる植物が必要であることから, 広葉樹の二次林を大面積かつ連続性がある状態で残すこと。

■**文献**：106, 311.

執筆：加藤 学・永幡嘉之



**ニッポンハナダカバチ** 膜翅目(ハチ目) ギングチバチ科  
*Bembix nipponica* F. Smith, 1873

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)  
 環境省：絶滅危惧II類 (VU)



営巣中の雌 鳥取砂丘 2017.6.27 / 撮影：鶴崎展巨

■**選定理由**：営巣地となる海浜や周辺の裸地は改変されやすく生息地が消失傾向である。鳥取砂丘には南側に大きなコロニーがあるが、今後砂丘西側の踏圧が増えると危険である。

■**特徴**：体長 18 mm 内外の大型の狩りバチ。周囲に風防となる樹林のある海浜砂地に集団営巣する。年 1 化で 6 月末から 8 月中旬に出現する成虫は地表に斜めに主坑（深さ 15–20 cm）を掘り、その末端や分岐した側坑末端に育房をつくる。ハナアブなどのハエ類を何度も狩り、幼虫がいる育房まで運ぶ（随時給餌という）。内陸でも寺社の墓地や境内、公園など類似の環境があれば営巣が見られる。

■**分布** 県内：海岸に近い神社や公園の裸地で見られるが安定的ではない。最近の生息確認地点数は鳥取市（5カ所）、倉吉市、湯梨浜町、米子市、日野町が各 1カ所程度である（福井未発表）。県外：北海道、本州、四国、九州、屋久島；朝鮮半島，中国，モンゴル。

■**保護上の留意点**：広さのある砂地裸地の適切な確保と管理。鳥取砂丘では重機（除草のためのものも含む）や歩行者による踏圧の増加に注意が必要。  
 ■**文献**：84, 326, 331, 332, 344。 執筆：鶴崎展巨・前田泰生

**キアシハナダカバチモドキ** 膜翅目(ハチ目) ギングチバチ科  
*Stizus pulcherrimus* (F. Smith, 1856)

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)  
 環境省：絶滅危惧II類 (VU)



日吉津村日吉津海岸 2008.7.24 / 撮影：干村隆司

■**選定理由**：全国的にきわめて局地的にしか分布せず、生息地も少なく減少している。県内では日吉津海岸に生息していたが、2008年以降まったく確認されていない。

■**特徴**：体長 25 mm 前後で、黒色の体に黄色の斑紋と赤褐色の脚をもつアナバチ類。海岸や河岸などの日当たりのよい砂の裸地を好んで営巣する。幼虫の餌としてバツタ類を狩る。活動期は夏季。

■**分布** 県内：記録地としては日吉津村日吉津海岸。県外：本州、四国、九州；朝鮮半島，中国大陸。

■**保護上の留意点**：詳しい生息実態調査、および海浜の保全が必要。

執筆：川上 靖・干村隆司

**ヤマトスナハキバチ** 膜翅目(ハチ目) ギングチバチ科  
*Bembecinus hungaricus* (F. Sm. 1876)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
 環境省：情報不足 (DD)



米子市大篠津町和田岬神社 2010.6.21 / 撮影：干村隆司

■**選定理由**：営巣地となる海浜や周辺の裸地は改変されやすく生息地が消失傾向である。鳥取砂丘では営巣地が未確認で踏圧が増加すると減少する可能性が高い。

■**特徴**：体長 10 mm 内外の狩りバチ。近くに樹林地のある海浜や河川敷の砂質裸地にハナダカバチに似た多房の長さ 10 cm ほどの巣孔を斜めに掘り、幼虫の餌としてハゴロモ、ヨコバイ、キジラミの類を狩る。集団営巣をする。鳥取砂丘では 7–9 月に高速で飛翔する個体が多く観察されているが、どこで営巣しているかは未確認である。

■**分布** 県内：鳥取市（岩戸海岸、鳥取砂丘）、米子市。県外：北海道、本州、四国、九州、琉球列島；中国，ユーラシア。

■**保護上の留意点**：広さのある砂地裸地の確保と管理。鳥取砂丘では重機（除草のためのものも含む）や歩行者による踏圧を避けるために、まずは営巣地がどこであるかを確認する必要がある。

■**文献**：12, 223, 326, 339, 344。

執筆：鶴崎展巨

## アカオビケラトリバチ 膜翅目(ハチ目) ギングチバチ科

*Larra ampliennis* (Smith, 1873)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



雌 鳥取砂丘 2017.6.27 / 撮影：鶴崎展巨

■**選定理由**：農薬使用と水田の圃場整備で本種の寄主であるケラが減少し、本種も減少していると考えられる。

■**特徴**：体長 15 mm 内外。頭部・胸部は黒色、腹部は前から 2/3 ほどが赤茶色、末端は黒。ケラの坑道に侵入しケラ成虫を麻酔して腋窩に産卵。幼虫はケラを食べて育つ。坑道はケラが掘ったものを利用するので労働寄生である。成虫は鳥取砂丘ではケラが生息するオアシス周辺で 6-7 月頃に見られる。別名アカオビトガリアナバチ。

■**分布** 県内：鳥取市鳥取砂丘、倉吉市。おそらくもっと広範囲に生息すると思われるが調査不十分。県外：本州、四国、九州、琉球列島；台湾、中国、フィリピン、タイ。

■**保護上の留意点**：ケラが生息できるような湿地・水田・河川岸辺の適切な確保と管理が重要。鳥取砂丘ではケラの坑道を踏圧でつぶさないよう、オアシス付近への観光客の過剰な立ち入りを制限するべきである。

■**文献**：69, 326, 344, 352, 360.

執筆：鶴崎展巨

## キスジツチスガリ 膜翅目(ハチ目) ギングチバチ科

*Cerceris arenaria* (Linnaeus, 1758)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



雌 鳥取砂丘 2017.6.6 採集 / 撮影：鶴崎展巨

■**選定理由**：鳥取県内の分布情報は少ないが、鳥取砂丘で営巣地となっている一里松広場と合せヶ谷スリバチ南西側広場は踏圧にさらされており要注意である。

■**特徴**：体長 13 mm 内外。体は黒色。腹部第 2-6 背板後縁は黄色が目立つ。周囲に風防となる樹林のある海浜砂地に営巣する。成虫は 6 月に出現。表面がやや硬い砂地地表に深さ 30 cm 以上の多房巣となる坑道を掘り、餌として狩ったゾウムシ類を入れる。鳥取砂丘ではスナムグリヒョウタンゾウムシが餌となる。

■**分布** 県内：鳥取市鳥取砂丘(一里松広場、合せヶ谷スリバチ広場)。県外：北海道、本州、四国、九州；朝鮮半島、中国、ユーラシア、北アフリカ。

■**保護上の留意点**：広さがあり樹林も伴う砂地裸地の適切な確保と管理。鳥取砂丘では営巣地が人通りの多い場所にあり、重機(除草のためのものも含む)や歩行者による踏圧の増加に注意が必要。

■**文献**：344, 360.

執筆：鶴崎展巨

## シロスジフトハナバチ 膜翅目(ハチ目) ミツバチ科

*Amegilla (Amegilla) quadrifasciata* (Villers, 1789)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



岡山県玉野市沼 2021.8.3 / 撮影：加藤 学

■**選定理由**：確認された生息地が限定されており、個体群サイズも小さいものと推定される。

■**特徴**：体長 14-16 mm。年 1 化性の地中営巣性種で砂地を好んで営巣する。成虫の活動期間は 7-9 月。頭部および胸部には明褐色の体毛が密生し、腹部の第 1-4 背板後端には明瞭な白色毛の帯がある。和名はこの帯に由来する。他県での記録などからおもな生息地は砂浜海岸と考えられるが、内陸部でも採集された事例がある。本県では砂丘内において局所的にみられる。海浜部では主として海浜性小低木のハマゴウで採集されている。

■**分布** 県内：鳥取砂丘およびその周辺。記録は局所的だが、県内各地の海浜に生息するものと考えられる。県外：本州、四国、九州；旧北区。

■**保護上の留意点**：海浜部の開発や浸食による砂浜の喪失が個体群の衰退を招くものと考えられる。

■**文献**：172.

執筆：宮永龍一

**ホクダイコハナバチ** 膜翅目(ハチ目) コハナバチ科  
*Lasioglossum (Evylaeus) duplex* (Dalla Torre, 1896)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
 環境省：—



鳥取砂丘 2017.6.27 / 撮影：鶴崎展巨

- 選定理由**：確認された生息地が限定されている。
- 特徴**：体長8-9 mm。体は黒色で腹部背板に鈍い光沢がある。年1化性の真社会性種で地中に営巣する。一般に西南日本における真社会性コハナバチ類の生活史は、越冬した母バチによる春の単独活動期、母バチと娘バチによる夏の母娘共生活動期、次世代成虫による晩夏の交尾期の3つの活動期を中心に推移する。本県の海浜部で調査された個体群では、7月上旬には既に交尾期が成立していることが確認されている。地域個体群によって生活史の推移が異なる事例として興味深い。
- 分布** 県内：鳥取砂丘および熊井浜。記録は局所的だが、県内各地に分布するものと考えられる。県外：北海道，本州，四国，九州；朝鮮半島。
- 保護上の留意点**：確認された生息地はいずれも海浜であることから、海浜環境の保全が重要と考えられる。鳥取砂丘のコロニーは遊歩道上にあり、踏圧の増加に注意する必要がある。
- 文献**：172, 286, 344.

執筆者：宮永龍一

**コウベキヌゲハキリバチ** 膜翅目(ハチ目) ハキリバチ科  
*Megachile (Eutricharaea) kobensis* Cockerell, 1918

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
 環境省：—



ハマゴウで採餌中 米子市弓ヶ浜 2012.8.10 / 撮影：宮永龍一

- 選定理由**：海浜とその周辺の開発，護岸工事，車両の乗り入れ，漂流物の堆積などによる海浜生態系の破壊が営巣地の喪失と花資源植物の減少をもたらし，本種の生息を危うくしている。日本固有種。
- 特徴**：体長はメスが10 mm内外，オスが9 mm内外の小型のハキリバチ。典型的な広食性であるが，営巣地である海浜砂丘とその周辺に生育するハマゴウ，コマツナギ，ハギ類などを花資源として利用する。ハマゴウの主要な送粉者で，鳥取砂丘においてはハマゴウの訪花ハナバチ類のなかでは最優占種である。部分的2化性で，活動期は6月中旬から9月中旬までの約3カ月間。砂地に緩やかに傾斜した単坑を掘り（深さ約2-6 cm），その先端に1-3個の育房を配置する。育房は葉片で作製される。
- 分布** 県内：境港市弓ヶ浜，東伯郡北条砂丘，鳥取砂丘。県外：本州，四国，九州。
- 保護上の留意点**：海浜とその周辺の生態系の保全。
- 文献**：1, 68, 135, 138, 173.

執筆者：前田泰生

**キバラハキリバチ** 膜翅目(ハチ目) ハキリバチ科  
*Megachile (Amegachile) xanthothrix* Yasumatsu & Hirashima, 1964

鳥取県：情報不足 (DD)  
 環境省：準絶滅危惧 (NT)



岡山県玉野市沼 2020.8.3 / 撮影：加藤 学

- 選定理由**：確認された生息地が限定されており，個体群サイズも小さいものと推定される。
- 特徴**：体長12-17 mm。体は黒色。胸部と腹部の背面は黄褐色の体毛で覆われている（とくに腹部で顕著）。年1化性の地中営巣性種で，成虫の活動期間は7-8月。砂地を好んで営巣するらしく，他県での記録などからおもな生息地は砂浜海岸と考えられる。ただし，内陸部でも河川敷の砂地で営巣が確認された例もある。近年，分布が北方へ拡大しているとされ，東北地方の海浜から採集の記録がある。海浜ではハマゴウやハギ類，内陸部ではクズでしばしば採集される。
- 分布** 県内：鳥取砂丘および日野川河川敷。記録は局所的だが，県内各地の海浜に分布するものと考えられる。県外：本州，四国，九州；中国，朝鮮半島。
- 保護上の留意点**：おもな生息地である海浜，とくに砂浜海岸の保全が重要となる。
- 文献**：109, 172.

執筆者：宮永龍一

## ホシトガリハナバチ 膜翅目(ハチ目) ハキリバチ科

*Coelioxys (Allocoelioxys) formosicola* Strand, 1913

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



鳥取砂丘 2021.10.28 採集/撮影：宮永龍一

■**選定理由**：確認された生息地が限定されており，個体群サイズも小さいものと推定される。

■**特徴**：体長8-10 mm。キヌゲハキリバチを寄主とする労働寄生蜂。寄主の巣に侵入し，育房に貯食された幼虫の餌（花粉団子）に産卵する。成虫の活動期間は7-9月。年1化性を基本とするが，部分的に2化性となる場合がある。中胸背に2対の斑紋があり，これによって同属他種と識別できる。寄主と同様，海浜性小低木のハマゴウでしばしば採集される。

■**分布** 県内：鳥取砂丘および弓ヶ浜海岸。記録は局所的だが，県内各地の海浜に分布するものと考えられる。県外：本州，四国，九州；台湾。

■**保護上の留意点**：寄主であるキヌゲハキリバチと同様，海浜環境の保全が重要と考えられる。

■**文献**：22, 46, 303.

執筆：宮永龍一

## マイマイツツハナバチ 膜翅目(ハチ目) ハキリバチ科

*Osmia (Helicosmia) orientalis* Benoist, 1929

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：情報不足 (DD)

ニッポンマイマイの空殻に営巣したマイマイツツハナバチの巣  
/撮影：前田泰生

■**選定理由**：生息地が局所的でかつ希少種である。県内では採集例がきわめて少ない。

■**特徴**：体長はメス10 mm内外，オス9 mm内外で，メタリックな体色をもつ美麗種である。年1化性の春のハナバチで，繭内で成虫態で休眠越冬する。出現期は4月中旬から7月初めで，きわめて長い。営巣基はクチベニマイマイやニッポン（ナミ）マイマイの空殻である。広食性種で，入口栓と育房壁は緑パルプで作製される。巣あたりの育房数は最大10個で，巣内の性配列の基本型は♂♀♂である。性比はややオスに傾斜している。営巣基となるマイマイの空殻を巻き散らすことで営巣を誘起させた報告例がある。典型的な里型昆虫で，生息可否はカタツムリ類の空殻の存在と関連している。

■**分布** 県内：八頭町（八東町）竹市，倉吉市天神川小田橋付近。県外：本州，四国，九州，韓国，極東ロシア。

■**保護上の留意点**：生息と営巣地を探索し，ここにカタツムリ類の空殻を放置することで誘致と増殖が可能である。

■**文献**：79, 133, 134, 292, 381.

執筆：前田泰生

## クチキトビケラ トビケラ目アシエダトビケラ科

*Ganonema uchidai* Iwata, 1930

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



倉吉市 2019.7.30 株式会社ウエスコ提供/撮影：佐貫方城

■**選定理由**：県内の生息地が限定されている。分布に関する情報が不足しているため，積極的な調査を実施することが望ましい。

■**特徴**：幼虫は流水域の上・中流において，落葉や小枝が溜まった淀みに生息し，ヨシ類の茎や樹木の小枝を利用した巣を作る。止水域にはヨシの茎を巣として利用するミサキツノトビケラがいるため，巣筒のみの同定は避ける必要がある。

■**分布** 県内：千代川水系，天神川水系。県外：本州，九州。

■**保護上の留意点**：河川環境の大規模かつ急激な変化は本種の生息環境を破壊する。とりわけ，流路の単純化と植生の破壊は生息微環境を消失させ，巣材の供給を妨げる原因となる。

■**文献**：110, 352.

執筆：林 成多

**ミサキツノビケラ** トビケラ目ヒゲナガトビケラ科  
*Triplectides misakianus* (Matsumura, 1931)

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：—



島根県出雲市 2016.10.25 / 撮影：林 成多

■**選定理由**：県内では 1939 年に東郷湖で記録されたのが唯一の報告で、その後の確認例がない。

■**特徴**：幼虫はため池や潟湖に生息し、ヨシ類の茎や樹木の小枝を利用した巣を作る。生態がクチキトビケラに似ているため、巣筒のみの同定は避ける必要がある。沿岸部の水質のよい湖沼を調査することにより、再発見できる可能性がある。幼虫は巣の内部に隠れて動かなくなるため、小枝ごと採集し、水に浸けておくと見つけやすくなる。

■**分布** 県内：東郷湖（現在は生息していない可能性が高い）。県外：本州、九州。

■**保護上の留意点**：本種の生息条件として水質がよいことと、巣材となるヨシ群落の存在が重要である。

■**文献**：35, 80, 330.

執筆者：林 成多

**キバネセセリ** 鱗翅目(チョウ目) セセリチョウ科  
*Bibasis aquilina chrysaeglia* (Butler, 1882)

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：—



対馬 2013.6.5 / 撮影：永幡嘉之

■**選定理由**：中国地方での分布域は局所的かつ不連続で、個体群サイズが小さいと推測されるため。

■**特徴**：大型のセセリチョウで自然林に生息する。幼虫の食樹はハリギリで、山地の極相林から低地の二次林まで広く生育し、県東部では海岸部にハリギリが高密度で生育する地域で本種の生息が確認されている。大山山系では 2014 年に複数地点で生息が確認され、幼虫も確認された。初夏から夏に発生、敏捷に飛び、成虫は花や獣糞に集まり、地面で吸水する。

■**分布** 県内：大山山系、智頭町沖ノ山、岩美町の海岸部。県外：北海道・本州・四国・九州（日本固有亜種）；ロシア沿海州、朝鮮半島、中国に別亜種。

■**保護上の留意点**：二次林を含めた落葉広葉樹林を大面積で保全すること。

■**文献**：60, 196, 244.

執筆者：永幡嘉之

**ギンイチモンジセセリ** 鱗翅目(チョウ目) セセリチョウ科  
*Leptalina unicolor* (Bremer & Grey, 1852)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



春型 鳥取県倉吉市西福守町 2021.4.22 / 撮影：松田裕一

■**選定理由**：県中・西部で確認されているが、生息地は限定的で個体数も少ない。東部では、近年 2 例の確認があるのみ。山地や河川の堤防・河川敷等のススキ原に生息するが、生息地の環境変化が起こりやすい。

■**特徴**：中型のセセリチョウで、腹部が細長い。ススキの原を弱弱しく飛びすぐに草に止まる。後翅裏面に銀色の一文字模様があるのでこの名がある。春型は、一文字模様がより鮮明である。山地に生息するものは、年 2 回発生（5 月、7・8 月）しているが、年 3 回発生していると思われる地域もある（4 月下旬～5 月上旬、7 月、8 月下旬～9 月上旬）。

■**分布** 県内：県中部や西部の河川の堤防や休耕田のあぜ道等のススキ原。県東部は山地のススキ原等。県外：北海道、本州、四国、九州；ロシア極東、中国大陸北部、朝鮮半島。

■**保護上の留意点**：生息地が狭く除草や改修工事等で減少する可能性が高い。生息域を把握し保護のための方策を考える必要がある。

■**文献**：146, 176, 333.

執筆者：松田裕一

### ホシチャバネセセリ 鱗翅目(チョウ目) セセリチョウ科 *Aeromachus inachus inachus* (Ménétrès, 1858)

鳥取県：絶滅危惧I類 (CR+EN)

環境省：絶滅危惧IB類 (EN)



兵庫県 2017.7.16 / 撮影：板野 隆

■**選定理由**：生息環境である山地草原が遷移の進行によって消失し、顕著に減少しているため。

■**特徴**：ごく小型のセセリチョウ。幼虫の食草はオオアブラススキなど。山地の乾性草原の辺縁に生息し、夏季に発生し花に集まる。県内では本種を対象にした調査は行われていないが、生息環境が激減しているうえに近年は確認例を欠いており、すでに絶滅している可能性がある。

■**分布** 県内：県内全域の山地草原から記録があるが、近年の確認例はない。県外：北海道・本州・九州；ロシア極東，朝鮮半島，中国に別亜種。

■**保護上の留意点**：人為的な草原の維持管理が不可欠。火入れは越冬幼虫に大きな影響を与えるが、昆虫類の保全のために火入れを回避した場所ではススキのみが優占して植生が単純化するため、長期的にみれば逆効果であり、重要な範囲が燃えないよう区分した上で火を入れることが必要。本種のみを対象にした対策には限界があり、草索性チョウ類の重点保護区を設けて草原を再生するなど、県単位での総合的な保全策が必要である。

■**文献**：199.

執筆：永幡嘉之

### スジグロチャバネセセリ 鱗翅目(チョウ目) セセリチョウ科 *Thymelicus leoninus leoninus* (Butler, 1878)

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



山形県 2010.7.21 / 撮影：永幡嘉之

■**選定理由**：生息地が局所的かつ不連続で、個体群サイズが小さいと推測されるため。

■**特徴**：小型のセセリチョウでヘリグロチャバネセセリに酷似。幼虫の食草はカモジグサ類。林縁の草地に生息し、夏季に花に集まる。2014年に伯耆町の低山地で確認されているが、大山など多くの同好者が訪れる過去の産地でも近年の確認例を欠くため、減少が著しく進んでいる可能性が高い。

■**分布** 県内：倉吉市関金町～日野町での記録がある。県東部では記録がないが、氷ノ山の兵庫県側には生息している。県外：北海道南部・本州・九州；ロシア極東部，朝鮮半島，中国に別亜種。

■**保護上の留意点**：本種のように草原の縁や疎林など、環境の境界部分を生息環境とする種の保全対策を1種のみを対象に進めるには限界があり、草索性チョウ類全般についていくつかの重点区域を設けて草原を再生するなど、県単位での長期的な保全計画を立てる必要がある。

■**文献**：198, 222.

執筆：永幡嘉之

### オオチャバネセセリ 鱗翅目(チョウ目) セセリチョウ科 *Polytremis pellucida pellucida* (Murray, 1875)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



南部町 2021.6.14 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：近年になって個体数の顕著な減少が進行しているため。

■**特徴**：イチモンジセセリに似るが、後翅の銀白斑が一行にならない。年2化で初夏と晩夏に出現。幼虫の食草はケネザサなどのササ類。農地と接した雑木林の林縁などの里山環境に普通に見られた種であったが、減少の要因は明らかになっていない。ヨーロッパでは農地周辺のチョウ類がネオニコチノイド系農薬の使用で減少していることが明らかにされているが(中村, 2021)、日本でも同様の影響が本種に限らず昆虫全般に対して起きている可能性がある。東部ではシカの食害に伴う植生の単純化による地域的な絶滅が懸念される。

■**分布** 県内：全域に分布。県外：北海道，本州，四国，九州；ロシア極東部・朝鮮半島・中国・台湾。

■**保護上の留意点**：農薬の影響に重点を置いたモニタリング調査を実施する際には、アキアカネやミツバチと並び、チョウでは本種が指標になり得る可能性がある。シカ害についてはウスバシロチョウの項を参照。

■**文献**：225.

執筆：永幡嘉之

**ミヤマチャバネセセリ** 鱗翅目(チョウ目) セセリチョウ科  
*Pelopidas jansonis* (Butler, 1878)

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)  
 環境省：—



山形県 2017.8.9 / 撮影：永幡嘉之

■**選定理由**：生息環境の消失により個体群の孤立と減少が進んでいるため。  
 ■**特徴**：イチモンジセセリに似るが、後翅の中央に明瞭な銀白斑がある。年2化で晩春と盛夏に出現。幼虫の食草はススキなどのイネ科植物。河川沿いや農地周辺、山地の草原に生息し、花に集まる。山地の草原は遷移の進行によって消失し、農地周辺や河川沿いの草原は改修や基盤整備によって消滅した。本種を対象にしたモニタリング調査はなされていない。東部ではシカの食害に伴う植生の単純化による地域的な絶滅が懸念される。

■**分布** 県内：全域に生息していたが、近年の記録は大山山系のみ。県外：本州・四国・九州；朝鮮半島～中国東北部。

■**保護上の留意点**：生息状況が比較的安定している山地の草原を重点的に保全することが効果的。しかし本種のみを対象にした対策には限界があり、草原性チョウ類の重点保護区を設けて草原を再生するなど、県単位での総合的な保全策が必要である。火入れについてはホシチャバネセセリの項、シカ害についてはウスバシロチョウの項を参照。

■**文献**：268。

執筆者：永幡嘉之

**コキマダラセセリ** 鱗翅目(チョウ目) セセリチョウ科  
*Ochlodes venatus venatus* (Bremer & Grey, 1853)

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)  
 環境省：—



長野県 2021.7.14 / 撮影：永幡嘉之

■**選定理由**：生息環境である山地草原が遷移の進行によって消失し、個体群の孤立と減少が進んでいるため。

■**特徴**：大型のセセリチョウで盛夏に出現。幼虫の食草はススキなど各種のイネ科とカヤツリグサ科の一部。山地の乾性草原に生息し、夏季に発生し花に集まる。かつては採草地に広く生息していたが、生息地の大部分は遷移の進行によって消失した。本種を対象にしたモニタリング調査はなされていない。三朝町田代のような風衝地の自然草原にも生息し、時に林道沿いにも進出する。東部ではシカの食害に伴う植生の単純化による地域的な絶滅が懸念される。

■**分布** 県内：岩美町～日南町の中国山地沿い。県外：北海道・本州；ユーラシア大陸北部全域。

■**保護上の留意点**：本種のみを対象にした対策には限界があり、草原性チョウ類の重点保護区を設けて草原を再生するなど、県単位での総合的な保全策が必要である。火入れについてはホシチャバネセセリの項を参照。

■**文献**：197。

執筆者：永幡嘉之

**ウスバシロチョウ** 鱗翅目(チョウ目) アゲハチョウ科  
*Parnassius citrinarius* Motschulsky, 1866

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
 環境省：—



南部町 2013.5.11 / 撮影：桐原真希

■**選定理由**：広域的なシカの食害に伴う植生の破壊によって地域的に激減しているため。

■**特徴**：年1化で卵越冬、成虫は晩春に出現。食草はムラサキケマン。全域の丘陵から山地の集落周辺に生息し、分布は拡大傾向にあったが、県東部ではシカの食害による植生の単純化によって激減し、2015年の時点で岩美町・八頭町では過去の生息地の過半数で確認できなくなっていた。今後は地域的な絶滅が中・西部にも拡大する可能性がある。

■**分布** 県内：全域の丘陵地～山地。県外：北海道、本州、四国；ロシア極東部、朝鮮半島、中国。

■**保護上の留意点**：兵庫～福井県ではシカの食害により、本種のみならずギフチョウなど多くの種が激減している。将来的に植生が回復した時に、シカ柵のなかに残存している個体群があれば再拡大の拠点になるため、拠点となるべき重点地域を絞り込み、現在は農地で行われている広域的なシカ柵による植生の保全を自然環境にまで拡大すべき。

■**文献**：112。

執筆者：永幡嘉之

## ギフチョウ 鱗翅目(チョウ目) アゲハチョウ科

*Luehdorfia japonica* Leech, 1889

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：絶滅危惧II類 (VU)



南部町 2017.4.12 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：起伏に富み適度に開けた良好な里山環境の指標であり、開発や雑木林の衰退で生息地・個体数とも減少傾向にある。

■**特徴**：前翅長 30 mm 内外。翅は黒色の地色に黄色の縦線を複数伴う。年1化(3月下旬～5月上旬)。早朝から日中にかけて樹影のある山頂部や尾根筋、伐採斜面などに集まる。食草はカンアオイ類(春は明るく、夏は薄暗くなるような季節的推移のはっきりした林床に多い)。ミヤコアオイを食草とする西部とサンインアオイを食草とする東部の2群および日南町にヒメカンアオイを食草としミトコンドリア ND5 遺伝子にも固有の特徴をもつ集団がある。

■**分布** 県内：各地(80カ所あまり、絶滅した産地も多い)。県外：本州(日本海側は秋田県以南、太平洋側は東京都以西)。日本固有種。

■**保護上の留意点**：カンアオイ類の生育する雑木林を保全すること。日南町の個体群は特異なものでありとくに厳重な保全が必要。

■**文献**：53, 104, 349.

執筆：淀江賢一郎

## ジャコウアゲハ 鱗翅目(チョウ目) アゲハチョウ科

*Atrophaneura alcinous* (Klug, 1836)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



南部町 2020.5.1 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：近年、生息地・個体数とも極端に減少傾向にある。

■**特徴**：前翅長 45–60 mm 前後。長い尾状突起をゆらし、食草ウマノスズクサの生えるやや荒れた開放的な草地(おもに河川敷)を低くゆるやかに飛ぶ。年に3回の発生(5月上旬、7–9月ごろ)。雌はウマノスズクサの葉裏や茎に1～数卵を産付。食草を食い尽してしまうことがしばしばあり、発生地が移動することが知られている。

■**分布** 県内：おもに大河川沿いに分布するが、生息密度は低い。県外：北海道を除く日本全土、隠岐、琉球列島。

■**保護上の留意点**：日野川では堤防の土手の斜面がコンクリートで固められたため大きく減少した。また大山山麓にはオオバウマノスズクサに依存する個体群もいたが農地開発によって近年見られなくなった。食草ウマノスズクサ、オオバウマノスズクサの生える草地の保全が重要である。

■**文献**：76, 166, 167.

執筆：淀江賢一郎

## ツマグロキチョウ 鱗翅目(チョウ目) シロチョウ科

*Eurema laeta betheseba* (Janson, 1878)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：絶滅危惧IB類 (EN)



米子市彦名新田 2021.9.23 / 撮影：田村昭夫

■**選定理由**：食草はカワラケツメイに限定される。カワラケツメイが生えている場所は、土地の改変や除草剤の影響を受けやすい。

■**特徴**：近緑のキタキチョウよりも小さい。幼虫はカワラケツメイのみを食し、食草(カワラケツメイ)の分布に影響をうける。成虫で越冬し、年に2回以上発生する。前翅黒帯は、夏型は細く後縁部に達し、秋型は後縁部に達しない。秋型は前翅前角が強く角ばる。吸蜜植物は多様。

■**分布** 県内：各地に生息するが食草の分布地に限定される。県外：福島県以南の本州、四国、九州；台湾、中国、インドシナ半島など。

■**保護上の留意点**：開発などの環境変化により食草や吸蜜植物が失われることがある。セイタカアワダチソウのように高い草が生えるとカワラケツメイは生えなくなる。荒廃地の草刈り時期(カワラケツメイの発芽前)を考慮することが必要ではないか。

■**文献**：83, 285, 312, 316, 324, 333.

執筆：田村昭夫



**スジボソヤマキチョウ** 鱗翅目(チョウ目) シロチョウ科  
*Gonepteryx aspasia nipponica* Bollow, 1930

鳥取県：絶滅危惧I類 (CR+EN)  
 環境省：—



兵庫県 2006.7.8 / 撮影：板野 隆

- 選定理由**：近年激減しており，地域的な絶滅が進んでいる可能性が高い。
- 特徴**：年1化で，県内では初夏に羽化するが夏眠し，秋に再び花に集まる。成虫越冬で春に産卵する。食草はコバノクロウメモドキ。丘陵から山地の明るい自然林および二次林に生息していたが，近年の確認例はほとんどない。本種を対象としたモニタリング調査はなされていないが，東部ではシカの食害による植生の単純化によって食草が消失し，すでに広域で絶滅している可能性がある。
- 分布** 県内：全域の丘陵地～山地。県外：本州，四国，九州（絶滅）；ロシア極東部，朝鮮半島，中国。
- 保護上の留意点**：食草は草原の辺縁や二次林，岩角地などに局所的に自生するため，落葉樹林を大面積かつ連続性をもたせた状態で維持してゆくことが必要。シカの食害への対応についてはウスバシロチョウの項を参照。
- 文献**：200。

執筆者：永幡嘉之

**ウラミアカシジミ** 鱗翅目(チョウ目) シジミチョウ科  
*Japonica saepestriata saepestriata* (Hewitson, [1865])

鳥取県：絶滅危惧I類 (CR+EN)  
 環境省：—



鳥取市滝山 2017.6.10 / 撮影：村上賀史

- 選定理由**：食樹のコナラ，クヌギ，アベマキなどを主体とする里山の雑木林の比較的若い林に多く生息し，里山の荒廃や放棄で少なくなった。生息地は開発されやすいところに多くあるため，消滅しやすい。
- 特徴**：年1化で6月上旬から7月にかけて羽化する。橙色の翅で裏面に縞模様を持つ大型のシジミチョウ。昼はクリなどに訪花していることがある。
- 分布** 県内：ほぼ全域であるが生息地は限られる。県外：北海道，本州，四国。ロシア沿海州，朝鮮半島，中国東北部。
- 保護上の留意点**：里山林の適度な管理（椎茸棺木づくりによる適度な伐採など？）。開発や植林による里山林の消滅は本種にとって痛手である。
- 文献**：272, 284, 313, 316, 333。

執筆者：田村昭夫

**オナガシジミ** 鱗翅目(チョウ目) シジミチョウ科  
*Araragi enthea enthea* (Janson, 1877)

鳥取県：その他の重要種 (OT)  
 環境省：—



八頭町姫路 2016.7.19 / 撮影：村上賀史

- 選定理由**：千代川上流付近で翅の紋様パターンが移行する。近年，溪谷部の道路建設等により減少傾向にある。
- 特徴**：前翅長約18mm。年1回7月中旬ごろから発生。夕方に食樹オニグルミの梢を飛び交う。卵は大木わきにある小木やひこばえの休眠芽付近に1-数個ずつ産みつけられる。山地溪谷のオニグルミ林に生息するが，鳥取市内を流れる千代川を境に，その東側の個体群は翅の色調が黒っぽく，西側の個体群では白っぽいことが知られている。
- 分布** 県内：八頭町(旧郡家町)姫路，鳥取市佐治町河本，大山町南光河原，江府町江尾・三平山，日南町多里など，標高300-500m前後の溪谷。県外：北海道，本州，四国，九州，隠岐；中国東北部，朝鮮半島，台湾，ロシア沿海州。
- 保護上の留意点**：溪谷ぞい道路建設により伐採されやすい。オニグルミを含む自然林の保全が必要である。翅の紋様の移行域はとくに保全が重要。
- 文献**：9, 375。

執筆者：淀江賢一郎

### ミドリシジミ 鱗翅目(チョウ目) シジミチョウ科 *Neozephyrus japonicus* (Murray, 1875)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



日南町神戸上 2021.7.2 / 撮影：田村昭夫

- 選定理由**：本来限られた生息地が開発等によって減少しているため。
- 特徴**：年1化，卵越冬で成虫は6月中旬に発生，8月まで生き残る。雄は夕刻活発に飛びまわる。県内での分布は広く，生息地は食草ハンノキの生育する丘陵の湿地・ため池周辺と，ヤマハンノキが生育する山地の林道沿いや高原に大別されるが，前者の減少が顕著である。
- 分布** 県内：全域の丘陵地～山地。 県外：北海道～九州；ロシア極東部，朝鮮半島，中国。
- 保護上の留意点**：県西部に点在するハンノキの生えた湿原は，複数種のレッドデータブック掲載昆虫の生息地でもあり，埋め立て等の直接破壊，周辺の開発による土砂流入や乾燥等の間接的影響を避ける他に，長期的な保全のためには動植物が移動できる数キロ内に複数の湿地が点在するネットワーク構造を維持することが重要。湿地は将来的に増加することはないため，重要地域を選定したうえで周辺の土地利用の長期計画を立てる必要がある。

■文献：179, 201.

執筆：永幡嘉之

### ヒサマツミドリシジミ 鱗翅目(チョウ目) シジミチョウ科 *Chrysozephyrus hisamatsusanus hisamatsusanus* (Nagami & Ishiga, 1935)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



雄 鳥取市河合谷高原 2018.6.25 / 撮影：村上賀史

- 選定理由**：生息地が限定され，個体数も減少傾向にある。
- 特徴**：前翅長は18 mm 前後。鳥取市久松山がタイプ産地で，和名「ヒサマツ」ミドリシジミは，久松山を意図的に読み替えたもの。雄の翅表は前後翅とも黒縁にふちどられて緑色に輝き，雌は茶褐色の地色で前翅中室に赤斑と青斑をもつ。食樹はウラジロガシ。霧が立ちこめるような照葉樹林の谷筋が発生地。年1化（6月中旬～7月上旬に発生，9月下旬～11月上旬に産卵）。
- 分布** 県内：久松山（鳥取市），佐治谷（旧佐治村），三徳山（三朝町），大山（旧溝口町）など。久松山では絶滅したと思われるが，きわめて少数が残存しているようである。 県外：本州，四国，九州。日本固有種。台湾に近似種イチモンジミドリシジミが生息している。
- 保護上の留意点**：自然度の高い照葉樹林帯やウラジロガシの混じる落葉広葉樹林帯をこれ以上伐採しないことが必要である。

■文献：249, 307, 310, 325, 377.

執筆：淀江賢一郎

### キリシマミドリシジミ 鱗翅目(チョウ目) シジミチョウ科 *Chrysozephyrus ataxus kirishimaensis* (Okajima, 1922)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



雄 鳥取市用瀬町 2016.7.20 / 撮影：村上賀史

- 選定理由**：県内の生息地は局地的であり滅びた産地もある。日本海側分布の東限。
- 特徴**：前翅長は20 mm 前後。雄の翅表は金緑色で外縁は細い黒線，裏面の銀白色が特徴的。雌の翅表は暗褐色で前翅基部に青藍斑があり地域による変異が知られている（三徳山のものは変異幅が大きい）。年1化で7-8月に発生し，雄は日中に斜面を敏速に飛翔するが雌は樹間に潜む。食樹はアカガシで休眠芽の基部に産卵。翌春に孵化して幼葉を綴り巣をつくる。
- 分布** 県内：鳥取市（安蔵），倉吉市（河来見）三朝町（三徳山），琴浦町（船上山），江府町俣野などで知られるが記録の途絶えたところが多い。東部ではスギ造林地に残存するアカガシで発生もしている。 県外：本州（神奈川県丹沢以西），四国，九州，対馬，隠岐。
- 保護上の留意点**：本種が生息するアカガシが混生する常緑広葉樹林は限られており，全面的な保護が必要。

■文献：8, 72, 156, 282, 308.

執筆：淀江賢一郎

**オオミドリシジミ** 鱗翅目(チョウ目) シジミチョウ科  
*Favonius orientalis* (Murray, 1875)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
 環境省：—



雄 鳥取市河合谷林道 2012.7.9 / 撮影：村上賀史

- 選定理由**：生息地、個体数ともに1980年代後半より減少傾向。
- 特徴**：翅長20 mm内外。年1化で成虫は6月上旬から7月上旬にかけてみられる。早朝に山頂部で占有行動をとる習性があり、そのときしか発見が難しい。平地～山地のコナラ、ナラガシワ林に生息する。卵はひこばえに産み付けられているので冬期の発見は比較的容易。
- 分布** 県内：南部町猪小路のような平地、久松山のような低山地、三平山(江府町)のような山地まで広く生息するが、発見されている生息地は少ない。県外：北海道、本州、四国、九州；サハリン、ロシア極東地域、中国東北部、朝鮮半島、モンゴル。
- 保護上の留意点**：ナラガシワなどが混じる雑木林(里山)の適切な管理が望まれる。
- 文献**：139, 281, 379.

執筆者：淀江賢一郎

**クロミドリシジミ** 鱗翅目(チョウ目) シジミチョウ科  
*Favonius yuasai* (Shirozu, 1947)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
 環境省：—



岡山県新見市久保井野 2007.6.17 / 撮影：坂田国嗣

- 選定理由**：食樹のクヌギの古木が伐採され生息地が狭まりつつある。
- 特徴**：前翅長20 mm前後。雄の翅表が緑色をしていない唯一のミドリシジミ類。食樹クヌギの古木が含まれる雑木林に生息。クヌギは全国的にもっとも広く分布する落葉広葉樹であるが、本種の分布は限定され、遺存種と思われる。終令幼虫の静止場所は樹間の表皮の裂け目であるが、多産地の信州地方では地表近いところ、中国地方では高所で見出され、生態が異なるのが興味深い。県内には、岡山県や兵庫県の山陽地方に見られる薪炭のための大規模な雑木林がないので、個体数も少なく発見も遅れた。
- 分布** 県内：三平山(江府町)。県外：本州、九州；朝鮮半島。
- 保護上の留意点**：県内では1968年に江府町で、2003年に三平山で発見された。もともと三平山は草山だったが、スギ・ヒノキ植林がすすみ、生息環境は著しく悪化した。クヌギの古木をこれ以上伐採しないなど里山の適切な管理が必要である。
- 文献**：169, 273, 379.

執筆者：淀江賢一郎

**ヒロオビミドリシジミ** 鱗翅目(チョウ目) シジミチョウ科  
*Favonius cognatus latifasciatus* Shirôzu & Hayashi, 1959

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
 環境省：—



雌 鳥取市宝殿 2016.6.15 / 撮影：村上賀史

- 選定理由**：県内の生息地は限定され、かつ減少が著しい。
- 特徴**：前翅長約21 mm。本州西部地域のみが生息する種で、ナラガシワの古木が見られる二次林のみが生息地になり、若い木だけでは発生が見られない。年1化で6月中頃が最盛期になり、雄は午前と午後2時間程度活発に飛翔するが、雌は不活発で葉上にいることが多い。
- 分布** 県内：鳥取市(福部町、国府町、河原町)、三朝町、米子市、日野町など。県外：本州西部(大阪府西部～山口県)。
- 保護上の留意点**：ナラガシワは里山の二次林として存在するが、開発などの影響で伐採され消滅する傾向にあり、多産した鵜の池も減少が著しい。残存しているナラガシワ林の保全をしていくことが重要である。
- 文献**：281, 309, 379.

執筆者：淀江賢一郎

## ウラジロミドリシジミ 鱗翅目(チョウ目) シジミチョウ科

*Favonius saphirinus* (Staudinger, 1887)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



倉吉市北谷 2011.7.3 / 撮影：川田理恵子

■**選定理由**：身ぢかな普通種であったが、低山地にあるナラガシワを食樹とするため、人為的な影響を受け近年急速に生息地と個体数が減少した。

■**特徴**：雄の翅表は青緑色の金属光沢を呈し、雌の翅表は黒褐色である。翅の裏面が白色の地にうすい斑紋が入っていることが種名になっている。食草のナラガシワの枝に産みつけられた卵は新芽の萌芽とともに孵化し、幼虫、蛹を経て成虫は6月中旬に羽化する。ひこばえの利用がよく見られる。

■**分布** 県内：県内全域の平地や丘陵地。 県外：北海道，本州，九州；朝鮮半島，中国，極東ロシア。

■**保護上の留意点**：個体群の維持が懸念されるほど個体数が減少している場所もあり、食草として必要なナラガシワ林を適切に更新伐採して維持することと、林縁がおもな生息域であるため、果樹園やマツ枯れ防除の薬剤散布で影響を与えない配慮が必要である。

■**文献**：116.

執筆：國本洗紀

## ミヤマカラスシジミ 鱗翅目(チョウ目) シジミチョウ科

*Strymonidia mera* (Janson, 1877)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



三徳山 2018.7.11 / 撮影：村上賀史

■**選定理由**：個体数の減少が著しく、個体群が縮小していると考えられる。

■**特徴**：年1化，卵越冬で成虫は7月に発生。山地の草原の周囲の疎林や林縁に生息し、日中に花に集まる。食草コバノクロウメモドキは林縁や明るい林の他に岩角地にも多いため、溪谷にも生息地があり、佐々木(2009)は幼虫が林縁に集中することを報告している。低木であるためシカの食害を受けやすく、今後深刻な影響が生じる可能性がある。

■**分布** 県内：県中・西部の山地の疎林や落葉樹林(大山山系など)あるいは溪谷林(三朝町など)。記録地は鳥取市，三朝町，伯耆町，日野町。 県外：北海道，本州，四国，九州(日本固有種)。

■**保護上の留意点**：落葉樹林を林縁や草原を含む形で大面積かつ連続的に保全すること。シカ害への対策についてはウスバシロチョウの項を参照。

■**文献**：202, 281.

執筆：永幡嘉之

## キマダラルリツバメ 鱗翅目(チョウ目) シジミチョウ科

*Spindasis takanonis* (Matsumura, 1906)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



2018.6.24 / 撮影：田村昭夫

■**選定理由**：生息地がきわめて局地的である。絶滅した産地も多い。

■**特徴**：前翅長は12-18 mm。裏面に黄色の地色に銀白色条を伴う複数の黒線が縦に走り、後翅には2本の尾状突起。年1化(6月中旬~7月上旬)。孵化した幼虫はハシプトシリアゲアリの巣に入り、アリからの給餌で成長する。

■**分布** 県内：岸部のクロマツ・ニセアカシア，低地のサクラ・アカマツ，山地のカシワ林に局所的に生息する。近年，米子市内，南部町(旧西伯町)，大山町(旧名和町)の人工的な桜公園から発見が相次いだ。 県外：本州各地。国外：中国，朝鮮半島。分布全体を俯瞰すると孤立的で地理変異も顕著であり遺存種のように思われるが，実際の生息地は人為的環境に進出しているのが興味深い。

■**保護上の留意点**：松くい虫防除の農薬空中散布の影響が大きい。また鳥取砂丘では景観保全のためにトゲのあるニセアカシアを伐採するため幼虫の生育するアリの巣が消失している。

■**特記事項**：鳥取市(東町，栗谷町，上町)の「キマダラルリツバメ生息地」は国の天然記念物(地域指定：1934年制定)。

■**文献**：328, 329, 363, 379, 380.

執筆：淀江賢一郎

**クロシジミ** 鱗翅目(チョウ目) シジミチョウ科  
*Nymphanda fusca* (Bremer & Grey, 1853)

鳥取県：絶滅危惧I類 (CR+EN)  
環境省：絶滅危惧IB類 (EN)



岡山県 2020.7.25 / 撮影：永幡嘉之

- 選定理由**：生息環境が失われて近年の確認例がなく、絶滅が懸念される。
- 特徴**：年1化で成虫は7月に発生、幼虫は初期にアブラムシなどの分泌液を食し、以後はクロオオアリの巣のなかでアリと共棲する。クロオオアリが高密度で生息する裸地を含んだ草原、疎林や明るい樹林などの遷移途中相に生息していたが、採草地や放牧地が遷移の進行に伴って樹林化し、あるいは人工環境である牧草地に置き換えられたことによって生息環境が消失した。県東部や日野郡では重点的な調査は行われていないものの、大山山系や三朝町では本種を対象とした調査でも確認されていない。
- 分布** 県内：岩美町から日野町までの山地草原の周囲の疎林に広く分布していたが、近年の確認例はない。県外：本州、四国、九州；ロシア極東部、朝鮮半島、中国。
- 保護上の留意点**：たとえ小規模な個体群が残存している場合でも、本種のみを対象にした対策には限界があり、草索性チョウ類の重点保護区を設けて草原を再生するなど、県単位での総合的な保全策が必要である。
- 文献**：203.

執筆：永幡嘉之

**シルビアシジミ** 鱗翅目(チョウ目) シジミチョウ科  
*Zizina emelina* (de l'Orza, 1869)

鳥取県：絶滅危惧I類 (CR+EN)  
環境省：絶滅危惧IB類 (EN)



倉吉市蔵内 2017.9.4 / 撮影：田村昭夫

- 選定理由**：生息地の孤立と分断による地域個体群の分断が著しい。
- 特徴**：普通種の子ヤマトシジミに酷似するが小型。年数回発生し、4月中旬から10月まで見られる。幼虫越冬。食草ミヤコグサの生育する河川堤防や海岸に生息していたが、改修による自然植生の消失によって地域的な絶滅が進んだ。
- 分布** 県内：全域の海岸から平野部に生息していたが、東部では絶滅し、現在では中部・西部の河川堤防に生息地が残る。県外：本州、四国、九州；東南アジア、オーストラリア、アフリカ。
- 保護上の留意点**：年数回の草刈りでの草原の維持が必要だが、その際に産卵直後の刈り取りを避ける必要がある。河川堤防の改修の際には例外なくシバの張り付けや草の種子吹き付け等による植生の人工化が行われるため、改修を段階的に実施し現在の植生を剥ぎ取って移植する等の対応が必要。生息地の位置情報を把握したうえで、河川管理者と事前に対応が協議されることが望ましい(天神川では倉吉河川国道事務所が実施して下さっている)。
- 文献**：205.

執筆：永幡嘉之

**ゴマシジミ中国・九州亜種** 鱗翅目(チョウ目) シジミチョウ科  
*Maculinea teleius daisensis* (Matsumura, 1926)

鳥取県：絶滅危惧I類 (CR+EN)  
環境省：絶滅危惧IB類 (EN)



岡山県真庭市上徳山 2016.7.30 / 撮影：田村昭夫

- 選定理由**：遷移の進行による生息地の消失によって絶滅寸前である。
- 特徴**：年1化。若齢幼虫はワレモコウの花穂を食し、以後はクシケアリ類の巣のなかで幼虫を捕食する。成虫は盛夏に出現、山地のススキ草原に生息し、花を訪れる。ワレモコウの蕾のみ産卵する。大山山系には安定した生息地があり、西部にも広く分布していたが、現在は大山山系でわずかな個体数が確認されるのみで、他の地域では絶滅した。
- 分布** 県内：三朝町以西、日南町までの中国山地の草原。現在は大山山系のみ。県外：種としては北海道、本州、九州；ユーラシア大陸北部。
- 保護上の留意点**：現状ですでに県内からの絶滅を回避することは困難な段階にあるが、県境付近の隣接県には生息地が残っており、生息環境を復元したうえでの再導入の可能性は残されている。シカの食害は産卵時期のワレモコウに大きな影響を与えるため、対策が必要である。本種のみを対象にした対策には限界があり、草索性チョウ類の重点保護区を設けて草原を再生するなど、県単位での総合的な保全策が必要である。
- 文献**：204.

執筆：永幡嘉之

## スギタニルリシジミ 鱗翅目(チョウ目) シジミチョウ科

*Celastrina sugitanii sugitanii* (Matsumura, 1919)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



三朝町小鹿 2018.4.19 / 撮影：田村昭夫

■**選定理由**：山地性のチョウで、豊かな森林環境が保たれていることが必要。現在分かっている食樹はトチノキのみ。

■**特徴**：年1回の発生。4月から5月にかけて出現する。近似種のルリシジミに比べれば小さく、裏面が暗く感じ、毛深い。本県ではトチノキがある地域で見られる。岡山県ではキハダから幼虫が見つかっていて、本県でもトチノキの非分布地でも見つかる可能性はある。成虫は訪花吸蜜もするが、地面での吸水行動もよく見られる。

■**分布** 県内：県内山間部。県外：北海道、本州、四国、九州；台湾、中国、朝鮮半島、ロシア、サハリン。

■**保護上の留意点**：生息地の保全。トチノキの保護が重要。

■**文献**：170, 171, 274, 285, 333.

執筆：田村昭夫

## ヒメシジミ本州・九州亜種 鱗翅目(チョウ目) シジミチョウ科

*Plebejus argus micrargus* (Butler, 1878)

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



交尾中の雌雄 榎水高原 2013.7.7 / 撮影：干村隆司

■**選定理由**：安定した生息環境である湿原の減少が進行している。

■**特徴**：小型のシジミチョウ。雄の翅表は青藍色、雌は褐色。年1化で成虫は6月中旬～8月上旬に出現、花で吸蜜。幼虫の食草は中国地方の湿原ではキク科のキセルアザミ、乾性草原や林道沿いではヨモギなど。生息地の多くは山地のミズゴケ湿地の周辺であるが、乾性草原や林道の道路法面への進出がみられる。

■**分布** 県内：鳥取市佐治町津野～日南町までの中国山地。大山周辺と日南町に生息地が多い。県外：本州、九州（絶滅）。種としては、北海道；ヨーロッパ～東アジア北部。

■**保護上の留意点**：湿原環境の保全（水位低下を防ぐことと、植生遷移の進行を防ぐこと）および、生息地である草原の連続性の維持。県単位での草原性チョウ類各種の総合的な保全計画を立てるうえで、本種はまだ生息地が県内各地に残っていることから、指標種になり得る。

■**文献**：207.

執筆：永幡嘉之

## ウスイロヒョウモンモドキ 鱗翅目(チョウ目) タテハチョウ科

*Melitaea protomedia protomedia* Ménétrès, 1857

鳥取県：野生絶滅 (EW)

環境省：絶滅危惧I A 類 (CR)



鳥取市佐治町 2015.7.3 / 撮影：永幡嘉之

■**選定理由**：すでに野外絶滅したが、再導入の可能性が残されている。

■**特徴**：ススキの優占する乾性草原に生息する。成虫は6月下旬から7月に発生。幼虫の食草はオミナエシとカノコソウで、根元近くの葉裏に産卵、幼虫は枯葉で巣を作り越冬する。

■**分布** 県内：1960年代までは岩美町から日南町まで連続的に分布していたが、1980年代後半から激減し、最後の生息地となった鳥取市佐治町でも2015年の確認を最後に絶滅した。県外：兵庫県～鳥根県（現存する生息地は1カ所のみ）；アジア大陸北部～朝鮮半島。

■**保護上の留意点**：県内最後の生息地では、火入れの中止による遷移の進行およびシカの食害による植生の単純化によって絶滅したが、かつての同一個体群の一部が県境の岡山県側に残存しており、再導入を前提にシカ防護柵の設置および草刈りによる植生の回復が継続されている。幼虫の越冬場所での火入れは避けるべきだが、草原全体の遷移を抑止し食草を増加させるために、草原を区分して火入れと草刈りとを併用することが望ましい。

■**特記事項**：種の保存法指定種、鳥取県特定希少野生動物植物。

■**文献**：206.

執筆：永幡嘉之

**ヒョウモンモドキ** 鱗翅目(チョウ目) タテハチョウ科  
*Melitaea scotosia* Butler, 1878

鳥取県：絶滅 (EX)  
 環境省：絶滅危惧ⅠA類 (CR)



広島県 2016.5.27 / 撮影：永幡嘉之

- 選定理由：長期間発見されず生息環境も失われたため絶滅と判断。
- 特徴：キセルアザミの生育する湿原，湿地に生息する。成虫は6月中旬～7月に出現。中国山地での食草はキセルアザミで，成虫は各種の花に集まる。越冬態は幼虫で，枯葉で巣を作り越冬する。
- 分布 県内：県内に広く分布していたが，すべて絶滅。過去の生息地は地形および環境から，溪谷沿いの採草地（八頭町滝谷，若桜町氷ノ山・諸鹿，鳥取市佐治町福園など）と，中国山地の湿地（三朝町福本，関金町犬狹峠，溝口町大山榎水原など）とに大別される。県外：本州（現在では広島県世羅台地のみ）；ロシア極東地方，中国東北部，朝鮮半島。
- 保護上の留意点：県内では絶滅しているが，食草のキセルアザミは残っており，中国地方の個体群も広島県に残存している。保全のための調査や技術開発も進んでいることから，本県の草原性のチョウ類の総合的な保全が計画され，草原環境が回復される際に，湿原の指標種として本種の再導入を検討する余地はある。
- 文献：209。

執筆：永幡嘉之

**ウラギンスジヒョウモン** 鱗翅目(チョウ目) タテハチョウ科  
*Argyronome laodice japonica* (Ménétrès, 1857)

鳥取県：絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)  
 環境省：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



山形県 2009.8.17 / 撮影：永幡嘉之

- 選定理由：個体数が激減し，近年の確実な記録がないため。
- 特徴：初夏に発生，盛夏には休眠し，9月に再び活動する。幼虫越冬。大山など中国山地にも生息していたが，分布の中心は平地から低山地で，農地周辺の草原に生息していた。食草（県内では未確認）が草原性のスミレやアリアケスミレであるため，生息環境は草丈が低く明るい草原に限られ，農地の基盤整備によって大半が失われたと推測される。本種を対象にした生息調査は行われていないが，近年の県内での確認例はなく，すでに絶滅に近い状態にあると考えられる。
- 分布 県内：かつては全域の丘陵地～山地に生息していたが，近年の状況は不明。県外：北海道，本州，四国，九州；ユーラシア大陸（別亜種）。
- 保護上の留意点：すでに半自然植生の残る草地は農地周辺にはほとんど存在しないことから，本種のみを保全の対象にしても，草原の復元や将来的な維持管理は困難である。草原性チョウ類の総合的な保全策を県単位で検討し，重点地域を選んで環境を復元することが必要である。
- 文献：208。

執筆：永幡嘉之

**メスグロヒョウモン** 鱗翅目(チョウ目) タテハチョウ科  
*Damora sagana liane* (Fruhstorfer, 1907)

鳥取県：絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)  
 環境省：—



山形県 2014.6.15 / 撮影：永幡嘉之

- 選定理由：個体数が激減し，近年の確実な記録が極端に少ない。
- 特徴：初夏に発生，盛夏には休眠し，9月に再び活動する際には成虫の分散がみられる。食草はタチツボスミレなど。成虫は花を訪れ，幼虫で越冬。1950年代までは鳥取市や米子市では最も多いヒョウモンチョウ類のひとつだったとされるが，近年の記録は倉吉市で散発的に見られるのみ。
- 分布 県内：かつては全域の丘陵地～山地に生息していた。県外：北海道，本州，四国，九州；ユーラシア大陸（別亜種）。
- 保護上の留意点：落葉樹林を大面積で保全すること。シカ害が顕著な兵庫県ではニョイスミレ以外のスミレ類が壊滅し，オオウラギンスジヒョウモン以外のヒョウモンチョウ類が激減した（近藤，2012）。本県でも同様のことが起こる可能性が高い。
- 特記事項：本種は広域で激滅したものの，ウラナミアカシジミやシータテハと同様に全国的には多い地域もあるため，今後分布を再拡大する可能性がある。シカ害への対策はウスバシロチョウの項を参照。
- 文献：111, 124, 210, 315。

執筆：永幡嘉之

## クモガタヒョウモン 鱗翅目(チョウ目) タテハチョウ科

*Nephargynnis anadyomene ella* (Bremer, 1864)

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：—



鳥取県西伯郡南部町鴨部で採集した個体(飼育)  
2007.5.25 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：県内全域に生息していたが、近年の減少が著しい。

■**特徴**：ヒョウモンチョウ類のなかで最も早く5月に発生する。低山地の林縁に生息し、5～6月に各種の花を訪れ、夏には休眠する。9月に再び現れて産卵する。越冬態は幼虫。幼虫の食草はタチツボスミレなど有茎種のスミレ類のいずれかであると考えられるが、県内では未確認。本種を対象にした生息調査は行われていないが、東部ではシカの食害による植生の単純化が進んでおり、地域的な絶滅に近いことが予想される。

■**分布** 県内：かつては低密度ながら全域の丘陵地～山地に生息していたが、近年は不明。県外：北海道，本州，四国，九州；ロシア極東部，朝鮮半島，中国。

■**保護上の留意点**：落葉樹林を大面積かつ連続性のある状態で保全すること。シカ害についてはウスバシロチョウの項を参照。

■**文献**：211。

執筆：永幡嘉之

## オオウラギンヒョウモン 鱗翅目(チョウ目) タテハチョウ科

*Fabriciana nerippe* (C. & R. Felder, 1862)

鳥取県：絶滅 (EX)

環境省：絶滅危惧IA類 (CR)



標本 智頭町 1937.6.23 香河三郎採集/撮影：川上 靖

■**選定理由**：1960年代までは大山などに生息していたが、その後急激に減少し、1968年以降の記録がない。県内では絶滅していると考えられる。

■**特徴**：前翅長は35-40mm前後。雌はとくに大きい。年1化(6月上旬～7月下旬)。食草はスミレ、ツボスミレ。衰亡の原因は、戦後の営農形態の変化によるシバーススキ草原の変貌や農薬の過使用と推定されている。中国山地で広く行われていた放牧による大規模な草原は、現在ではほとんどが失われており、本種の復活は期待できない。

■**分布** 県内：記録されている産地は、牛臥山(智頭町)、船上山(琴浦町)、江尾(江府町)、大山中の原(大山町)、大山榎水原(伯耆町)など。県外：山口県秋吉台、佐賀～長崎県境大野原、大分県日出生台、鹿児島～宮崎県境えびの高原など；朝鮮半島，中国，ロシア沿海州など。

■**保護上の留意点**：食草のスミレ、ツボスミレが生育する大規模な乾性草原の保全。

■**文献**：15, 376, 379。

執筆：淀江賢一郎

## ミスジチョウ 鱗翅目(チョウ目) タテハチョウ科

*Neptis philyra* Ménétrès, 1858

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



倉吉市岩倉 2019.5.22 / 撮影：長谷川寿一

■**選定理由**：県内に広く分布しているが、散発的で生息数も少ない。調査不足のため情報が少ない。

■**特徴**：中型のタテハチョウのなかまでである。年1回5月～7月に出現する。幼虫は、カエデ類を食樹とし幼虫で冬越しする。高地性のチョウであるが、鳥取市、倉吉市では低地でも確認されていることが多い。

■**分布** 県内：鳥取市、倉吉市、三朝町、伯耆町、大山町。県外：北海道，本州，九州，対馬；朝鮮半島，中国，台湾。

■**保護上の留意点**：県中部地区では近年以前より確認数が増えてはいるが、局所的で個体数は多くない。幼虫の食樹であるカエデ類が植栽されている低地の公園等における生息環境の保全が重要である。

■**文献**：27, 127, 128, 144, 145, 317。

執筆：松田裕一



**ホシミスジ** 鱗翅目(チョウ目) タテハチョウ科  
*Neptis pryeri pryeri* Butler, 1871

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
 環境省：—



鳥取市東町梅鯉庵 2017.8.30 / 撮影：村上賀史

■**選定理由**：日南町や八頭町で古い記録があるが近年発見されていない。近年岩美町の海岸線に近い人家周辺で発見された。県内では自然分布としては唯一の確実な発生地である。

■**特徴**：前翅長 30 mm 前後。山陽地方の産地では年 2-3 回の発生を繰り返すとされるが、県内ではおそらく年 1 化 (7 月)。食樹イワガサが生える崖地が発生地だが、山陽～関西地方などの市街地ではコデマリ、ユキヤナギのような栽培植物でも発生する。

■**分布** 県内：岩美町。八頭町 (旧八東町) 山志谷、日南町にも記録があるが再発見されていない。鳥取市内でも発見例がある (写真) が、ユキヤナギ園芸品が山陽地方から持ち込まれたさいに幼虫か蛹が付着していたものだろう。県外：本州、四国、九州 (離島では隠岐諸島など)。各地の個体群が亜種記載されている。

■**保護上の留意点**：岩美町産は特異な変異をもつ地域個体群にも思われるが、意外にも幼虫は人家近くのユキヤナギで発見されている。

■**文献**：16, 67, 180, 295, 379.

執筆者：淀江賢一郎

**シータテハ** 鱗翅目(チョウ目) タテハチョウ科  
*Polygonia c-aureum hamigera* (Butler, 1877)

鳥取県：絶滅 (EX)  
 環境省：—



福島県 2013.11.5 / 撮影：永幡嘉之

■**選定理由**：1985 年の智頭町の記録を最後に生息確認例がない。

■**特徴**：中型のタテハチョウで敏捷。成虫越冬で 6-8 月に夏型が、9 月以降と春に秋型が現れる。山地の渓谷林に生息し、花や樹液に集まり、オスは夕刻に占有行動をとる。他県での食草はハルニレなど。

■**分布** 県内：絶滅。過去の記録は国府町、若桜町、智頭町、鳥取市河原町、関金町、大山周辺 (豪円山、横手道、三ノ沢)、江府町など全域にみられる。春には鳥取市・米子市の低地でも採集されていた。県外：北海道、本州、四国、九州；旧北区全域 (国外は別亜種)。

■**保護上の留意点**：山地の落葉樹林、特に渓谷林を大面積で残すこと。かつて広く生息していた中国山地の全域からほぼ同時期に姿を消したことから、もともと分布変動の大きな種であるとすれば、再び分布を広げる可能性が皆無ではないが、森林の連続性が大きく失われ、かつ温暖化が進んでいる現在では、その可能性は低いと推測される。

■**文献**：212.

執筆者：永幡嘉之

**オオムラサキ** 鱗翅目(チョウ目) タテハチョウ科  
*Sasakia charonda charonda* (Howitson, 1863)

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)  
 環境省：準絶滅危惧 (NT)



雌 南部町鶴田 2011.8.1 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：県内全域に分布しているが、局所的である。個体数は少なく減少傾向にある。

■**特徴**：大型のタテハチョウで、国蝶に選定されている。幼虫の食樹はエノキ。成虫は、クヌギなどの樹液を好む。年 1 回 6 月中下旬～7 月に発生。

■**分布** 県内：県内全域に分布しているが、局所的である。岩美町、鳥取市、八頭町、三朝町、伯耆町、日野町、南部町、江府町。県外：北海道、本州、四国、九州；朝鮮半島、中国、台湾北部、ベトナム北部。

■**保護上の留意点**：幼虫の食樹であるエノキの伐採。近年増加傾向にある同じ食樹をえさとするテングチョウなどとの共存による食料不足等が減少原因の一つには考えられないだろうか。里山のエノキやクヌギなどの伐採による影響が大きく、その管理が重要である。以前の採集地がいずれもクヌギ等の樹高が高くなったり老木化による樹液の減少など、周辺地の管理が行き届かなくなったりして成虫の採集・目撃が難しくなっている。幼虫採集で本種の生存を確認されることが多い。

■**文献**：61, 250, 319.

執筆者：松田裕一

## ウラナミジャノメ 鱗翅目(チョウ目) タテハチョウ科 *Ypthima motschulskyi* (Bremer & Grey, 1852)

鳥取県：絶滅危惧I類 (CR+EN)

環境省：絶滅危惧II類 (VU)



兵庫県新温泉町諸寄城山公園 2005.7.16 /  
撮影：村上賀史

■**選定理由**：鳥取市だけに生息地が知られていたが、1950年代を最後に記録が途絶えていた。2009年に岩美町で再発見されたが、生息地は非常に局地的で危険な状態にあるとおもわれる。

■**特徴**：前翅長は25mm前後。翅表は暗褐色で、前翅端付近と後翅後角付近に1個の眼状紋がある。隣接する兵庫県浜坂では年1化(7月中旬)だが岩美町では年2化(6月と8月)であることが興味深い。幼虫はヤマカモジグサを食べる。近縁のヒメウラナミジャノメが、田畑のわき、河原、林縁など多様な草地環境の生息するのに対し、本種はどこでも局地的である。

■**分布** 県内：現在は岩美町西部の一カ所。過去には、鳥取市久松山山麓にも記録があった。県外：神奈川県以西の本州、四国、九州、対馬、壱岐、屋久島など。

■**保護上の留意点**：岩美町西部の生息確認地の環境の維持とともに、近辺にさらに生息地がないか、継続した調査が必要である。

■**文献**：102, 182, 306.

執筆者：淀江賢一郎

## ヒメヒカゲ本州西部亜種 鱗翅目(チョウ目) タテハチョウ科 *Coenonympha oedippus arothius* Okada & Torii, 1945

鳥取県：絶滅危惧I類 (CR+EN)

環境省：絶滅危惧IB類 (EN)



溝口町福永原 1994.7.13 /撮影：村上賀史

■**選定理由**：現存する確実な生息地がなく、すでに絶滅した可能性がある。

■**特徴**：小型種。中国地方では丘陵の湿地の湿性草原に生息することが多いが、県内ではおもに採草地として維持されてきた山地の乾性草原に生息する例が多く、とくに風衝地の草丈の低い草原に見られた。幼虫越冬で、成虫は夏季に発生し花を訪れる。幼虫の食草はスゲ類(カヤツリグサ科)だが、県内では未確認。

■**分布** 県内：中国山地に沿って、過去には智頭町から日野町にかけて広く生息していたが、現在生息の可能性が残るのは三朝町若杉山のみ。県外：本州(中部=別亜種、中国地方)；ユーラシア大陸東部(別亜種)。

■**保護上の留意点**：生息地は湿性草原・乾性草原ともに、いずれの場所でも遷移が進行して草原が消失しつつあるため、人為的な管理が必要。本種のみを対象にしても、将来的な維持管理は困難で、草索性チョウ類の総合的な保全策を県単位で検討することが必要である。

■**文献**：214.

執筆者：永幡嘉之

## キマダラモドキ 鱗翅目(チョウ目) タテハチョウ科 *Kirinia fentoni* (Butler, 1877)

鳥取県：絶滅危惧I類 (CR+EN)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



兵庫県 2020.6.13 /撮影：板野 隆

■**選定理由**：減少が著しく、現在確認できる生息地がない。

■**特徴**：中型種。成虫は7月中旬から出現、中国山地の草原の周辺のカシワの疎林や明るい雑木林に生息し、樹液や獣糞に集まる。成虫は夕刻に活発に活動する。食草はイネ科・カヤツリグサ科など。幼虫越冬。本種を対象にしたモニタリング調査は行われていないが、同好者に人気がある種であるため、近年の確認例がないことは、激減を示している可能性が高い。

■**分布** 県内：中国山地に沿って三朝町、大山山系および江府町、日野町など県の中～西部に生息していた。県外：本州(中部～中国地方)；ユーラシア大陸東部(別亜種)。

■**保護上の留意点**：いずれの場所でも疎林は遷移によって森林化が進んでいる。本種のみを対象にしても将来的な生息地の管理は困難で、草索性チョウ類の総合的な保全策を県単位で検討することが必要である。

■**文献**：213.

執筆者：永幡嘉之

**オオヒカゲ** 鱗翅目(チョウ目) タテハチョウ科  
*Ninhuta schrenckii* Ménétrès, 1858

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
 環境省：—



日南町神戸上 2021.6.25 / 撮影：田村昭夫

- 選定理由**：生息地が限定され、減少傾向にある。
- 特徴**：翅長約 40 mm。平地～低山地のカサスゲ、シロスゲなどが生える湿地周辺に生息する。直射日光を嫌い、ヤブに潜んでいることが多い。曇った日や夕方には林縁をひよこひよこ飛ぶのが見られる。雌は9月ごろまで生き残り、スゲ類に産卵。孵化した幼虫2～3令で越冬し、翌年6月ごろに羽化する。
- 分布** 県内：県中西部（米子市，南部町，旧溝口町，三朝町など）。県外：北海道から九州まで局地的に見られる。
- 保護上の留意点**：かつては、放置された谷筋奥の休耕田などが生息適地になっていたが、乾燥化，樹木の進入など遷移の進行で消滅したところもあり，今後の湿地環境の維持が必要である。
- 文献**：163, 165, 372.

執筆者：淀江賢一郎

**ギンヒゲナガ** 鱗翅目(チョウ目) ヒゲナガガ科  
*Nemophora askoldella* (Millière, 1879)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
 環境省：—



大山 2017.8.13 / 撮影：松井悠樹

- 選定理由**：西日本での分布が局限され、本県ではスキー場の草原に依存しているため存続基盤が脆弱。
- 特徴**：年1化で成虫は8月頃に出現。山地の乾性草原に生息し、雄成虫は夕刻にシシウド等の花上やススキ等の先端で配偶行動の一環である群飛を行う。寄主植物は不明であるが、ハギ類の花蕾への産卵行動が観察されており、他のヒゲナガガ科と同じく若齢期は植物組織を摂食し、中齢以降は地表で枯葉などを摂食するものと考えられる。
- 分布** 県内：大山。県外：北海道・本州。従来西日本からは知られていなかったが、近年になって鳥取県および島根県から発見された。国外では台湾，朝鮮半島南部，ロシア沿海地方。
- 保護上の留意点**：生息地である半自然草原の維持が必要。ハギ類の花蕾が失われると産卵場所と若齢幼虫の生息地が失われるため，草刈りを行う際はハギ類の花期を外す配慮が必要である。
- 文献**：153, 160, 356.

執筆者：松井悠樹

**ヤホシホソマダラ** 鱗翅目(チョウ目) マダラガ科  
*Balataea octomaculata* (Bremer, 1861)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
 環境省：準絶滅危惧 (NT)



大山 2020.9.2 / 撮影：松井悠樹

- 選定理由**：全国的に減少傾向であり、湿地や半自然草原をおもな生息地としているため、人為的な環境変化の影響を受けやすい。
- 特徴**：昼行性の蛾で、成虫はヒメジョオンなど各種の花から吸蜜する。年2化と考えられ、本県では成虫は6月と8～9月に得られている。寄主植物はササ・タケ類が知られている。
- 分布** 県内：鳥取市，大山，米子水鳥公園。県外：北海道，本州，四国，九州；朝鮮半島，中国。
- 保護上の留意点**：生息地となる湿地や草原環境の保全が必要。寄主植物であるタケ・ササ類が生える藪と，成虫の活動場所となる明るい草地の両者を維持する必要があると考えられる。
- 文献**：230.

執筆者：松井悠樹

## アシナガモモボトスカシバ 鱗翅目(チョウ目) スカシバガ科

*Macroscesia longipes* Moore, 1877

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：絶滅危惧II類 (VU)



合成性フェロモンルアーに誘引された雄成虫  
鳥取市湖山町南 2018.6.25 / 撮影：中 秀司

■**選定理由**：寄主植物に規定された局地的な分布を示す。生息地である湖山池は近年汽水化や宅地造成などにより環境変化が著しく、本種の存続が脅かされている。

■**特徴**：成虫は6月と9月の年2回発生し、日中に各種の花から吸蜜する。幼虫は湿地環境に生育するゴキヅルの茎や果実に穿孔する。

■**分布 県内**：現在知られている産地は鳥取市湖山池の周辺のみ。雄成虫は合成性フェロモンルアーに飛来することが知られているため、これを用いた調査を行うことにより新産地が発見される可能性がある。**県外**：本州、九州。国外では中国に別亜種が分布する。

■**保護上の留意点**：寄主植物の生育する湿地環境を維持することが必要。

執筆者：松井悠樹・中 秀司

## ヒメキシオオメイガ 鱗翅目(チョウ目) ツトガ科

*Patissa minima* Inoue, 1995

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：—



鳥取市伏野 2021.7.23 採集 / 撮影：松井悠樹

■**選定理由**：低湿地の蛾と思われ、全国的に分布がきわめて局地的。生息地である湖山池は近年汽水化や宅地造成などにより環境変化が著しく、本種の存続が脅かされていると考えられる。

■**特徴**：開張16 mm内外。キシオオメイガに似るが、本種は一回り小型で、翅頂の突出が弱く、前翅の横脈端の2黒点がより小さいことで区別できる。年1化と思われ、成虫は7-8月に出現する。寄主植物等の生態は不明。

■**分布 県内**：湖山池周辺の2カ所で得られている。**県外**：宮城県、富山県、静岡県、愛知県から記録がある。国外からは未知。

■**保護上の留意点**：情報がきわめて不足しているため、記録の蓄積と生態の解明が望まれる。

■**文献**：280。

執筆者：松井悠樹

## ミドロミズメイガ 鱗翅目(チョウ目) ツトガ科

*Neoschoenobia testacealis* Hampson, 1900

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：—



鳥取市若葉台北 2013.10.7 / 撮影：松井悠樹

■**選定理由**：低湿地の蛾であり、人為的な環境改変の影響を受けやすい。県下の記録は散発的で、継続的な採集例がない。

■**特徴**：開張13-20 mm内外で、雌のほうが大型。寄主植物はヒメコウホネ、ジュンサイ等の水生植物で、若齢時は葉に潜り、中齢以降は葉柄や花茎に穿孔する。

■**分布 県内**：鳥取市の3地点で得られている。**県外**：北海道、本州、四国、九州。国外では朝鮮半島、中国。

■**保護上の留意点**：生息地である水生植物の繁茂する湿地環境を維持すること。

■**文献**：383。

執筆者：松井悠樹

**ハマゴウノメイガ** 鱗翅目(チョウ目) ツトガ科  
*Aglaopus albipennis* (Inoue, 2000)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
 環境省：—



鳥取市伏野 2017.9.21(飼育羽化) / 撮影：松井悠樹

■**選定理由**：良好な砂質海岸の指標となる種。海浜環境の悪化により今後減少する可能性が高い。

■**特徴**：開張 15 mm 内外。翅はクリーム色を帯びた白色で、前翅前縁部が褐色を呈する。幼虫はハマゴウの花蕾を専食する。

■**分布** 県内：米子市，北栄町，鳥取市。県外：本州（中部地方以西），三宅島，四国，九州。国外からは未知。

■**保護上の留意点**：生息地となるハマゴウ群落を含む砂浜は、護岸工事や浸食により今後減少していくと考えられる。本種の生息にはハマゴウ群落の規模と連続性が重要である可能性が指摘されているため、現在の生息環境を広面積で維持することが重要である。

■**文献**：141, 150.

執筆者：松井悠樹

**アカミヤクノメイガ** 鱗翅目(チョウ目) ツトガ科  
*Ecpyrrhorhoe rubiginalis* (Hübner, 1796)

鳥取県：情報不足 (DD)  
 環境省：—



久松山 2018.3.31 採集 / 撮影：山岸瑞樹

■**選定理由**：西日本の分布がきわめて限られる。本県では久松山で得られた1個体しか記録がない。

■**特徴**：開張 15–20 mm 内外。ヒメトガリノメイガに似るが、本種は前後翅の垂外縁線の外側が広く暗色を呈すること、外横線の形状が異なることなどで区別できる。年2化と思われ、成虫は4–7月に出現するが、本県では3月という早い時期に得られている。寄主植物は北海道でチシマオドリコソウ、ヨーロッパでは種々のシソ科が知られるが、西日本では不明。

■**分布** 県内：久松山。中国山地の草原にも生息する可能性が高いが未発見。県外：北海道，本州。中部地方以北に分布するとされていたが、近年九州からも発見された。国外では、旧北区の広域に分布。

■**保護上の留意点**：情報がきわめて不足しているため、生息状況と生態の解明が望まれる。県下での生息地は公園管理がなされており、また寄主がシソ科の草本と考えられるため、人為的な草地環境の改変やシカ害の影響も懸念される。

■**文献**：355.

執筆者：松井悠樹・山岸瑞樹

**キンスジノメイガ** 鱗翅目(チョウ目) ツトガ科  
*Daulia afralis* Walker, 1859

鳥取県：情報不足 (DD)  
 環境省：—



大山 2020.8.28 採集 / 撮影：松井悠樹

■**選定理由**：本県ではスキー場の草原に依存しているため、存続基盤が脆弱。

■**特徴**：年2–3化と思われ、成虫は5–9月に出現するが、本県では8月に得られている。寄主植物はナンバンギセルが知られている。

■**分布** 県内：大山，氷ノ山のスキー場。県外：本州，四国，九州，南西諸島。国外では中国，韓国，東南アジア～南アジア。

■**保護上の留意点**：寄主植物であるナンバンギセルの生える草原を維持する必要がある。

執筆者：松井悠樹

## スキバホウジャク 鱗翅目(チョウ目) スズメガ科

*Hemaris radians* (Walker, 1856)

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：絶滅危惧II類 (VU)



大山 2017.8.30 / 撮影：松井悠樹

■**選定理由**：全国的に減少傾向。県下でも生息地が局限され、植栽のマツムシソウに依存して発生しているのが現状。

■**特徴**：クロスキバホウジャクに似るが、体色が大きく異なり、本種は背面が黄赤褐色を呈することで区別できる。過去の記録はクロスキバホウジャクの誤同定を含んでいる可能性がある。寄主植物はスイカズラ、オミナエシ、オトコエシが知られるが、本県では植栽のマツムシソウで幼虫が生育し、成虫が花上で吸蜜・交尾していることが確認されている。

■**分布** 県内：現時点で確実な生息地は大山(榎水原)のみ。県外：北海道、本州、四国、九州。南西諸島の記録は疑問視されている。国外では朝鮮半島、中国北部、シベリア、モンゴル。

■**保護上の留意点**：幼虫の食餌植物および成虫の吸蜜源となるマツムシソウの生育する草原を広面積で維持すること。県下での生息状況を見る限り、寄主植物の植栽は本種の個体群の維持に有効であると考えられる。

執筆者：松井悠樹

## メンガタスズメ 鱗翅目(チョウ目) スズメガ科

*Acherontia styx* Moore, 1858

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



八頭町 2008.8.8 小林佳崇採集/撮影：佐々木亮

■**選定理由**：近年全国的に減少しており本県においても同様であるため。

■**特徴**：クロメンガタスズメに似るが、前後翅の斑紋や胸部背面の模様の差異により容易に識別できる。幼虫はおもにナス科野菜を寄主とする。成虫はミツバチの巣から蜂蜜を摂食する。近年は全国的にクロメンガタスズメの記録が増える一方で本種はほとんど見られなくなってきている。減少要因は定かではないが、もともと本種のみがいた地域にクロメンガタスズメが侵入した際に繁殖干渉等の相互作用が生じた可能性が指摘されている。

■**分布** 県内：八頭町、倉吉市、伯耆町。県外：本州、四国、九州、沖縄島。国外ではアジアの広域に分布。

■**保護上の留意点**：現状把握として記録を蓄積することと、減少要因を明らかにすることが必要。

■**文献**：26, 59, 366.

執筆者：松井悠樹

## ギンボシスズメ 鱗翅目(チョウ目) スズメガ科

*Parum colligata* (Walker, 1856)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



沖縄本島 2017.4.1 / 撮影：松井悠樹

■**選定理由**：近年全国的に減少しており、本県においても同様と考えられるため。

■**特徴**：寄主植物はカジノキ、コウゾが知られ、それらが豊富に存在するにも関わらず、南西諸島以外の地域では減少が著しい種であるが、その要因は特定されていない。本県では南部町で1例の記録があるのみ。

■**分布** 県内：南部町。県外：北海道、本州、四国、九州、南西諸島。国外では朝鮮半島、中国から東南アジア。

■**保護上の留意点**：まずは減少要因が解明されることが望まれる。

■**文献**：366.

執筆者：松井悠樹

**オビグロスズメ** 鱗翅目(チョウ目) スズメガ科  
*Sphinx crassistriga* (Rothschild & Jordan, 1903)

鳥取県：情報不足 (DD)  
 環境省：—



鳥取市上町 2017.6.26 / 撮影：松井悠樹

- 選定理由**：本州西部における産地が局限される。寄主植物の生育する良好な森林環境が県下では限られ、個体数も少ない。
- 特徴**：前翅は中央部が強く黒色がかかり、3本の太い黒線をもつこと、翅頂から出る白線の外側が黒く縁取られることで他種と区別できる。寄主植物はモミが知られている。他県では標高の高い冷温帯におもに生息するが、本県では平地で得られていることが注目される。
- 分布** 県内：鳥取市。県外：北海道，本州（中国地方では鳥取県のみ），四国，九州。国外からは未知。
- 保護上の留意点**：寄主植物であるモミの生育する良好な森林を維持すること。
- 文献**：151.

執筆者：松井悠樹

**ウスジロドクガ** 鱗翅目(チョウ目) ドクガ科  
*Calliteara virginea* (Oberthür, 1879)

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)  
 環境省：準絶滅危惧 (NT)



雌 / 撮影：矢野重明

- 選定理由**：全国的な稀種。本県でも局地的で近年の記録がない。
- 特徴**：年1化で成虫は5-6月に出現する。寄主植物はハギ類が知られている。草原やその周辺の二次林をおもな生息地としていると思われる。
- 分布** 県内：大山町，日南町。前者は1970年以降，後者も2006年以降記録がない。県外：本州，四国に分布するが非常に局地的。国外では朝鮮半島，中国，シベリア。
- 保護上の留意点**：近年の記録がないため現状把握が必要。ライトトラップに加え，ハギ類上の幼虫調査も有効と思われる。
- 文献**：365, 367.

執筆者：松井悠樹

**フチグロトゲエダシャク** 鱗翅目(チョウ目) シャクガ科  
*Nyssiodes lefuarius* (Erschoff, 1872)

鳥取県：情報不足 (DD)  
 環境省：—



倉吉市宮川町小鴨川河川敷 2018.3.3 / 撮影：田村昭夫

- 選定理由**：県内では小鴨川河川敷の1カ所しか生息地は判明しておらず，生息地が限られている。
- 特徴**：早春の昼飛性の蛾。おもに2月下旬から3月下旬にかけて見られる。雄は晴天時に活発に飛翔し，雌を探索する。雌は無翅で草本の茎などに上りコーリングし交尾をする。幼虫は広食性で，地中で蛹化する。中国地方では山口県と鳥取県で分布が確認されている。鳥取県では1988年3月20日に倉吉市で採集されているが，詳細は不明。本県の現在の確実な生息地は倉吉市小鴨川河川敷のみ。雌はメルケンカルカヤなどの茎の隙間に産卵する。
- 分布** 県内：倉吉市小鴨川河川敷。河川敷だけでなく，山間部の開けたところにも生息する可能性はある。県外：北海道，本州，四国，九州（生息地は限定的）；ロシア南部，朝鮮半島，中国。
- 保護上の留意点**：土地利用の変更により生息地が消滅するおそれがある。
- 文献**：276, 314, 320, 350.

執筆者：田村昭夫

## マエモンシロスジアオシャク 鱗翅目(チョウ目) シャクガ科

*Geometra ussuriensis* (Sauber, 1915)

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：—



鳥取市若葉台北 2012.7.1 / 撮影：松井悠樹

■**選定理由**：良好な里山環境の蛾だと思われるが局地的で個体数も少ない。

■**特徴**：カギシロスジアオシャクに似るが、本種は前後翅の縁毛が各脈の末端部で赤褐色となること、前翅の横線の前縁部に赤褐色紋をもつことなどにより区別できる。年1化と思われ、県下では成虫は6-7月に得られている。寄主植物はコナラ、アベマキが知られるが、それらの存在に比して本種は局地的な分布を示すため、寄主植物以外の分布制限要因があるのではないかと考えられる。

■**分布** 県内：鳥取市若葉台北で2012-2014年にかけて確認されているが、以降の記録がない。県外：本州、四国、対馬。国外では朝鮮半島、ロシア南東部。

■**保護上の留意点**：里山環境の維持。本種が寄主のどのような成長段階を好むかは不明であるため、部分的に大径木を残しつつ雑木林を適度に更新していくことが重要と思われる。

■**文献**：147.

執筆者：松井悠樹

## ヒメナミガタアオシャク 鱗翅目(チョウ目) シャクガ科

*Jodis placida* Inoue, 1986

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：—



日南町 2021.6.19 採集 / 撮影：松井悠樹

■**選定理由**：全国的に分布がきわめて局限される。生息環境が不安定であり、孤立性が高いため存続基盤が脆弱。

■**特徴**：開張20mm内外。前後翅の色彩は淡いオリーブグリーンで、外横線が同属他種より外側を走ることによって近似種と区別できるが、交尾器を検するとより確実に同定できる。これまで東北地方からしか見出されていなかったが、日南町のハンノキ林に生息することが明らかになった。寄主植物は不明であるが、秋田県でもハンノキ林とその周辺で得られているという。県下では成虫は6月と8月に得られており、年2化と考えられる。

■**分布** 県内：日南町。本種の生息地と考えられるハンノキ林は県西部に点在しており、さらなる調査により新産地が発見される可能性がある。県外：青森県、岩手県、宮城県、秋田県。国外からは未知。

■**保護上の留意点**：県下における分布や生態を解明すること、および生息地を現状のまま維持することが必要。

■**文献**：347.

執筆者：松井悠樹

## ギンボシシャチホコ 鱗翅目(チョウ目) シャチホコガ科

*Rosama cinnamomea* Leech, 1888

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



氷ノ山 2021.5.26 / 撮影：松井悠樹

■**選定理由**：日野町の2008年の記録が唯一で以降の記録がなかったが、2021年に氷ノ山で複数個体が確認された。寄主植物がシカの食害を受けることにより、今後危機に瀕する可能性が高い。

■**特徴**：年2-3化と思われ、本県では成虫は5-8月に得られている。寄主であるヌスビトハギはシカの食害を受けやすく、実際に福岡県英彦山ではシカ害により本種が見られなくなった可能性が指摘されている。

■**分布** 県内：日野町、氷ノ山。県外：北海道、本州、四国、九州。国外では朝鮮半島、中国。

■**保護上の留意点**：寄主植物であるヌスビトハギが生える草原環境を維持することが必要。継続した調査を行い、減少が見られた場合は、速やかにシカ害を防ぐ対策を講じることが望ましい。

■**文献**：354, 364.

執筆者：松井悠樹



**シロホソバ** 鱗翅目(チョウ目) ヒトリガ科  
*Eilema degenerella* (Walker, 1863)

鳥取県：情報不足 (DD)  
環境省：準絶滅危惧 (NT)



鳥取市伏野 2021.9.10 採集／撮影：松井悠樹

- 選定理由**：全国的に減少傾向にある。平地の草原や湿地周辺に生息しているため、人為的な環境改変の影響を受けやすいと考えられる。
- 特徴**：全身が純白をしているため同定は容易。年2化で、成虫は5-8月に出現する。幼虫は地衣類を食べるとされている。他県ではおもに草地や湿地、海岸部において生息が確認されており、本県でも同様の環境で得られている。
- 分布** 県内：湖山池周辺と天神川、およびそれらと隣接する海岸部から見出されている。県外：北海道，本州，四国，九州。国外からは未知。
- 保護上の留意点**：現時点では生息地での個体数は少なくないが、継続した調査と生息地の現状維持が必要。

執筆者：松井悠樹

**ネズミホソバ** 鱗翅目(チョウ目) ヒトリガ科  
*Pelosia angusta* (Staudinger, 1887)

鳥取県：情報不足 (DD)  
環境省：—



鳥取市福井 2021.9.5 採集／撮影：松井悠樹

- 選定理由**：国内における分布が局限される。県下では人為的な攪乱を受けやすい平地の湿地周辺に主として生息し、個体数も少ない。
- 特徴**：クロスジホソバに似るが、より小型で、雄触角が微毛状であること、前翅の暗色帯が不明瞭であることなどにより区別できる。成虫は7-8月の年1化とされるが、本県では6月から9月まで得られており、年2回程度発生している可能性がある。幼虫の寄主は未知であるが、地衣類である可能性が高い。
- 分布** 県内：鳥取市（若葉台北と湖山池の周辺）、大山、米子水鳥公園、日南町。山陰地方では近年生息地が相次いで発見されており、さらなる調査により新産地が発見される可能性も高い。県外：北海道，本州（秋田県・新潟県・岐阜県・島根県など）、対馬。国外では極東ロシア。
- 保護上の留意点**：幼虫期等の調査が必要であるが、生息地を現状のまま保つこと、特に湿地環境を維持することが重要と考えられる。
- 文献**：142, 148, 230.

執筆者：松井悠樹

**コシロシタバ** 鱗翅目(チョウ目) ヤガ科  
*Catocala actaea* Felder & Regenhofer, 1874

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：準絶滅危惧 (NT)



鳥取市若葉台北 2012.9.20 /撮影：松井悠樹

- 選定理由**：生息地であるクヌギやアベマキが生える里山林の老齢化等により個体数を減じていると考えられる。鳥取市若葉台北では2015年まで定期的に確認できていたが、以降は確認されていない。
- 特徴**：年1化で成虫は7-9月に出現する。寄主植物はクヌギ、アベマキが知られ、樹齢20年以下のものをおもに利用するという。
- 分布** 県内：鳥取市、日南町。県外：北海道，本州，四国，九州。国外では朝鮮半島，中国，ロシア南東部。
- 保護上の留意点**：寄主植物のクヌギやアベマキを含む里山林の適度な更新。
- 文献**：148, 364, 370.

執筆者：松井悠樹

## シーモンキンウワバ 鱗翅目(チョウ目) ヤガ科

*Lamprotes mikadina* (Butler, 1878)

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：—



氷ノ山 2017.7.5 / 撮影：松井悠樹

■**選定理由**：西日本での分布が局限される。本県では1例の記録のみで生息状況が不明。草原性の蛾であり、寄主植物がシカの採食植物であるため、危機に瀕していると思われる。

■**特徴**：前翅中央部にC字型の金色紋をもつ。年2化で成虫は6月と8月頃に現れる。寄主植物はカラマツソウが知られる。

■**分布** 県内：氷ノ山。氷ノ山の兵庫県側からも古い記録があるのみ。県外：北海道，本州。国外では，朝鮮半島，極東ロシア。

■**保護上の留意点**：寄主植物の生育する草原を広面積で維持すること。シカ害の対策も必要。

■**文献**：28, 305.

執筆者：松井悠樹

## キマダラコヤガ 鱗翅目(チョウ目) ヤガ科

*Acontia trabealis* (Scopoli, 1763)

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：—



鳥取市伏野 2013.8.17 採集/撮影：松井悠樹

■**選定理由**：良好な草地環境に生息する種。本県の記録が1例のみで情報が不足しているが、生息適地は減少していると思われる。

■**特徴**：年1化で成虫は7-8月に出現する。寄主植物として海外ではセイヨウヒルガオやタデ属などが知られているが、日本では未知。

■**分布** 県内：鳥取市。県外：北海道，本州，四国，九州。ユーラシア大陸の広域分布種で，北アフリカにも分布。

■**保護上の留意点**：生息状況の把握と生息地の現状維持が必要。

■**文献**：149.

執筆者：松井悠樹

## ウスズミケンモン 鱗翅目(チョウ目) ヤガ科

*Acronicta carbonaria* (Graeser, 1889)

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



鳥取市若葉台北 2012.5.16 / 撮影：松井悠樹

■**選定理由**：里山環境の蛾と思われるが、局地的で個体数も少ない。

■**特徴**：後翅が白色を呈することで近似種と区別できる。年1化で成虫は春に出現する。寄主植物はクヌギが知られている。

■**分布** 県内：鳥取市，南部町。2012年以降記録がない。県外：本州，四国，九州。国外では朝鮮半島，ロシア南東部。

■**保護上の留意点**：県下の生息状況を把握すること，生息地であるクヌギの生育する里山環境を維持することが必要。

■**文献**：149, 371.

執筆者：松井悠樹

**クビグロケンモン** 鱗翅目(チョウ目) ヤガ科  
*Viminia digna* (Butler, 1881)

鳥取県：情報不足 (DD)  
環境省：準絶滅危惧 (NT)



米子水鳥公園 2016.9.3 採集/撮影：緋田祐太

- 選定理由**：湿地環境に生息する蛾で、県下では1例の記録があるのみ。
- 特徴**：前翅の斑紋は特異で、近似種はいない。年2化で成虫は4-5月と8月頃に出現する。寄主植物はカキツバタ、イタドリが知られている。
- 分布** 県内：米子水鳥公園。県外：北海道, 本州, 四国, 九州。国外では朝鮮半島, 中国, ロシア南東部。
- 保護上の留意点**：生息地である米子水鳥公園は今のところ環境悪化の懸念はないが、他に生息の可能性のある地域を調査するとともに、その環境の維持を図ることが必要。
- 文献**：230.

執筆者：松井悠樹

**ダイセンセダカモクメ** 鱗翅目(チョウ目) ヤガ科  
*Cucullia mandshuriae* Oberthür, 1884

鳥取県：絶滅 (EX)  
環境省：準絶滅危惧 (NT)



山口県秋吉台 2017.8.28 /撮影：松井悠樹

- 選定理由**：県下における唯一の生息地の大山では100年にわたって確認されておらず、絶滅した可能性が高い。
- 特徴**：年1化で成虫は8-9月に出現する。成虫はツリガネニンジンの花から吸蜜する。寄主植物はキク科のシオン属が知られる。和名は本種が日本で初めて採集された鳥取県大山にちなんでいる。
- 分布** 県内：大山。県外：本州・九州の草原に分布するが非常に局地的。国外では朝鮮半島, 中国, ロシア南東部。
- 保護上の留意点**：寄主植物と吸蜜植物の生育する草原を広面積で維持すること。
- 文献**：143, 157.

執筆者：松井悠樹

**マイコトラガ** 鱗翅目(チョウ目) ヤガ科  
*Maikona jezoensis* Matsumura, 1928

鳥取県：情報不足 (DD)  
環境省：—



鳥取市榑谿公園 2019.3.2 /撮影：大生唯統

- 選定理由**：県内における分布が局限され、個体数も少ない。
- 特徴**：年1化で成虫は早春に出現する。寄主植物はノブドウが知られる。本県では記録が少ないため、特定の環境や植生との結びつきは不明。
- 分布** 県内：鳥取市, 三朝町, 倉吉市。県外：北海道, 本州, 四国, 九州。日本固有種。
- 保護上の留意点**：県下における分布や発生状況を調査する必要がある。
- 文献**：260, 322.

執筆者：松井悠樹

### ミヤマハガタヨトウ 鱗翅目(チョウ目) ヤガ科 *Mniotype bathensis* (Lutza, 1901)

鳥取県：その他の重要種 (OT)

環境省：—



長野県 2019.8.26 / 撮影：松井悠樹

■**選定理由**：鳥取県は日本における分布の西南限にあたる。個体数は少なく、2007年以降得られていない。

■**特徴**：開張 45 mm 内外。前翅の腎状紋の外縁は白色の点列で縁取られ、後翅は内半が広く灰白色を呈する。年 1 化で成虫は 7-8 月に出現する。寄主植物はエゾリンドウが知られるが、種々の草本で飼育できるという。

■**分布** 県内：大山で 1998 年と 2007 年に各 1 個体が採集されているのみ。県外：北海道、本州（おもに中部地方以北）。ユーラシア大陸の広域分布種。

■**保護上の留意点**：生息地は現状では大きな環境変化はないと思われるが、生息状況と発生環境について調査することが望ましい。

■**文献**：368, 371.

執筆：松井悠樹

### クロビロードヨトウ 鱗翅目(チョウ目) ヤガ科 *Sidemia bremeri* (Erschoff, 1867)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



大山 2017.8.30 / 撮影：松井悠樹

■**選定理由**：山地の草原に局産する種で存続基盤が脆弱。鳥取県は日本における分布の西南限にあたる。

■**特徴**：年 1 化で成虫は 8-9 月に出現する。山地のススキ草原に生息し、成虫は専らツリガネニンジンの花から吸蜜する。寄主植物は不明。

■**分布** 県内：現在確認できているのは大山と氷ノ山のみ。とくに氷ノ山の個体群では、シカ害により吸蜜源となるツリガネニンジンが減少していると考えられるため、より絶滅の危険度が高い。県外：北海道、本州（おもに中部地方以北）。国外では朝鮮半島、中国、モンゴル、極東ロシア。

■**保護上の留意点**：吸蜜源となるツリガネニンジンの生える草原を広面積で維持すること。

■**文献**：323, 369, 371.

執筆：松井悠樹

### キュウシュウマエアカシロヨトウ 鱗翅目(チョウ目) ヤガ科 *Leucapamea kyushuensis* (Sugi, 1958)

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：—



八頭町妻鹿野 2016.5.30 / 撮影：松井悠樹

■**選定理由**：全国的な稀種で、本県では 1 例が知られるのみ。

■**特徴**：年 2 化と思われ、成虫は 7-10 月に出現する。寄主植物等の生態は一切不明である。本県では標高約 300 m の谷筋で得られているが、特定の環境や植生との結びつきは不明。

■**分布** 県内：八頭町。県外：本州、四国、九州に分布するが非常に局地的。国外からは未知。

■**保護上の留意点**：生活史を解明すること。現在記録のある生息地については環境改変を極力控えること。

■**文献**：152.

執筆：松井悠樹

**ホソバオビキリガ** 鱗翅目(チョウ目) ヤガ科  
*Dryobotodes angusta* Sugi, 1980

鳥取県：情報不足 (DD)  
環境省：—



鳥取市用瀬町鷹狩 2015.11.5 採集／撮影：松井悠樹

- 選定理由**：県内および山陰地方における分布が局限される。
- 特徴**：年1化で、成虫は11月頃に現れる。幼虫はウバメガシ、クヌギで飼育されており、ウバメガシ林やカシワ林との結びつきが指摘されている。本県での生息地はクヌギやナラガシワの生える里山環境であると思われる。
- 分布** 県内：鳥取市用瀬町の1例のみ。県内の低地二次林に広く生息する可能性があるが調査は不十分。本州における分布は瀬戸内海および太平洋沿いに集中しており、日本海側である本県の記録は分布上注目される。県外：北海道、本州、四国、九州。国外では朝鮮半島、中国。
- 保護上の留意点**：県下における分布や発生状況を調査したうえで、生息地と考えられる里山環境を維持することが必要。
- 文献**：149。

執筆者：松井悠樹

**カバイロキヨトウ** 鱗翅目(チョウ目) ヤガ科  
*Mythimna iodochra* (Sugi, 1982)

鳥取県：情報不足 (DD)  
環境省：—



八頭町 2016.7.11 採集／撮影：松井悠樹

- 選定理由**：湿地の蛾と思われ、分布が局地的で個体数も少ない。
- 特徴**：年2化で、成虫は5月と7-8月に出現する。季節的二型があり、1化目の個体は前翅が淡黄色なのに対し、2化目では強く赤褐色を帯びる。幼虫はネズミムギで飼育されている。
- 分布** 県内：日南町、八頭町。河川や湿地の周辺で得られている。県外：本州に分布するが局地的。国外では朝鮮半島。
- 保護上の留意点**：本種の生息地と思われる湿地環境を維持すること。
- 文献**：371。

執筆者：松井悠樹

**ナカスジキヨトウ** 鱗翅目(チョウ目) ヤガ科  
*Mythimna flammea* (Curtis, 1828)

鳥取県：情報不足 (DD)  
環境省：—



鳥取市古海 2016.4.10 / 撮影：松井悠樹

- 選定理由**：低湿地の蛾と思われ、個体数も少ない。
- 特徴**：年2化で、2化目の個体は1化目の個体と比べて小型で、前翅の黒条が明瞭となる。寄主植物は不明であるが、海外ではヨシの記録がある。
- 分布** 県内：鳥取市、米子市。県外：北海道、本州、四国、九州。旧北区の広域分布種。
- 保護上の留意点**：本種の生息地と思われる低地の湿地環境を維持すること。
- 文献**：230, 371。

執筆者：松井悠樹

## ■参考文献 昆虫類

1. Adhikari, R. D.・前田泰生・宮永龍一 (2012) 山陰地方における海浜性植物ハマゴウの訪花ハナバチ群集の比較. *New Entomologists*, 61: 25-31.
2. 秋田勝己 (2019) 三重県産クロコモンタマムシについて. 月刊むし, 575: 28-31.
3. 秋山黄洋・大桃定洋 (1997) 日本産タマムシ科チェックリスト. むし社 (東京), 67 pp.
4. 稲山尊礼 (2002) オオチャイロハナムグリ. p. 129. In: レッドデータブックとっとり (動物).
5. 秋山美史 (1980) 鳥取県産トンボについて. *昆虫と自然*, 15 (3): 12.
6. 青木 浩 (1979) ケカゲロウ. p. 34. In: 第2回自然環境保全基礎調査動物分布調査報告書 (昆虫類). 鳥取県, 60 pp.
7. 荒谷建設コンサルタント (2017) 平成28年度日野川砂防地域自然環境現地調査 (昆虫) 業務報告書.
8. 浅野 隆 (2015) キリシマミドリシジミに見られるB斑の緑化型について. 月刊むし, 532: 4-8.
9. 浅野 隆・小椋英勇 (2000) 中国山地のオナガシジミの変異. *蝶研フィールド*, 7 (15): 15-19.
10. 伴 光哲 (2012) 稀種ヒウラヒサゴナガカメムシ (新称) (カメムシ亜目: ナガカメムシ上科: ヒョウタンナガカメムシ科) の追加記録. *Rostria*, 54: 43-44.
11. 榎戸良裕 (2007) ハンミョウ類, その生態と分布. *昆虫と自然*, 42: 9-12.
12. Evans, H. E. & O'Neil, K. M. (2007) *The Sand Wasps. Natural History and Behavior*. Cornell University Press, Ithaca, 340 pp.
13. 江澤あゆみ・鶴崎展巨 (2015) 鳥取県における海浜性ウスバカゲロウ類の分布. *山陰自然史研究*, 11: 45-53.
14. 藤田 宏・平山洋人・秋田勝己 (2018) 日本産カミキリムシ大図鑑 (I). むし社 (東京), 324 pp.
15. 福田晴男 (1997) 南九州沢原高原におけるオオウラギンヒョウモンの生態と保護 (1) (2). *昆虫と自然*, 16: 4-17/ 17: 22-32.
16. 福田晴男・美ノ谷憲久 (2002) 西日本の日本海海岸線に分布するホシミスジ. *蝶研フィールド*, 17 (7): 17-22.
17. 福田侑記・小川 遼 (2018) 多鯨ヶ池 (鳥取県鳥取市) におけるハンミョウ類3種の再発見. *山陰自然史研究*, 15: 35-40.
18. Fukuda, Y., Yamasako, J., Ogawa, R. & Sakai, M. (2015) Review of the Japanese species of the genus *Cicindela* (*Sophiodela*) (Coleoptera, Carabidae, Cicindelinae) based on the characters of internal sac. *Elytra, New Series*, 5: 269-280.
19. of *Sophiodela* and other beetles (Coleoptera, Cicindelidae) based on the structure of the everted internal sac of the male genitalia. *Zootaxa*, 4661: 271-308.
20. 古田 治 (2005) 鳥取砂丘採集記 (ゴヘイニクバエを求めて). *はなあぶ*, 19: 43-46.
21. 二橋 亮 (2007) カワトンボ属の最新の分類学的知見. *昆虫と自然*, 42 (9): 4-7
22. 郷原匡史・前田泰生・日浅雅也 (1993) キヌゲハキリバチに関する若干の生態的知見. *中国昆虫*, 7: 29-37.
23. Habu, A. (1973) *Fauna Japonica. Carabidae: Harpalini* (Insecta: Coleoptera). 東京電気大学出版会, xii+430 pp.
24. 英 裕人・英 浩之 (1996) 鳥取県東部のトンボの記録. *Futao*, 22: 1-12.
25. 英 裕人・英 浩之 (1998) 鳥取県東部のトンボの記録II. *Futao*, 30: 5-13.
26. 長谷川寿一 (2004) メンガタズメを採集. *ゆらぎあ*, 22: 23.
27. 橋本秀明 (2018) 鳥取市青谷町山根でミスジチョウを採集. *ゆらぎあ*, 36: 27.
28. 橋本佳延, 藤木大介 (2014) 日本におけるニホンジカの採食植物・不嗜好性植物リスト. *人と自然*, 25: 133-160.
29. 林 成多 (2005) 山陰初記録のクロガネネクイハムシとツヤネクイハムシ. *すかしば*, 53: 36-37.
30. 林 成多 (2012) ヒメシマチビゲンゴロウ. p. 101. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
31. 林 成多 (2012) クロガネネクイハムシ. p. 108. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
32. 林 成多 (2012) キンイロネクイハムシ. p. 109. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
33. 林 成多 (2012) ツヤネクイハムシ. p. 109. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
34. 林 成多 (2013) 島根県と鳥取県西部のアリジゴク. *ホシザキグリーン財団研究報告*, 16: 189-205.
35. 林 成多 (2017) 島根県東部におけるミサキツノトビケラの生息状況. *ホシザキグリーン財団研究報告*, 20: 95-98.
36. 林 成多 (2020) 改訂島根県の水生甲虫 (2). *ホシザキグリーン財団研究報告特別号*, 28: 1-76.
37. 林 成多・門脇久志 (2007) 鳥取県大山山麓の河川に生息する水生甲虫類. *ホシザキグリーン財団研究報告*, 10: 149-168.
38. 林 成多・門脇久志 (2010) 鳥取県大山山麓の河川に生息する水生甲虫類Ⅲ. *ホシザキグリーン財団研究報告*, 13: 155-187.
39. 林 成多・門脇久志 (2011) 日野川流域における水生甲虫類の分布. *ホシザキグリーン財団研究報告*, 14: 97-132.
40. 林 成多・宮武頼夫 (2012) 山陰地方のキジラミ図鑑. *ホシザキグリーン財団研究報告特別号*, 6: 1-97.
41. Hayashi, M. & Ohba, S. (2018) Mouth morphology of the diving beetle *Hyphydrus japonicus* (Dytiscidae: Hydrophorinae) is specialized for predation on seed shrimps. *Biological Journal of the Linnean Society*, 125: 315-320.
42. 林 成多・川上 靖・門脇久志 (2010) 鳥取県大山における直翅目の採集記録. *ホシザキグリーン財団研究報告*, 13: 111-118.
43. 林 成多・宮武頼夫・門脇久志 (2011) 鳥取県大山とその周辺地域のキジラミ相. *ホシザキグリーン財団研究報告*, 14: 269-293.
44. 林 成多・門脇久志・松田隆嗣・藤原 淳一 (2012) 鳥取県大山における昆虫類の生息状況. *ホシザキグリーン財団研究報告特別号*, 7: 49-98.
45. Hayashi, M., Yoshitomi, H., Kamite, Y., Kobayashi, T. & Sota, T. (2019) Description of adults and larvae of *Orientelmis parvula* (Nomura & Baba, 1961) (Coleoptera: Elmidae) with their molecular phylogenetic analysis. *Zootaxa*, 4568: 483-500.
46. 日浅雅也・郷原匡史・前田泰生 (1993) 鳥取県弓ヶ浜

- における夏のハナバチ相. 中国昆虫, 7: 47–49.
47. Hidaka, T. (1961) Studies on the Lygaeidae XXIV. Revision of the genera *Mizaldus* and *Ampera* from Japan. *Kontyû*, 29: 91–93.
  48. 日暮卓志 (1993) 因幡のトンボ. *すかしば*, 39/40: 9–17.
  49. 日暮卓志・祖田 周 (1995) 鳥取県のトンボ相 (I). *すかしば*, 41/42: 39–52.
  50. 日暮卓志・祖田 周 (1998) 鳥取県のトンボ相 (II). *すかしば*, 46: 57–63.
  51. 干村隆司 (2021) 日野町滝山公園湿地で出会った昆虫たち. *すかしば*, 68: 12–13.
  52. 平化勉逸 (1983) 鳥取県岩美郡のトンボ. *Gracile*, 29: 28.
  53. 広渡一成・渡辺一雄 (2000) 西日本産ギフチョウのミトコンドリア ND5 遺伝子に認められたスニップス (一塩基多型: SNPs) とその意味. ホシザキグリーン財団研究報告, 4: 215–224.
  54. 堀 道雄・佐藤 綾 (2019) ハンミョウ類の生息場所と種間関係. pp. 178–204. In: 堀 道雄 (編) 環境 Eco 選書 14. 日本のハンミョウ. 北隆館 (東京), 326 pp.
  55. Hoshikawa, K. (1983) Host–race formation and speciation in the *Henosepilachna viginti–octomaculata* complex (Coleoptera, Coccinellidae). I. Host–plant ranges and food preference types. *Kontyû*, Tokyo, 51: 254–264.
  56. 細木正男 (1955) 鳥取県日野郡生物誌. 日野郡科学教育研究会.
  57. 細木正男 (1993) オオヒョウタンゴミムシ. pp. 140–141. In: 鳥取県のすぐれた自然 (動物).
  58. 細木正男 (1993) オオチャイロハナムグリ. pp. 148–149. In: 鳥取県のすぐれた自然 (動物).
  59. 池田 大・阪上洗多 (2020) 兵庫県のスズメガ. *きべりはむし*, 43(2): 26–45.
  60. 生田 敬 (2014) 大山周辺のキバネセセリ. *ゆらぎあ*, 32: 4.
  61. 生田 敬 (2016) 鳥取県内におけるオオムラサキの分布. *ゆらぎあ*, 34: 6–8.
  62. Inoda, T., Inoda, Y. & Rullan, J. K. (2015) Larvae of the water scavenger beetle, *Hydrophilus acuminatus* (Coleoptera: Hydrophilidae) are specialist predators of snails. *European Journal of Entomology*, 112: 145–150.
  63. 井ノ上健 (2015) オオチャイロハナムグリの採集記録. *ゆらぎあ*, 33: 42–43.
  64. 井上敏明 (1996) 鳥取県中部における甲虫分布 (7). *ゆらぎあ*, 14: 8–12.
  65. 石山侑樹・森本涼介 (2021) 鳥取県大山におけるキボシツブゲンゴロウの記録. ホシザキグリーン財団研究報告, 24: 28.
  66. Ishizuka, A. (2002) A new species of *Isoperla* (Plecoptera, Perlodidae, Isoperlinae) from Japan. *Special Bulletin of the Japanese Society of Coleopterology*, 5: 87–95.
  67. 伊藤 寿 (2009) 鳥取県のホシミスジ. pp. 1–6. In: 「蝶学をめぐる諸問題・第3集」. タカオ・ゼミナール.
  68. 岩田久二雄 (1941) 日本内地産葉切蜂六種の習性考察. pp. 223–248. In: 紀元 2600 年高津中学記念論文集.
  69. 岩田久二雄 (1982) 日本蜂類生態図鑑. 講談社 (東京), 162 pp. + 84 plates
  70. 門脇久志 (1993) ニシカワトンボ・ヒウラカワトンボ. pp. 100–101. In: 鳥取県のすぐれた自然 (動物).
  71. 門脇久志 (1993) オオカワトンボ「中部群」・「中国群」, pp. 102–103. In: 鳥取県のすぐれた自然 (動物).
  72. 門脇久志 (1994) キリシマミドリシジミ. p. 53. In: 山陰むしの会 (編) 山陰のチョウたち. 山陰中央新報社, 207 pp.
  73. 門脇久志 (2012) ニホンカワトンボ. p. 82. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
  74. Kamite, Y. (2015) Revision of the genus *Optioservus* Sanderson, 1953, part 2: the *O. maculatus* species group (Coleoptera: Elmidae). *Koleopterologische Rundschau*, 85: 197–238.
  75. 神庭賢一 (2021) 日野町滝山公園湿地ビオトープのハッチョウトンボの生態について. *すかしば*, 68: 45–47.
  76. 神庭賢一 (2021) 鳥取県日野町の日野川流域でジャコウアゲハの発生を確認. *すかしば*, 68: 48.
  77. Katakura, H. (1997) Species of *Epilachna* ladybird beetles. *Zoological Science*, 14: 869–881.
  78. 加藤 学 (2017) 岡山県におけるフジガバチの記録と生息環境. *中国昆虫*, 30: 47–49.
  79. 香取郁夫・田丸真弓・横井智之 (2010) 送粉昆虫マイマイツツハナバチの営巣習性. *日本応用動物昆虫学会誌*, 54: 77–84.
  80. Katsuma, N. & Kuranishi, R. B. (2016) Redescription of *Triplectides misakianus* (Matsumura 1931) (Trichoptera, Leptoceridae) in Japan with notes on its habitat. *Zoosymposia*, 10: 234–242.
  81. Kawakami, Y. (1999) Geographic variation of the brachypterous grasshopper *Parapodisma setouchiensis* group in western Honshu, with its taxonomic revision. *Species Diversity*, 4: 43–61.
  82. 川上 靖 (2007) セトウチフキバッタ群 (直翅目バッタ科) の各地理型間にみられる「移行帯」とその形成過程の推定. *タクサ*, 22: 15–19.
  83. 川上 靖 (2010) 鳥取県岩美町鴨ヶ磯からのツマガロキチョウの記録. *山陰自然史研究*, 5: 82–83.
  84. 川上 靖・干村隆司 (2008) 鳥取県におけるニッポンハナダカバチ (アナバチ科) の分布. *山陰自然史研究*, 4: 17–22.
  85. 川上 靖・星川和夫 (2005) ダイリフキバッタ *Callopodisma dairisama* とセトウチフキバッタ *Parapodisma setouchiensis* の形態比較. *New Entomologist*, 54 (3, 4): 53–59.
  86. Kawakami, Y. & Tatsuta, H. (2010) Variation in the shape of genital appendages along a transect through sympatric and allopatric area of two brachypterous grasshoppers, *Parapodisma setouchiensis* and *Parapodisma subastris* (Orthoptera: Podisminae). *Annals of the Entomological Society of America*, 103 (3): 327–331.
  87. 河本哲至・井上敏明 (1978) 倉吉市周辺の甲虫. *すかしば*, 10: 5–16.
  88. 川野敬介・星川和夫 (2003) 卵塊の有無によるオオコオイムシ *Appasus major* (Esaki) 雄の移動性の違い. *中国昆虫*, 16: 55–58.
  89. 建設環境研究所 (2018) 千代川水辺現地調査 (陸上昆虫類等) 業務報告書.
  90. 衣笠弘直 (1973) 鳥取県東部のトンボ. 智頭地域を中心に. 32 pp. 著者謄写刷自刊.
  91. 衣笠弘直 (1996) 鳥取県国府町でタガメを採集. *すかしば*, 43/44: 72–73.
  92. 桐原佳介 (2012) 鳥取県西伯郡南部町におけるモート

- ンイトトンボの記録. 山陰自然史研究, 8: 31.
93. 桐原佳介(2012)ハッチョウトンボ. p. 88. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
94. 桐原佳介(2012)ウスバカマキリ. p. 90. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
95. 桐原佳介・菱谷眞一郎(2006)鳥取県米子市内におけるコオイムシの記録. 山陰自然史研究, 2: 20.
96. 桐原佳介・神谷 要(2006)鳥取県日野郡日野町葦池における水生昆虫および水草の記録. 山陰自然史研究, 2: 18-20.
97. 桐原佳介・菱谷眞一郎・菱谷泰志(2007)鳥取県米子市におけるオオクワガタの記録. 山陰自然史研究, 3: 15-16.
98. 桐原真希(2016)鳥取県南部町で確認されたキクメハシリグモの記録. 山陰自然史研究, 12: 19-20.
99. 北村彰造(1959)鳥取市付近のトンボについて. ヒサマツ未刊原稿, 5 pp.
100. 北山 拓・林 成多・大浜祥治(2018)鳥根県に生息するトンボ目の目録と生態写真集. ホシザキグリーン財団研究報告特別号, 22: 1-116.
101. 清末忠人(2009)鳥取県における3種の昆虫の新産地. ゆらぎあ, 27: 12-13.
102. 小林一彦(1968)鳥取県産蝶類目録. pp. 42-58. In: 昆虫類目録. 鳥取県立博物館.
103. 小林一彦(1983)ハマスズの小観察. 教材生物ニュース, 93: 77-89.
104. 小林一彦(1994)山陰地方のギフチョウとカンアオイ. pp.166-169. In: 「山陰のチョウたち」. 山陰中央新報社(松江市), 208 pp.
105. 小林一彦(2002)ハマスズ. p. 110. In: レッドデータブックとっとり(動物).
106. 小林一彦(2002)フクイアナバチ. p. 135. In: レッドデータブックとっとり(動物).
107. 小林一彦(2006)鳥取県の海浜性直翅目. すかしば, 54: 37-40.
108. 小林佳崇(2015)ルイヨウマダラテントウの鳥取県氷ノ山からの記録. 昆虫, 18: 104-105.
109. 国土交通省河川環境データベース <http://www.nilim.go.jp/lab/fbg/ksnkankyo/>
110. 国土交通省 中国地方整備局 倉吉河川国道事務所・株式会社ウエスコ(2020)平成31年度 天神川水辺現地調査(底生動物他)業務報告書【II. 底生動物調査】.
111. 近藤伸一(2012)ニホンジカ高密度地帯のノコンギク花畑に集中する多数のオオウラギンスジヒョウモン. きべりはむし, 35(1): 4-10.
112. 近藤伸一ほか(2018)西日本におけるシカの食害によるウスバシロチョウの衰退. 月刊むし, 568: 16-22.
113. Kuboki, M. (1981) Study on the Lepturine genus *Pidonia* Mulsant (Coleoptera, Cerambycidae), I. Kontyû, Tokyo, 49: 525-541.
114. 國井秀伸・星川和夫・高島育雄(2001)中海米子湾の彦名処理地における水生動植物相のモニタリング及び保全に関する調査研究結果報告書. 国土交通省中国地方建設局出雲工事事務所・鳥根大学汽水域研究センター.
115. 國本洗紀(1994)鳥取県中部地区トンボ目録II(1993~94年度分). ゆらぎあ, 12: 1-5.
116. 國本洗紀(1995)低山地帯蝶類の絶滅. pp. 220-223. 新編倉吉市史第4巻(自然・文化編).
117. 國本洗紀(2002)コノシメトンボの採集. ゆらぎあ, 20: 27.
118. 國本洗紀(2004)アオハダトンボの産地. ゆらぎあ 22: 21.
119. 國本洗紀(2004)ショウリョウバッタモドキの新産地. ゆらぎあ, 22: 22.
120. 國本洗紀(2005)コガタノゲンゴロウの生態(その1). ゆらぎあ, 23: 1-7.
121. 國本洗紀(2005)ショウリョウバッタモドキの新産地. ゆらぎあ, 23: 8.
122. 國本洗紀(2006)コガタノゲンゴロウの生態(その2). ゆらぎあ, 24: 1-6.
123. 國本洗紀(2007)コガタノゲンゴロウの生態(その3). ゆらぎあ, 25: 1-9.
124. 國本洗紀(2011)鳥取県のメスグロヒョウモンの記録. ゆらぎあ, 29: 25.
125. 國本洗紀(2013)鳥取県中部地区のトンボ5種の新産地. ゆらぎあ, 31: 47.
126. 國本洗紀(2014)コガタノゲンゴロウの生態(その7). ゆらぎあ, 32: 5-7.
127. 國本洗紀(2016)ミスジチョウの分布確認記録. ゆらぎあ, 34: 26.
128. 國本洗紀(2018)ミスジチョウ幼虫の威嚇行動. ゆらぎあ, 36: 28.
129. 國本洗紀・徳井昌康(1992)鳥取県中部のトンボ. ゆらぎあ, 10: 1-9.
130. Kurosawa, Y. (1963) Buprestid-fauna of eastern Asia, (Coleoptera)(5). Bull. natn. Sci. Mus., 6(2): 90-111.
131. Kurosawa, Y. (1985) Notes on the Oriental species of the coleopterous family Buprestidae (IV). Bull. natn. Sci. Mus., Tokyo, A, 11: 141-170.
132. 町田龍一郎(監修)・日本直翅類学会(編)(2016)日本産直翅類標準図鑑. 学研(東京), 384 pp.
133. 前田泰生(1978)日本産ツツハナバチ類の比較生態学的研究, 特に花粉媒介昆虫としての利用とマネージメントについて. 東北農業試験場研究報告, 57: 1-221.
134. 前田泰生(1980)マイマイツツハナバチの巣構造の補遺. 岩手虫乃會會報, 5: 1-4.
135. 前田泰生・皆木宏明(1999)キヌゲハキリバチの巣の構造. ホシザキグリーン財団研究報告, 3: 165-172.
136. 前田泰生・手塚俊行(1995)キオビホオナガズメバチの新分布地. 中国昆虫, 9: 31.
137. 前田泰生・郷原匡史・郷右近勝夫(2002)中国地方における有剣類4種の分布新記録. 中国昆虫, 15: 39-43.
138. 前田泰生・北村憲二・松本圭司・宮永龍一(2004)海浜における送粉生態系の保全に関する研究 2. 山陰地方の海浜性植物ハマゴウ(クマツヅラ科)における有剣類の送粉様式. ホシザキグリーン財団研究報告, 7: 275-303.
139. 間野隆裕・藤井 恒(2009)やどりが 特別号 日本産チョウ類の衰亡と保護 第6集. 日本鱗翅学会(東京), 267 pp.
140. 松原 至・三島寿雄(1982)7月を中心としたトンボの記録. すかしば, 16: 5-9.
141. 松田隆嗣・大對桂一・新部一太郎(2018)山陰地方におけるハマゴウノメイガの分布と生息の状況. すかしば 65: 1-4.
142. 松田隆嗣(2012)鳥取県大山におけるネズミホソバの採集記録. ホシザキグリーン財団研究報告特別号 7:



- 16.
143. 松田隆嗣 (2013) 鳥取県大山のダイセンセダカモクメについて. pp. 68–70. In: 谷田昌也 (編) 六虫会 25 周年記念誌 六虫会と中国地方の蛾類.
144. 松田裕一 (2016) 倉吉市でミスジチョウを採集. ゆらぎあ, 34: 23.
145. 松田裕一 (2017) 打吹山でミスジチョウの幼虫を採集. ゆらぎあ, 35: 30.
146. 松田裕一 (2021) ギンイチモンジセセリの第3化について. ゆらぎあ, 39: 30–31.
147. 松井悠樹 (2013) 鳥取県東部で採集した蛾類 II. ゆらぎあ, 31: 22–33.
148. 松井悠樹 (2014) 鳥取県東部で採集した蛾類 III. ゆらぎあ, 32: 30–46.
149. 松井悠樹 (2015) 鳥取県東部で採集した蛾類 IV. ゆらぎあ, 33: 16–28.
150. 松井悠樹 (2018) 鳥取県中・東部におけるハマゴウノメイガの記録. すかしば, 66: 34–35.
151. 松井悠樹 (2020) 鳥取県でオビグロスズメを採集. 月刊むし, 594: 50.
152. 松井悠樹 (2020) 鳥取県初記録となるキュウシュウマエアカシロヨトウを採集. ゆらぎあ, 38: 32.
153. 松井悠樹, 土井美春, 中秀司 (2018) ギンヒゲナガの産卵行動と交尾個体の観察例. 蛾類通信, 285: 237–238.
154. 松本和馬・富岡康浩 (2009) 関東地方西部でヤマブキノソウを寄主植物とするルイヨウマダラテントウの分布および近隣の同種集団との関係. 昆虫, 12: 73–83.
155. 松本史樹郎 (2014) 友の会合宿「蒜山・大山」の報告. Nature Study, 60 (12): 6.
156. 松岡嘉之 (2009) 新大山の蝶. 自刊, 294 pp.
157. 松村松年 (1931) ダイセンセダカモクメ. p.784. In: 松村松年 (著) 日本昆虫大図鑑. 刀江書院 (東京), 1497 pp.
158. 松浦 誠 (1995) 社会性カリバチの生態と進化. 北海道大学図書出版会 (札幌), 353 pp.
159. 松浦 誠・山根正気 (1984) スズメバチ類の比較行動学. 北海道大学図書出版会 (札幌), 428 pp.
160. 三島秀夫 (2017) 島根県で採集されたガ数種について. 島根県立三瓶自然館研究報告 15: 77–81.
161. 三島秀夫 (2020) キバネツノトンボを三瓶草原で撮影. すかしば, 67: 46.
162. 三島寿雄 (1980) 鳥取県のトンボ. すかしば, 14: 21–33.
163. 三島寿雄 (1997) 米子市と周辺のオオヒカゲ. すかしば, 45: 17–45.
164. 三島寿雄 (1998) ムスジイトトンボ米子市に産する. すかしば, 46: 18–19.
165. 三島寿雄 (1998) 米子市の昆虫類. pp. 384–428. 「新修米子市史第6巻自然篇」. 米子市, 435pp.
166. 三島寿雄 (2000) 日野川のチョウ. pp. 225–242. In: 「日野川の自然」. 富士書店 (鳥取市), 268 pp.
167. 三島寿雄・松岡嘉之 (1979) 大山の蝶. 米子今井書店 (米子市), 206 pp.
168. 三島寿雄・野村幸弘 (1993) タガメ. pp. 132–133. In: 鳥取県のすぐれた自然 (動物).
169. 三宅誠治 (2007) 中国地方のクロミドリシジミ. 月刊むし, 437: 42–47.
170. 三宅誠治 (2015) 福田元信氏の蝶類標本目録と所見. 倉敷自然史博物館研究報告, 30: 5–16.
171. 三宅誠治 (2021) 岡山県に於けるスギタニルリシジミの生息状況. 倉敷市立自然史博物館研究報告, 36: 35–68.
172. 宮永龍一 (2012) 鳥取県浦富海岸とその周辺の有剣類 (膜翅目) の記録. 山陰自然史研究, 7: 21–23.
173. 宮永龍一・石田善彦・北条竜也・吉田紗希・Adhikari, R. D. (2014) 鳥取砂丘のハマゴウ群落におけるキヌゲハキリバチ花資源利用様式. 中国昆虫, 27: 27–39.
174. 宮武頼夫 編 (1996) 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録第28集. 青木浩 昆虫コレクション目録. 大阪市立自然史博物館, 132 pp.
175. Morimoto, R. & Hayashi, M. (2020) Life cycle of an endangered riffle beetle, *Leptelmis gracilis* Sharp (Coleoptera: Elmidae), in the Hiikawa River system, Shimane prefecture, Japan. Entomological Science, 23: 445–452.
176. 森山 孝 (2021) 大山の赤松池でコムラサキ, ギンイチモンジセセリを撮影. すかしば, 68: 60.
177. 守安 敦 (2002) ヒロシマサナエの新産地. 昆虫と自然, 37 (14): 43.
178. 守安 敦 (2004) 岡山県から鳥取県に生息するヒロシマサナエの生態. AESCHNA, 41: 15–23.
179. 村上賀史 (2019) 鳥取県八頭町でミドリシジミを発見. すかしば, 66: 30.
180. 村上賀史・鳥越康教 (1986) ホシミスジの鳥取県における記録. すかしば, 26: 11.
181. 永幡嘉之 (1993) 鳥取市郊外におけるタガメの採集記録について. 因幡のむし, 28: 8–9.
182. 永幡嘉之 (1994) 浜坂町城山・初秋の蝶. Iratsume, 18: 44–48.
183. 永幡嘉之 (2012) 鳥取平野のオサムシ分布資料. すかしば, 41/42: 1–9.
184. 永幡嘉之 (2012) アカエゾゼミ. p. 96. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
185. 永幡嘉之 (2012) ハルゼミ. p. 97. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
186. 永幡嘉之 (2012) ヒメハルゼミ. p. 97. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
187. 永幡嘉之 (2012) ホソハンミョウ. p. 98. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
188. 永幡嘉之 (2012) クロゲンゴロウ. p. 101. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
189. 永幡嘉之 (2012) マルガタゲンゴロウ. p. 101. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
190. 永幡嘉之 (2012) ゲンゴロウ. p. 102. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
191. 永幡嘉之 (2012) ダイコクコガネ. p. 103. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
192. 永幡嘉之 (2012) ミヤマダイコクコガネ. p. 103. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
193. 永幡嘉之 (2012) ヒメビロウドカミキリ. p. 107. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
194. 永幡嘉之 (2012) フサヒゲルチカミキリ. p. 107. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
195. 永幡嘉之 (2012) アサカミキリ. p. 108. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
196. 永幡嘉之 (2012) キバネセセリ. p. 112. In: レッドデータブックとっとり改訂版.

197. 永幡嘉之 (2012) コキマダラセセリ. p. 113. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
198. 永幡嘉之 (2012) スジグロチャバネセセリ. p. 113. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
199. 永幡嘉之 (2012) ホシシチャバネセセリ. p. 113. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
200. 永幡嘉之 (2012) スジボソヤマキチョウ. p. 115. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
201. 永幡嘉之 (2012) ミドリシジミ. p. 116. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
202. 永幡嘉之 (2012) ミヤマカラスシジミ. p. 118. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
203. 永幡嘉之 (2012) クロシジミ. p. 119. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
204. 永幡嘉之 (2012) ゴマシジミ. p. 119. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
205. 永幡嘉之 (2012) シルビアシジミ. p. 119. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
206. 永幡嘉之 (2012) ウスイロヒョウモンモドキ. p. 120. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
207. 永幡嘉之 (2012) ヒメシジミ. p. 120. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
208. 永幡嘉之 (2012) ウラギンスジヒョウモン. p. 121. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
209. 永幡嘉之 (2012) ヒョウモンモドキ. p. 121. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
210. 永幡嘉之 (2012) メスグロヒョウモン. p. 121. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
211. 永幡嘉之 (2012) クモガタヒョウモン. p. 122. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
212. 永幡嘉之 (2012) シータテハ. p. 123. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
213. 永幡嘉之 (2012) キマダラモドキ. p. 124. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
214. 永幡嘉之 (2012) ヒメヒカゲ. p. 124. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
215. 永幡嘉之 (2016) 里山の歴史を探る (6). 月刊むし, 547: 6-12.
216. 永幡嘉之 (2019) フサヒゲルリカミキリの生態. 月刊むし, 585: 2-12.
217. 永幡嘉之・林 成多 (2012) スゲハムシ. p. 108. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
218. 永幡嘉之・日暮卓志 (2017) 鳥取県におけるネアカヨシヤンマの採集記録. すかしば, 64: 5.
219. 永幡嘉之・川上 靖 (2012) オオクワガタ. p. 102. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
220. 永幡嘉之・佐藤隆士 (2012) ハラビロハンミョウ. P. 98. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
221. 永富 昭・大石久志 (2001) 日本産タマユラアブの同定. はなあぶ, 12: 15-38.
222. 中井博喜 (2015) 伯耆町でスジグロチャバネセセリ♂を採集. すかしば, 62: 48-49.
223. 中嶋智子・分銅絵美・岡 誠一・片山哲郎・横田 景・越智広志・山田一成 (2015) 京都府内陸部におけるドロバチモドキ科のスナバチ3種の分布記録と営巣習性. 京都府保環研年報, 60: 39-43.
224. 中峰 空 (2016) カマキリ目. pp. 198-205. In: 日本直翅類学会 (編) 日本産直翅類標準図鑑. 学研プラス (東京), 384 pp.
225. 中村康弘 (2021) ネオニコチノイド系農薬の自然界への影響. チョウの舞う自然, 31: 4-7.
226. 中野一成 (2017) 鳥取県江府町でアカネクスジトラカミキリを採集. ゆらぎあ, 35: 23.
227. 中野一成 (2019) 伯耆大山でアカエゾゼミ橙色型を採集. ゆらぎあ, 37: 38.
228. 中島 淳, 日本産真正水生昆虫リスト: <http://kuromushiya.com/mlist/mlist.html> (2021年10月27日閲覧)
229. 公益財団法人中海水鳥国際交流基金財団 (2008) 平成19年度米子水鳥公園事業報告書. 130 pp.
230. 公益財団法人中海水鳥国際交流基金財団 (2017) 平成28年度米子水鳥公園事業報告書, II. 中海水鳥国際交流基金財団事業報告, 3. 調査研究事業, (5) その他動物類の確認記録. pp. 39-48.
231. 公益財団法人中海水鳥国際交流基金財団 (2019) 平成30年度米子水鳥公園事業報告書. p. 42.
232. 公益財団法人中海水鳥国際交流基金財団 (2020) 平成31年度事業報告書, II -3 (5). 米子水鳥公園.
233. 公益財団法人中海水鳥国際交流基金財団 (2021) 令和2年度米子水鳥公園事業報告書. p. 48.
234. 中山 桂・板井竜二郎・井上健人・柏木峻秀・鶴崎展巨 (2015) 山陰海岸ジオパークエリア内における海浜性ウスバカゲロウ類の分布 (予報): 京都府・兵庫県. 山陰自然史研究, 11: 55-64.
235. 那須 敏・山地 治 (1976) 高鉢山 (鳥取県) のカミキリムシ. すずむし, 113: 18-30.
236. 西 真弘・安達隆昌・秋山美文 (2001) ヒロシマサナエを比婆郡で採集. 比婆科学, 201: 43.
237. 西川正明 (2014) シデムシ科. In: 初宿成彦 (編) 大阪市立自然史博物館資料目録第46集大阪市立自然史博物館 所蔵 甲虫類目録 (3). 大阪市立自然史博物館, 200 pp.
238. 西尾規孝 (2011) ニッポンアミカモドキの生態 (ハエ目, アミカモドキ科). 昆虫と自然, 46 (6): 26-29.
239. 新田涼平・吉富博之 (2012) 日本産ゴマフガムシ属 *Berosus* (コウチュウ目, ガムシ科) の分類学的再検討. SAYABANE N.S., 7: 18-31.
240. 野津幸夫 (2011) 鳥取県におけるホソハンミョウの再発見. ゆらぎあ, 29: 12-14.
241. 野津幸夫 (2012) 鳥取県で採集した記録の少ない甲虫3種. ークロガネネクイハムシ, トゲニセマガソコガネ, マダラクワガタ. ゆらぎあ, 30: 17-20.
242. 野津幸夫 (2014) 瓜菜沢放牧場のトンボ類. ゆらぎあ, 32: 80-81.
243. 野津幸夫・中野一成 (2019) 鳥取県にマグソクワガタ産する (前編). ゆらぎあ, 37: 1-4.
244. 野津幸夫・田村昭夫 (2014) 大山60年ぶりに発見したキバネセセリ. ゆらぎあ, 32: 1-4.
245. 野澤雅美・山田量崇 (2020) 積み枯葉から発見された多数のズイムシハナカメムシ. *Rostria*, 65: 61-63.
246. 尾原和夫 (2012) オオミズムシ. p. 95. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
247. 尾原和夫 (2012) ヒメミズカマキリ. p. 96. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
248. 小川弘展・野坂 舞・橋井菜都美・横山瑞歩・鶴崎展巨 (2012) 鳥取砂丘における2011年の昆虫類調査の記録と“砂丘オアシス”の動物相. 山陰自然史研究, 7: 31-40.

249. 小椋 隆 (2016) 大山におけるヒサマツミドリシジミの採集記録. ゆらぎあ, 34: 22.
250. 小椋 隆 (2020) 鳥取市国府町でオオムラサキ♀を採集. ゆらぎあ, 38: 34.
251. 岡田珠美・佐藤隆士 (2010) 氷ノ山 (鳥取県若桜町) からのキオビホオナガスズメバチ *Dolichovespula media sugare* の営巣の発見. 山陰自然史研究, 5: 83-84.
252. 岡本 詢 (1958) *Simulium* (*Boophthora*) *yonagoense* n. sp. について. 衛生動物, 9: 39-45.
253. 岡本 詢 (1958) 山陰に於けるブユの生態 (III). 衛生動物, 9: 75.
254. 岡本 詢 (1958) 山陰地方に於ける蚋の種類と分布に関する研究. 米子医学雑誌, 9: 566-579.
255. 奥島雄一 (2002) 絵とき検索 日本産ジョウカイボン種群. 昆虫と自然, 37 (4): 26-28.
256. Okushima, Y. (2005) A taxonomic study on the genus *Lycocerus* (Coleoptera, Cantharidae) from Japan, with zoogeographical considerations. Japanese Journal of Systematic Entomology, Monographic Series, 2: 1-383.
257. 奥島雄一・佐藤正孝・石田勝義 (2001) ジョウカイボンとその近縁種の分類学的再検討. pp. 305-325. In: 穂積俊文博士記念論文集, 東海甲虫誌. 穂積俊文博士記念論文集発行事業会 (豊橋市).
258. 大生唯統 (2017) 鳥取県東部でカワラゴミムシを採集. ゆらぎあ, 35: 28-29.
259. 大生唯統 (2017) 鳥取県東部でヒメミズカマキリを採集. ゆらぎあ, 35: 29. ※著者名が「小椋隆」と誤記されている.
260. 大生唯統 (2019) 鳥取市でマイコトラガを採集. ゆらぎあ, 37: 56.
261. 大生唯統 (2019) 鳥取県におけるウデワユミアシサシガメの記録. すかしば, 66: 18.
262. 大生唯統 (2020) 鳥取県鳥取市 (千代川) におけるクビナガヨツボシゴミムシの記録. すかしば, 67: 63.
263. 大生唯統 (2022) 鳥取県におけるキイロコガシラミズムシの初記録と冬季の成虫確認例について. ホシザキグリーン財団研究報告, 25 (印刷中).
264. 大生唯統・松井悠樹・山岸瑞樹 (2019) 鳥取県東部に於けるとヨツボシカミキリの近年の動向. 月刊むし, 580: 52-53.
265. 大浜祥治 (2013) 鳥取県初記録のタイワンウチワヤンマを境港市で採集. すかしば, 60: 42.
266. 大浜祥治・樋野耕一 (2021) ヒロシマサナエを鳥根県東部から記録. すかしば, 68: 53.
267. 大桃定洋・福富宏和 (2013) 日本産タマムシ大図鑑. むし社 (東京), 206 pp.
268. 長田庸平・田村昭夫 (2019) 大山榭水高原でゴマシジミとミヤマチャバネセセリを撮影. ゆらぎあ, 37: 48.
269. 大島康宏・苅部治紀 (2001) 岡山県で発見された *Davidius moiwanus sawanoi*. TOMBO, 43: 12-13.
270. 尾園 暁・川島逸郎・二橋 亮 (2021) 日本のトンボ. 改訂版. 文一総合出版 (東京), 531 pp.
271. 酒井 香・藤岡昌介・稲垣政志 (2007) 日本産コガネムシ上科図説. 第2巻 食葉群 1. 昆虫文献六本脚 (東京), 173 pp.
272. 坂田国嗣 (2004) メスグロヒョウモン・ウラナミアカシジミ確認. すかしば, 52: 26.
273. 坂田国嗣 (2005) 鳥取県でクロミドリシジミ初記録される. すかしば, 53: 13.
274. 坂田国嗣 (2017) スギタニルリシジミの遅い記録. すかしば, 64: 55.
275. 坂田国嗣・大浜祥治 (2020) キバネツノトンボ, 鳥取県大山山麓に産す. すかしば, 67: 73.
276. 坂田 勉 (1989) 1988年度の採集記録. 因幡のむし, 24: 17-23.
277. 阪田睦子 (2012) ニホンアミカモドキ. p.110. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
278. 山陰むしの会 (編) (1993) 山陰のトンボ. 山陰中央新報社 (松江市), 207 pp.
279. 山陰むしの会 (編) (1994) 山陰のチョウたち. 山陰中央新報社 (松江市), 207 pp.
280. 佐々木 明夫 (2013) オオメイガ亜科. pp. 397-400. In: 那須義次, 広渡俊哉, 岸田康則 (編) 日本産蛾類標準図鑑 IV: 学研教育出版 (東京), 551 pp.
281. 佐々木英之 (2009) 伯耆大山におけるミヤマカラスシジミの観察例. ゆらぎあ, 27: 10-11.
282. 佐々木英之 (2019) 三朝町小鹿溪で生息確認したゼフィルス. ゆらぎあ, 37: 51-52.
283. 佐藤隆士 (2012) ゴヘイニクバエ. p. 109. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
284. 佐藤隆士・川上 靖 (2009) 佐藤博巳昆虫コレクション目録. 鳥取県立博物館研究報告, 46: 51-72.
285. 佐藤隆士・小林佳崇 (2010) 2006年から2009年に確認された鳥取県の希少なチョウ類10種の記録. 山陰自然史研究, 5: 78-82.
286. 佐藤隆士・鶴崎展巨 (2010) 鳥取砂丘の昆虫相 (予報). 鳥取県立博物館研究報告, 47: 45-81.
287. Satoh, A., Ueda, T., Enokido, Y., Hori, M. (2003) Patterns of species assemblages and geographical distributions associated with mandible size differences in coastal tiger beetles in Japan. Population Ecology, 45: 67-74.
288. 佐藤隆士・田村昭夫・長谷川寿一・國本洗紀・川上靖 (2007) 鳥取県の直翅系昆虫. 鳥取県立博物館研究報告, 44: 9-36.
289. 佐藤隆士・和田年史・岡 努・川上 靖 (2007) 鳥取市久松公園からのオオクワガタの採集記録. 山陰自然史研究, 3: 316-17.
290. 佐藤隆士・小林佳奈・岡田珠美・田中俊平・田中哲也 (2011) 鳥取県内からの2010年のセグロイナゴ *Shirakiacris shirakii* の記録. 山陰自然史研究, 6: 56-58.
291. 瀬戸貴代美・星川和夫 (2002) ジュウクホシテントウの生態に関する若干の知見. 中国昆虫, 15: 53-56.
292. 渋谷寿夫 (1939) 蝸牛の空殻の中に営巣する *Osmia orientalis* Benoist とその敵虫イワタマルセイボウ *Chrysis* (*Hoplochrysis*) sp. と習性. むし, 12: 41-455.
293. 清水太郎 (2021) 鳥取県東部からのアカエゾゼミの追加記録. Cicada, 28 (1): 5.
294. 清水高男・稲田和久・内田臣一 (2018) カワゲラ目. pp. 271-329. In: 川合禎次・谷田一三 (編) 日本産水生昆虫 第2版, 東海大学出版会 (平塚市), 1752 pp.
295. 下雅意公夫 (2006) 鳥取市でホシミスジ採集. ゆらぎあ, 24: 25.
296. 初宿成彦 (編) (2011) 大阪市立自然史博物館所蔵甲虫目録 (1) ゲンゴロウ科・ゴミムシダマシ科・ナガクチキムシ科. 大阪市立自然史博物館 (大阪). 197 pp.
297. 祖田 周 (1993) 鳥取県西部のトンボ. すかしば, 39/40: 37-44.
298. Sota, T., Liang, H., Enokido, Y., Hori, M. (2011) Phylogeny

- and divergence time of island tiger beetles of the genus *Cylindera* (Coleoptera: Cicindelidae) in East Asia. *Biological Journal of the Linnean Society*, 102: 715–727.
299. 鈴木邦雄 (1998) 日本産カワトンボ属 (均翅亜目, カワトンボ科) の分類, 地理的分布および地理的変異 (概説). *ホシザキグリーン財団研究報告*, 2: 289–314.
300. 鈴木邦雄 (2003) 'カワトンボ線' の動物地理学的意義—日本産カワトンボ属 (トンボ目, カワトンボ科) の分類と地理的分布—. In: 川上靖 (編) 特別展「世界どうぶつ物語」展示解説書, 鳥取県立博物館, 60 pp.
301. Suzuki, K. & Kadowaki, H. (1988) Geographical distribution of *Mnais* in Tottori Prefecture, Chugoku District, Honshu, Southwest Japan (I). *J. Coll. Lib. Arts, Toyama Univ. (Nat. Sci.)*, 21: 1–17.
302. 高橋 匡 (1962) 鳥取砂丘の環境と昆虫. *砂丘研究*, 8: 39–60.
303. 高橋 匡 (1964) 鳥取砂丘昆虫目録 (第2報). *砂丘研究*, 10: 29–38.
304. 高岡宏行 (2005) ブユ科, pp. 291–295. In: 学研編集部 (編) 日本産幼虫図鑑, 学研 (東京). 240 pp.
305. 高島 昭 (2001) 兵庫県のカワトンボ科 (兵庫県産蛾類分布資料・22). *きべりはむし* 29 (2): 31–39.
306. 竹井 一 (2011) 鳥取県のウラナミジャノメを巡って. *月刊むし*, 484: 2–8.
307. 竹内 亮 (1993) ヒサマツミドリシジミ. pp. 156–157. In: 鳥取県のすぐれた自然 (動物).
308. 竹内 亮 (1993) キリシマミドリシジミ. pp. 158–159. In: 鳥取県のすぐれた自然 (動物).
309. 竹内 亮 (1993) ヒロオビミドリシジミ. pp. 160–161. In: 鳥取県のすぐれた自然 (動物).
310. 竹内 亮 (1994) 久松山とヒサマツミドリシジミ. pp. 170–171. In: 山陰のチョウたち. 山陰中央新報社 (松江市), 208 pp.
311. 田村昭夫 (2010) フクイアナバチとニッポンハナダカバチの記録. *ゆらぎあ*, 28: 28.
312. 田村昭夫 (2012) ツマグロキチョウ. p. 114. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
313. 田村昭夫 (2012) ウラナミアカシジミ. p. 115. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
314. 田村昭夫 (2015) 倉吉市小鴨川河川敷のフチグロトゲエダシャクの生態. *ゆらぎあ*, 33: 29–30.
315. 田村昭夫 (2016) メスグロヒョウモンを倉吉市で採集. *ゆらぎあ*, 34: 22.
316. 田村昭夫 (2016) 鳥取県. pp. 258–269. In: やどりが特別号 日本産チョウ類の衰退と保護 第7集. 日本鱗翅学会, 351 pp.
317. 田村昭夫 (2017) 打吹公園でミスジチョウを拾得. *ゆらぎあ*, 35: 31
318. 田村昭夫 (2019) 大山滝のアイヌハンミョウの記録. *ゆらぎあ*, 37: 50.
319. 田村昭夫 (2019) 八頭町のオオムラサキの記録. *ゆらぎあ*, 37: 56–57.
320. 田村昭夫・源 満男 (2013) フチグロトゲエダシャク鳥取県の記録. *ゆらぎあ*, 31: 21–22.
321. 田村昭夫・山脇清高 (2013) 鳥取県におけるセミの色彩変異. *月刊むし*, 511: 35–38.
322. 田村昭夫・矢野重明 (2013) マイコトラガを採集. *ゆらぎあ*, 31: 49.
323. 田村昭夫・各務一夫・谷田昌也・松井悠樹・宮野昭彦・矢野重明・山本千里 (2016) 2016年鳥取六虫会 (第31回六虫会) で採集した蛾類. *ゆらぎあ*, 34: 1–6.
324. 田中宏卓 (2012) 浦富海岸東浜 (鳥取県) からのツマグロキチョウの確認記録. *山陰自然史研究*, 8: 34–35.
325. 田中宏卓・山根大河・山口勇人 (2014) 久松山 (鳥取市) とその周辺地域における2012年のチョウ類の記録. *山陰自然史研究*, 10: 1–5.
326. 寺山 守・須田博久 (編) (2016) 日本産有剣ハチ類図鑑. 東海大学出版部 (東京), 735 pp.
327. 戸田賢二・鶴崎展巨 (2010) 鳥取県の海浜性ウスバカゲロウ類の1990–1991年における分布と生息地の砂の粒度. *山陰自然史研究*, 5: 29–33.
328. 鳥越康教 (1994) 天然記念物キマダラルリツバメの一生. pp. 162–165. In: 山陰のチョウたち. 山陰中央新報社 (松江市) 208 pp.
329. 鳥越康教 (2015) 「鳥取砂丘のキマダラルリツバメ」. 255 pp. 自刊.
330. Tsuda, M. (1942) Japanische Trichopteren I. Systematik. *Memoirs of the College of Science, Kyoto Imperial University, Series B*, 17: 239–339.
331. 常木勝次 (1948) はなだか蜂研究記. 札幌講談社 (札幌市), 303 pp.
332. Tsuneki, K. (1956, 1957, 1958) Ethological studies on *Bembix nipponica* Smith, with emphasis on the psychobiological analysis of behavior inside the nest (Hymenoptera. Sphecidae). Parts I, II, III. *The Memoirs of the Faculty of Liberal Arts, Fukui University. Series II. Natural Science*, 6: 77–172, 4 pls.; 7: 1–115; 8: 1–78, 4 pls.
333. 鶴 智之・川上 靖 (2021) 鳥取県立博物館に寄贈された田村豊實チョウ類コレクション目録. *鳥取県立博物館研究報告*, 58: 49–101.
334. 鶴崎展巨 (2008) 島根県と福岡県における海浜性アリジゴク (脈翅目: ウスバカゲロウ科) の分布. *すかしば*, 56: 33–36.
335. 鶴崎展巨 (2012) オオチャイロハナムグリ. p. 103. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
336. 鶴崎展巨 (2015) 崖っぶちの海岸性昆虫. *昆虫と自然*, 50: 2–3.
337. 鶴崎展巨 (2020) エリザハンミョウ鳥取砂丘集団の個体数の危機的な減少. —2018年の標識再捕調査結果—. *山陰自然史研究*, 16: 1–7.
338. 鶴崎展巨 (2021) 鳥取砂丘の希少昆虫 (ハンミョウとアリジゴク) の生態学と保全. *海洋と生物*, 43 (1): 50–57.
339. 鶴崎展巨・林 成多・宮永龍一・一澤 圭・川上 靖 (2012) 鳥取砂丘の昆虫類目録. *山陰自然史研究*, 7: 47–82.
340. 鶴崎展巨・川上大地・太田嵩士・藤崎謙人・坂本千紘 (2015) 鳥取砂丘におけるハンミョウ類の分布・生活史と1種の絶滅. *山陰自然史研究*, 11: 33–44.
341. 鶴崎展巨・岡田 叡・沓野高也・深澤豊武・湯本祥平 (2016) 鳥取砂丘におけるエリザハンミョウの個体数推定 (2015年). *山陰自然史研究*, 13: 1–10.
342. 鶴崎展巨・中山 桂・板井竜二郎・井上健人・柏木峻秀 (2016) 山陰海岸ジオパークエリア内における海浜性ウスバカゲロウ類の分布. *山陰自然史研究*, 13: 11–24.
343. 鶴崎展巨・唐沢重考・柴田祥明・飯田礼康・越田佳苗・

- 塚本鎌平・長谷川和樹・福井順也・村瀬真史・和田将典 (2017) 鳥取砂丘におけるハンミョウ2種の成虫の季節消長とエリザハンミョウの個体数推定 (2016年). 山陰自然史研究, 14: pp. 9-16.
344. 鶴崎展巨・唐沢重考・石川智也・猪野真也・岸田由幹・白岩颯一郎・千葉悠輔・服部理貴・福井二葉・武藤諒 (2020) 鳥取砂丘の希少ハチ類数種の記録とニッポンハナダカバチの営巣地. 山陰自然史研究, 16: 9-22.
345. Uchida, S. and Isobe, Y. (1988) *Cryptoperla* and *Yoraperla* from Japan and Taiwan (Plecoptera: Peltoperlidae). *Aquatic Insect*, 10: 17-31.
346. 上田尚志 (1990) 日高町でナニワトンボを採集. *IRATSUME*, 13/14: 38.
347. 梅津一史 (2020) ヒメナミガタアオシャク. p. 79. In: 秋田県生活環境部自然保護課 (編) 秋田県レッドデータブック 2020 動物 II (哺乳類・昆虫類). 161pp.
348. Watanabe, K & Kamite, Y. (2020) First Records of *Japanolaccophilus niponensis* (Kamiya, 1939) (Coleoptera, Dytiscidae) larvae with ecological notes. *Elytra*, Tokyo, New Series, 10: 357-358.
349. 渡辺一雄・淀江賢一郎・難波通孝・山中捷二・後藤和夫 (2000) 中国地方におけるギフチョウ-分布図および分布論. ホシザキグリーン財団研究報告, 4: 225-237.
350. 渡辺一雄, 中西 淳, 後藤和夫, 管 哲郎, 岡村元昭 (2012) フチグロトゲエダシャク-山口県南西部における記録と生態. 山口のむし, 11: 57-71.
351. Watanabe, R., Ohba, S. & Yokoi, T. (2020) Feeding habits of the endangered Japanese diving beetle *Hydaticus bowringii* (Coleoptera: Dytiscidae) larvae in paddy fields and implications for its conservation. *European Journal of Entomology*, 117: 430-441.
352. ウエスコ (2017) 平成 28 年度天神川水辺現地調査 (陸上昆虫等) 業務報告書.
353. ウエスコ (2020) 平成 31 年度 天神川水辺現地調査 (底生動物他) 業務報告書 (II. 底生動物調査). 国土交通省中国地方整備局倉吉河川国道事務所.
354. 屋宜禎央・広渡俊哉 (2019) 英彦山の異なる森林植生におけるライトトラップを用いたガ類群集調査. 環動昆, 30: 71-101.
355. 山岸瑞樹 (2018) 西日本で稀なアカミヤクノメイガ, エゾキイロキリガを採集. ゆらぎあ, 36: 3-4.
356. 山岸瑞樹 (2019) 鳥取県で採集した蛾類リスト (I). ゆらぎあ, 37: 12-17.
357. 山岸瑞樹・松井悠樹 (2020) 鳥取県におけるヒメビロウドカミキリの記録. ゆらぎあ, 38: 33-34.
358. 山地 治 (2012) アカネキスジトラカミキリ. p. 107. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
359. of background-matching camouflage among geographical populations in the sandy beach tiger beetle. *Proceedings of the Royal Society, B.*, 287:1-10.
360. 山根正気・幾留秀一・寺山 守 (1999) 南西諸島産有剣ハチ・アリ類検索図説. 北海道大学図書刊行会 (札幌), 831 pp.
361. 山脇清高 (1995) 鳥取県中部でのオオクワガタの記録. ゆらぎあ, 13: 14.
362. 山崎裕志 (2015) 群馬県におけるヒウラヒサゴナガカメムシの記録. 月刊むし, 536: 61.
363. 山崎哲郎 (1997) 西日本のキマダラルリツバメ (5). 蝶研フィールド, 12 (1): 4-11.
364. 矢野重明 (2008) 鳥取県西部産蛾類資料 (2). ゆらぎあ, 26: 4-8.
365. 矢野重明 (2010) 鳥取県西部産蛾類資料 (4). ドクガ科. ゆらぎあ, 28: 9-11.
366. 矢野重明 (2011) 鳥取県西部産蛾類資料 (5). ゆらぎあ, 29: 14-19.
367. 矢野重明 (2012) ウスジロドクガ. p. 126. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
368. 矢野重明 (2012) ミヤマハガタヨトウ. p. 126. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
369. 矢野重明 (2012) クロビロードヨトウ. p. 127. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
370. 矢野重明 (2012) コシロシタバ. p. 127. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
371. 矢野重明 (2014) 鳥取県西部産蛾類資料 (6). ゆらぎあ, 32: 19-30.
372. 安田達史 (1995) 米子市周辺のオオヒカゲの採集記録. すかしば, 41/42: 58.
373. 易 希陶 (1933) 日本産アミカモドキの観察. 台湾博物学会会報, 23: 1-269 + 6 pls.
374. 尹 振国・鶴崎展巨 (2016) 多鯰ヶ池と鳥取市大塚のため池のトンボ相. 山陰自然史研究, 13: 25-35.
375. 淀江賢一郎 (1994) オナガシジミ. p. 43. In: 山陰のチョウたち. 山陰中央新報社 (松江市), 208 pp.
376. 淀江賢一郎 (1997) オオウラギンヒョウモン. pp. 172-173. In: しまねレッドデータブック (動物), 島根県景観自然課.
377. 淀江賢一郎 (2017) 日南町花見山でヒサマツミドリシジミを採集. すかしば, 64: 40.
378. 淀江賢一郎・尾原和夫・祖田 周 (2000) 鳥取県会見町の昆虫類. すかしば, 48: 1-25.
379. 淀江賢一郎・田中宏卓・川上 靖 (2017) 三島寿雄先生の蝶類研究と日本産蝶類コレクション-その特徴と意義-. 鳥取県立博物館研究報告, 54: 1-75.
380. 淀江賢一郎・中井博喜 (2010) 山陰地方における最近の蝶の話題.
381. Yokoi, T. (2012) Strongly biased sex ratio in cuckoo wasp *Chrysua hirsta* (Hymenoptera: Chrysididae), a parasite of the mason bee *Osmia orientalis*. *Entomological Science*, 15: 250-252.
382. 吉富博之・林 成多 (2020) キバネツノトンボ鳥根県で採集. ホシザキグリーン財団研究報告, 23: 22.
383. 吉安 裕 (2013) ミズメイガ亜科. pp. 400-408. In: 那須義次, 広渡俊哉, 岸田康則 (編) 日本産蛾類標準図鑑 IV: 学研教育出版 (東京), 551 pp.